南葵音楽文庫紀要

第3号

和歌山県立図書館

目次　CONTENTS

■論文・調査報告

・南葵音楽文庫の特徴と魅力－結
　―個人文庫における「私性」と「公共性」― 7
　美山良夫

・ミュージック・ライブラリーの夢
　南葵音楽図書館の成立と展開（3）
　―南葵音楽図書館館長徳川頼貞・その形成― 15
　林淑姫

・エフレム・ジンバリストと徳川頼貞
　―その交流と南葵音楽文庫所蔵資料― 23
　篠田大基

・カミングス文庫とW. H. カミングスをめぐって
　―カミングス文庫資料の来歴― 31
　佐々木勉

・オネゲルとスナール　―室内楽シリーズを中心に― 41
　近藤秀樹

■資料紹介

・《ヘンデル氏の作曲によるオペラ「リナルド」の歌曲集》初版楽譜 52
・クリストファー・シンプソン《ディヴィジョン・ヴァイオル奏者》
　とディヴィジョン関連資料 55
・アルベニス《スペイン風セレナータ》 58
・ジル＝マルシェックス編曲 リュリ《パサカイユ》 61
・ワインガルトナー《日本の歌》作品45 64
・徳川頼倫と音楽　―残された資料から― 72
・徳川頼貞自筆論稿3篇・目録 77

■関連歴史資料

・「冬の瑞西」　―徳川頼貞のスイス紀行― 80

■収蔵資料　目録と紹介

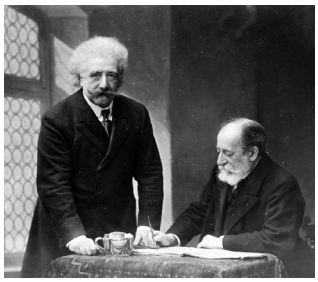
・スナール室内楽シリーズ　目録と解題 88

論文・調査報告

南葵音楽文庫の特徴と魅力 – 結
―個人文庫における「私性」と「公共性」―

美山良夫

8．ホルマン文庫の価値



ホルマンとサン＝サーンスの肖像
（ナダール写真館）

オランダ生まれの不世出のチェロ奏者、ジョセフ・コルネイユ・フーベルート・ホルマン Joseph Corneille Hubert Hollman（1852 ～ 1927 年）は、親友の作曲家カミーユ・サン＝サーンスの薦めもあって、1923 年徳川頼貞の招きで日本を訪れた。南葵楽堂をはじめ日本各地における演奏会は、彼の長い演奏活動の最後を飾るものであった。彼は愛奏してきたグァルネリウス作のチェロを日本に残し、パリの自宅にもどっていった。

帰国したあともホルマンと徳川頼貞の間には、手紙の往復があった。部分的に残されていた手紙からは、ホルマンが関東大震災に見舞われた頼貞を気遣い、頼貞に捧げた自作の出版に尽力している様子が窺える。

しかし、現在南葵音楽文庫に残されている 1000 点をこえるホルマン旧蔵楽譜が、何時どのようにパリから徳川頼貞のもとにもたらされたのかを具体的に証す資料は、見当たらない。

1929 年 4 月発行の『南葵音樂事業部摘要第一』（以下『摘要』）には、「徳川頼貞公の有に歸し更に本館に保管することになったものである」とのみ記されている[(1)]。したがって、ホルマンが世を去った 1927 年 1 月以降の比較的早い時期に準備がはじまり、遅くとも翌 1928 年には徳川頼貞のもとに届いていたと思料できる。また『摘要』の記述から、南葵音楽図書館が直接受贈したのではなく、頼貞が図書館に託した資料群という性格をもつ点も明らかである。頼貞は、蓄積された音楽関連資料のすべてを、音楽図書館に移して整理保管させたわけではない。個人的な交友やそこから生じた資料等は、自らの手許に残していた[(2)]。個人文庫あるいはそこから発展した私設図書館にあっては、設置者の私性と公共性との間で、大きな振幅や揺らぎがしばしば見られる。この点については、本稿の後段で触れることになろう。

『摘要』は、ホルマンが遺した楽譜全部であるとし、全部で 1030 点であると記している。この点数は、現

(1) 宮澤宗助『南葵音樂事業部摘要第一』南葵音楽図書館 ,1929. p.16.
(2) 徳川頼貞『薔庭樂話』(春陽堂 ,1943) には、個人のもとに残された資料から、音楽家の写真やサインの画像が掲載されている。

在「ホルマン文庫」として承継している数と、殆ど一致している。複本など数えかたの異同を考慮するなら、90 年余の間、一貫して欠損することなく保管されてきたと見なして良いであろう。1927 年 1 月 1 日に逝去したチェロ奏者の活動の証しが、そのまま凍結保存され、半世紀前には多くの楽譜が堅牢な厚紙バインダーに護られるようになり、現在に至っている (3)。

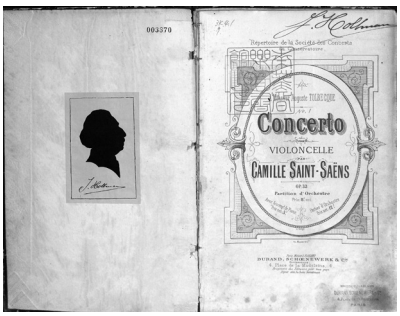
ホルマン文庫に含まれるそれぞれの楽譜について、書誌データは間もなく検索可能になろう。そのデータは総点数、作曲者名、作品名等に関する情報はもたらしてくれよう。しかしこの文庫がもつ価値や魅力は、それらのデータはほとんど語らない。ここでホルマン文庫の特徴や意義を紹介するにあたり、まずこの楽譜コレクションの特徴を概観し、内容を大別するところから始めよう。

(1)演奏活動の所産

ホルマン文庫は、なによりも演奏者の活動により生成されたコレクションである。ホルマンは、演奏活動の最初期にオーケストラの楽員であった時期があるが、その生涯のほとんどを独奏者として活動した。知られている限りでは、音楽学校の教員をつとめた経験はなく、個人的に教育活動を続けた記録も知られていない。演奏技巧の探究やそのための楽譜蒐集、教育活動のための教本や練習曲の所蔵は、その必要がなく、専ら演奏活動から蓄積された楽譜と見なすことができる。

この文庫はホルマンが最後に所蔵していた楽譜の全体である点もきわめて重要である。詳しい経緯は不明なものの、パリから搬出輸送にさいして、資料が選別された形跡はなく、最も稀少性がある資料や、複本も含まれたままである。『摘要』の記述にある、すべてを頼貞が受贈したという記述は、額面通りに受け取れるであろう。すなわち、19 世紀後半から 20 世紀はじめにかけて活動した音楽家のレパートリーを、曇りなく反映した鏡なのである。

第 3 の特徴は、ホルマン自身による楽譜の管理にある。彼は自らの所蔵になる楽譜に、顔のシルエットと署名を組み合わせた大小の蔵書票を貼っていた。それは、独奏チェロの楽譜だけでなく、ピアノ伴奏譜にも、また協奏曲であればスコア、すべてのパート譜に至るまで徹底している。またパートごとの冊数も記載されている。それゆえ、彼自身の所蔵ではなく、何らかの理由で混在して



サン＝サーンス《チェロ協奏曲第 1 番》タイトルページ
見返しにホルマンの蔵書票がある。

(3) ホルマン文庫が現在どのような状態で保管されているかについては、『南葵音楽文庫紀要』2 号 (2019),p.97 参照。

しまった楽譜があっても明確に区別でき、ホルマン旧蔵楽譜の範囲が確定できる[4]。

高名な演奏家に由来する楽譜を中心にしたコレクションは、少なからず存在する。国内にも、玉川大学教育博物館所蔵の「ガスパール・カサド 原智恵子コレクション」、東京藝術大学所蔵の「シモン・ゴールドベルク文庫」、同大学音楽学部声楽研究室寄託の「古澤淑子楽譜コレクション」等が、楽譜や楽譜を含むコレクションとして、それぞれ目録化されている[5]。

ホルマン文庫について特徴を概観し、3 点を指摘した。これをもって、ただちにホルマン自身が繰り返し演奏していたレパートリーそのものと結論するわけにはゆかない。楽譜そのものを手に取れば、頻用されたか否かは、多くの場合明々白々である。それにもかかわらず、ホルマンおよびその周辺に顕著な傾向を明らかにするうえで、有用であろう。たとえばバッハやブラームスの著名なチェロ作品の楽譜は、ほとんど見当たらない。他方、数多い小品やそれを数曲まとめた曲集には、ある共通点も見だせそうである。この点の論究は本稿の目的から逸れるので、専門家による調査研究を期待したい。

⑵音楽歴を映す鏡

ホルマン文庫は、演奏家が所蔵していた楽譜ではあるが、ホルマンが演奏に用いた楽譜に限られるわけではない。前述のように、頻繁に使用された例も、その逆もある。双方の間に明確な線引きをするのは困難であるが、特に繰り返し使用された楽譜の例を、全体から抜き出すのは容易である。ホルマンの「代名詞」ともいわれるサン＝サーンス《白鳥》のピアノ伴奏譜は、どれほど多くのピアニストがこの楽譜を用いてホルマンの伴奏をしたかを偲ばせる。

つぎに注目したいのは、楽譜の寄贈である。有名無名の作曲家が、自作のチェロ作品をホルマンに贈呈した。作曲者による献辞や日付、署名をともなった楽譜が、文庫には多数含まれている。ほとんどすべてが出版された印刷楽譜であるが、手稿楽譜も含まれている。こうした楽譜のなかには、演奏に供された形跡がみられない例も少なくない。

---

(4) ホルマンが徳川頼貞夫妻に献呈した《アンダンテとアレグロ》など、ホルマン文庫に含まれる楽譜と同一の楽譜を、南葵音楽図書館が所蔵している例がある。

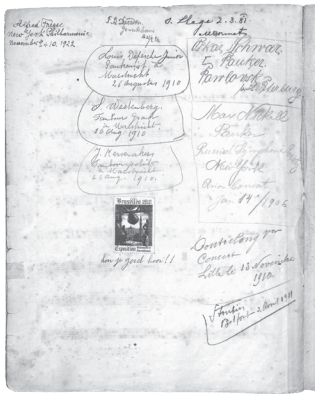
(5) J・ホルマンの楽譜資料は、G・カサド（1897 ～ 1966 年）、S・ゴールドベルク（1909 ～ 1993 年）、古澤淑子（1916 ～ 2001 年）に先立つ世代に属し、この時代の演奏家によるこの種のコレクションとしては、類例が乏しいのではないかと思われる。

現在、作曲ないし出版年と贈呈の日付との関係については、未調査のままであり、楽譜が手交されたのか送達されたのかは、楽譜に残された献辞から分かる例は乏しい。贈呈者である作曲家とホルマンとの交友関係は、多くの場合作曲者に関する情報を見つけるのが今では困難な状況にあり、未着手である。しかし、こうした点が解き明かされてゆけば、演奏家としてのホルマンが、その時代にどのような音楽家と見られていたかの理解につながろう。

さらに、贈呈楽譜のなかには、作品自体がホルマンに献呈された例も含まれている。サン＝サーンスの作品はその代表である。

第四点は、ホルマンの演奏解釈である。彼の演奏はいくつか録音が残されている。一方、彼が使用した楽譜には、フレージングやアーティキュレーション、自身のために記入した演奏上の留意点などを示す文字や記号が多数残されている。名チェロ奏者の演奏解釈を推量するうえで、代替えできない情報の宝庫といえるだろう。

最後に特筆したいのは、楽譜が作品演奏の歴史を証す貴重な資料でもある点である。たとえば 1872 年 11 月に作曲されたサン＝サーンスのチェロ協奏曲第 1 番の楽譜は、1873 年から翌年にかけて出版された。現在は各オーケストラがスコアとパート譜を所有し、ライブラリアンが管理しているが、19 世紀では一部のオーケストラをのぞき、独奏者がパート譜を含め楽譜一式を携行したのが通例であった。



サン＝サーンス《チェロ協奏曲第 1 番》ティンパニのパート譜
この譜面を実際に演奏に使用した各地のオーケストラの楽員がサインを残している。

ホルマン文庫に残されているスコアとパート譜は、ホルマンおよび彼が愛奏した楽器とともに世界を旅した。そのスコアには、指揮者によると思われる青鉛筆による書き込みが散見され、オーケストラ・パート譜にはホルマン独奏者に迎えて演奏したオーケストラ楽員が多数のサインを残し、日付や都市名ないしオーケストラの名称を併記している。そこから、ホルマンが同曲を何時どこで演奏したか、いわばホルマンによる演奏歴を復元できる [6]。作品出版後の演奏活動にかかわる資料は、演奏者ばかりでなく、その作品の受容についても示唆的でありうる点も付記しておきたい。

(3)作品の完成過程

作品が、特定の演奏者と深く結びついて生まれた例は、ブラームスがヴァイオリン協奏曲作曲にあたり、名奏者ヨアヒムの意見を訊いた例などが想起される。ホルマン

(6) 美山良夫「サン＝サーンス チェロ協奏曲第 1 番」『南葵音楽文庫紀要』2 号 (2019), p.70-71.

文庫の楽譜には、同様の過程を示している例がみられる。印刷出版に際して、試し刷り epreuve が作成され、そこに作曲者とともに初演者であるホルマンによる改訂ないし提案が記載されている例があり、出版にむけた最終段階での関与が残されている [7]。

⑷ホルマン自作の位置

委託事業のなかで、ホルマン文庫所蔵楽譜から彼自身の作品を抽出した調査が行われた。その結果は、『南葵音楽文庫紀要』第 2 号の巻末に掲載している [8]。そのためここでは再説は省くが、作曲に至ったさまざまな経緯をこえて、自作群はホルマンが考え望んだチェロによる表現と技巧を、またそれにふさわしい形式を、最も率直に反映していると考えられよう。そこに見られる傾向を、その他のホルマンが屡々使用した楽譜群と、さらに文庫全体や、同時代のチェロ作品と比較することは、音楽家ホルマンに関してだけでなく、広くは 19 世紀後半の弦楽芸術へ分け入る扉ともなろう。

ホルマン文庫は、冒頭に述べたように、徳川頼貞がホルマンとの交友から受贈することができた 1000 点をこえる楽譜群である。この文庫を概観大別し、特徴を略述してきた。そして、それがただの古い楽譜の山ではなく、数々の魅力と可能性をもつ資料群であるかの紹介を試みてきた。個人ホルマンから個人頼貞にわたった個人コレクションとしての「私性」をもちながら、資料自体が公共の財産として活かされるべき特徴を秘めている。ここで指摘してきた特徴は、OPAC といった図書検索システムからは通常見えてこない。ホルマン文庫の特徴を映した目録提供が、必要とされる所以である。

9．公共財としての南葵音楽文庫

いったい個人文庫を受け入れるとは、どのような意義があるのか。筆者は大学在勤中、幾度となく大学図書館で受け入れてもらえないかとの打診を、個人文庫を有する個人、法人から受け、またそのいくつかについては、受け入れ促進のために文書の作成にもあたった。他方、既に受け入れた個人文庫がどのように保管され、利用に供されているかなども間近に見聞する環境に身を置いていた。その間、日本における個人文庫についての調査も纏められた [9]。あらためて個人文庫の数の多さと、内

(7) このような作品の例の紹介としては以下の紹介文を参照願いたい。近藤秀樹「サン = サーンス ミューズと詩人」『南葵音楽文庫紀要』 1 号 (2018), p.76-77.

(8) 美山良夫「ホルマン作品資料一覧」『南葵音楽文庫紀要』2 号 (2019), p.99-110.

(9)『個人文庫事典』日外アソシエーツ , 2005.

容や性格の多様性に驚かされよう。
だが個人に由来するかぎり、通常はその個人と文庫とに関わりがある。個人文庫は、その所蔵者、所有者が他に移ろうと、さらに言うならその文庫が公共図書館で多くの人にアクセス可能な状態に置かれていようとも、それだけでは他の人の存在や視野から孤立する性質をもち、隠されているか隠れている状態にある。その状態は「私性 privateness」であることに変わりない(10)。

(1)南葵音楽文庫の「私性」

南葵音楽文庫のうち、徳川頼貞が蒐集を先導した時期、すなわち 1932 年以前におさめられた図書や楽譜、いわゆる「旧収蔵」資料には、『南葵音楽文庫紀要』第 1 号の本稿で指摘してきたように、頼貞の留学時に大学に隣接した書店で購入したり、鑑賞したオペラの楽譜、師から贈られた著書、幅広い交友からもたらされた資料、ベルリンに研究者を派遣して購入した、あるいは著名な研究者の蔵書を購入した例、表敬訪問した音楽学校からの寄贈楽譜などが含まれている。

頼貞は、自ら購入した書籍楽譜の扉ページ右上に、英文で購入地、年月を書き署名するのを常としていた。彼に献じられた資料には、献辞が添えられている。

これらに、欧米への発注書を加えて編年史的に並べると、徳川頼貞の少年期からの音楽的半生が重なる。

頼貞は、自らと音楽、音楽家との交友を『薈庭樂話』にまとめ、1941 年に上梓、2 年後には市販版が出版された。そこには、彼の音楽事業の柱であった音楽図書館のための活動は、ほとんど言及されていない。そのため、「旧収蔵」資料は、もうひとつの『薈庭樂話』 として、彼の著書を補完している。言いかえるなら、出版された『薈庭樂話』を参照することによって、南葵音楽文庫がいかに深く頼貞の半生と結びついているか、その「私性」がより浮き彫りにされよう。それは欠損することなく、現在に生きている。南葵音楽文庫が和歌山県立図書館に寄託されて以来の、わずか 3 年間の、それも散発的な来館調査においてすら、その「私性」たる点はつぎつぎに明らかになり、その都度毎週のレクチャーや『南葵音楽文庫紀要』において明らかにしてきた。

(2)「公共性」: 3 つの意味

さて南葵音楽文庫は、和歌山で整理され公開され、それによって、公共財になったのであろうか。「私性」を

(10)『個人文庫事典』はその存在や由来を知るうえでは有用だが、各文庫が「私性」にどのようにかかわるのかの十分な情報源とは言えない。

維持しながら、「公共性」は果たして獲得しているのであろうか。

この点を明らかにするために、また曖昧さを回避するために、簡単に「公共性」という言葉の意味合いを整理しておきたい。近年、「公共性」とは何か、その再定義をもとめる議論がさかんである。齋藤純一の整理に拠れば、今日公共性は、人々の間に形成されるものではなく、人々の前で繰り広げられるものに変容し、かつて権力者が力や威光を民衆に見せつけた「示威的公共性」の様相を呈しているとし、それに対する市民社会が育んだ公共性を蘇らせることへの理路をもとめたハーバーマスの思想が重視される所以という[11]。

一般的に公共性という言葉を使うとき、そこには3つのレイヤーないし意味合いがあり、ときにはそれが重なって使われている。第一は、国家や自治体に関係する公的な（official）ものの意で、公共事業とか公教育と同じレイヤーにある。第二は、特定の誰かではなく、すべての人々に関係する共通のもの（common）という意味合いで、公共の福祉、公益などが該当する。私権、私利、私心とは逆に、特定の利害に偏していないという面をもつ。第三は、誰に対しても開かれている（open）であり、公園、情報公開などがこのレイヤー上にある[12]。

「公共性」という言葉の、それぞれの意味合いは、通底する部分も、対立しうる面もある。その検討はここでは省き、先を急ごう。

⑶南葵音楽文庫の「公共性」

所蔵している資料に、学術的に重要な、他には見られない稀少な例が少なからず含まれており、その整理や保管法では図書館史の面で開拓的であり、専門図書館を軸とした事業構想の先取性が光る南葵音楽図書館の活動については、本紀要においても屡々指摘されている。

くわえて、本稿では現在の南葵音楽文庫にも「私性」が強く脈打っていることを指摘した。ではその「公共性」は、どのような状態にあるのであろうか。

公益財団法人読売日本交響楽団が所蔵し、和歌山県立図書館（一部は同県立博物館）に寄託されている南葵音楽文庫は、公的（official）であると言えよう。しかし、現在すべてとは云わないまでも、多くの人々に関係する共通のもの（common）となっているかと問われれば、

(11) 文化施設における示威的公共性の問題は、顕在化しつつあり、公共図書館も例外ではないであろう。検討は別の機会に譲る。

(12) 齋藤純一『公共性』（岩波書店 ,2000）を参考に要約した。

また、誰に対しても開かれている（open）のかと問われれば、まだ十分とはいえないと答えざるをえない。そのための努力はされている。むろん資料の性質上、この面には限りがある。これは個人文庫に多少なりとも共通する課題ではあろう。

南葵音楽文庫は、東京に在るのと和歌山に「里帰り」しているのでは、意味が異なる。東京では、第一義的には重要な音楽資料群という学術的·文化的な財であった。旧蔵者紀州徳川家ゆかりの和歌山では、別の財が加わる。紀州徳川家の旧封地南紀と家紋の葵に因む南葵は、和歌山城がそうであるように、象徴的な財であることを表す記号でもある。和歌山に迎えられて 3 年、南葵音楽文庫には、学術的·文化的な財としての「公共性」に加え、象徴的な財としての「公共性」が求められている。

名前だけは知っていても、内容詳細はほとんど知られずにきた、まして実際の資料となるとほとんど人の目に触れてこなかったこのコレクションについて、まずは学術的・文化的な財すなわち音楽資料群として調査をすすめた。その過程で、この類い希な個人文庫の「私性」発掘につながった。資料のなかに、徳川頼貞が刻まれて、その痕跡を多数見いだした。

次に何が必要かは、もはや明確である。「私性」に照応する「公共性」の在り様をさらに析出し、の強化と象徴財としての発現に導くことである。ここに南葵音楽文庫にかんする事業の新ステージがある。

あらためて南葵音楽文庫を観てみよう。コレクションを胚胎した南葵文庫に再結合することで、この文庫はさらに日本の近代史に繋がり拡がり、「私性」はさらに深耕されよう。

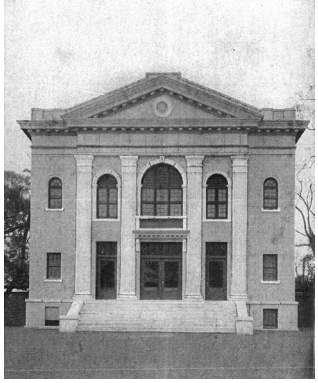
所蔵資料は、音楽作品や音楽家、音楽理論や音楽史といった分野ばかりでなく、日本近代音楽史の証言者として、さらに書物の歴史や印刷技術の博物館という面でも優れている。学術・文化的な財、象徴財として、南葵音楽文庫がもつ「公共性」は、その「私性」とも相乗して極めて大きい。この点こそ、南葵音楽文庫の特徴と魅力の極みである。同時にその「公共性」開示は、official、common、open のどの面でもまだ端緒についた程度で、課題でも、未開の沃野でもある。

ミュージック・ライブラリーの夢
南葵音楽図書館の成立と展開（3）
―南葵音楽図書館館長徳川頼貞・その形成―

林　淑　姫

はじめに

南葵音楽図書館の成立と展開について2回にわたって考察してきた。徳川頼倫の図書館「南葵文庫」の設立、嗣子頼貞帰国後の音楽部の新設、関東大震災直後の「文庫」の閉鎖と「南葵音楽図書館」の誕生。そして南葵音楽図書館の資料整理法等の解析を通してその実態を追ってきた。それらを通して改めて確認されたことは1920年代に登場した日本初の音楽専門図書館の先駆性であった。時代を遥かに越えて先行していたことに驚かざるを得なかった。統計的な調査報告に進みたいのだが、その前にそうした先駆性を実現した徳川頼貞（1882～1954年）について改めて考えたい。それは頼貞個人の人生の軌跡を考えることでもあると同時に、個人経営であった南葵音楽図書館の歴史的展開を考えるにあたって欠かせないトピックである。したがって本稿の主題は、図書館長徳川頼貞はいかに形成されたか、である。



南葵楽堂
半地下のフロアに図書室が設けられていた。

ニューヨーク・1915年

1915（大正14）年12月、ケンブリッジ留学生徳川頼貞は将来の活動について明確なイメージを懐いて帰国した。建設予定の音楽堂とそれに付設される音楽図書館計画に対する抱負を、帰国1か月後の新聞インタビューに答えて次のように語っている(1)。

> 私のホールで演奏する音樂は通俗的のものではなくしたい。通俗的の音樂はいくらも他で聞く事は出來るし、それでは立派な音樂が出來ない。成るべく高級趣味の音樂を極熱心な眞面目な少數の人に聞いて貰ひたいと思ふ。私は技藝をやる事はやつて來たがそれは音樂の理論の研究の階梯としてやつたまでゞ、私は今後益理論的方面を研究し及ばず乍ら音樂の保護者として努力する考へである。（句読点筆者）

楽堂での演奏曲目は正統的な、アカデミックな音楽であること、少数であっても真面目で熱心な聴衆を対象と

(1)「頼倫侯令嗣の音樂堂と圖書館」『東京朝日新聞』大正5年1月13日付.

すること、そのためにも頼貞自身は音楽研究をすすめ、日本における音楽を向上させるための「保護者」になるべく努力したいという。その背後に父頼倫によって運営されていた図書館が控えていることを考慮すれば、この談話は記事の見出しが示しているように、音楽ホール構想と同時に図書館の性格を明らかにするものと考えてよいであろう。

ここで彼がいう「音楽の保護者」という言辞に、明治初年代に誕生した特権階級「華族」が培ってきた社会的使命――ノブレス・オブリージュの自覚と見るのが一般的だろうが、それは同時に彼自身の生き方――音楽者として生きることについての宣言とみてよいであろう。華族としての使命感、それは家庭教育にもよるだろうが、彼が自身の思想として体得したのは、1915年10月、ケンブリッジから東京に戻る途中で立ち寄ったニューヨークでの経験による。

頼貞は、当時ニューヨークにおいてメトロポリタン歌劇場と肩を並べていた「マンハッタン歌劇場」で、オーベール《ボルティチの唖娘》を観劇した。アンナ・パヴロワがタイトル・ロールを演じる舞台を熱心に見入る一方で、彼はマンハッタン歌劇場を創設した煙草王オスカー・ハマースタインとその家族に思いを寄せた。

> 米國はデモクラシーの國と云はれてゐるが、やはり財産相續法がある以上、古い資産家があつて、その資産家がこの國の富の中心をなしてゐる。人々は屢々米國を拝金國といふが、なる程尤で、ウォール・ストリートの株式市揚は、オペラ以上に米國をよく代表してゐる。けれども、經濟界の自由な競爭場裡に在つて奮鬪して成功し、或は幸運を摑んで大資産を作つた人が、その資産を如何に活用したかを考へると、我々もまた學ぶべき處が多くあるやうに思ふ。この資産家も初代は浪費したかも知れない。然し二代目、三代目となると、もう彼等は立派な数養を備へて、學問や藝術の道を開拓するやうになる。米國にある多くの美術館、圖書館、或は歌劇場、音樂堂など、いろいろな學問藝術上の施設が、總てこれらの資産家の寄附で成立つてゐる事を思つて私は色々示唆を受けた。　(『薔庭樂話』第５章「帰朝」)

アメリカの資産家２代目、３代目が「立派な教養を備へて、学問や芸術の途を開拓するやうになる」と語る頼貞の脳裡には、ブロードウェイでミュージカルの新たな領域を拓き、脚本家、プロデューサーとして活躍してい

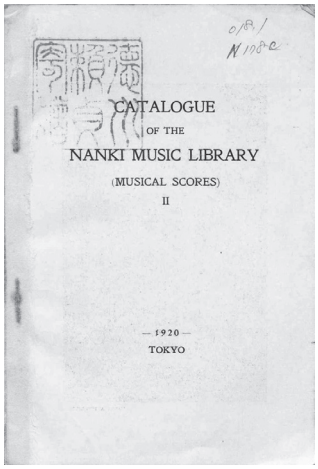
た同世代のハマースタイン２世[2]の姿があったであろう。その姿に自らを重ね合わせつつ、頼貞が音楽研究者としてまた同時に音楽芸術の支援者として自身を位置づけたのは1915年10月のニューヨーク体験であった。

コンサートホールと音楽資料室

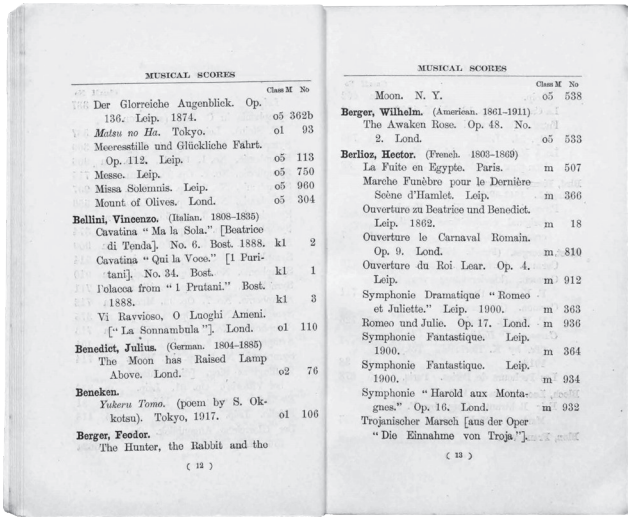
頼貞が帰国後最初に手掛けた仕事、それは先ずは留学中に蒐集した音楽書、楽譜を父頼倫の運営する「南葵文庫」に収め、その資料整理にあたることであった。

「南葵文庫」は歴代の徳川家蔵書を中心とする写本、古刊本に明治期出版物を加えた資料群で成り立っており、頼貞の欧米刊行の音楽書、楽譜は従来の文庫蔵書とは明らかに性格を異にしていたから、音楽資料の整理、管理は文庫内に新設された「音楽資料室 Music Room」（のち「音楽部」）が管轄することになった。整理は1916年春に開始された。翌17年に刊行された楽譜蔵書目録 *Catalogue of the Nanki Musical Library. Musical Score I*、および18年刊行の音楽書目録 *Catalogue of the Nanki Musical Library. Books on Music I* によれば、総数およそ1200点、内訳は欧米版楽譜596、国内版楽譜144、洋書367、和書66である。不慣れな資料の整理を開始して２年の間に目録作業を終え、冊子を刊行するには相当の研究と努力が傾注された筈で、担当司書喜多村進をはじめとするスタッフが挙げた成果は高く評価されてよい。1917、18年当時の蔵書は研究目的の基礎文献が主で、その後1920年に刊行された目録をみると、楽譜が総数1200となり、ほとんど2倍以上を数える。

増加率30％の洋書（総数およそ500）と比較して楽譜のそれが高いのは、この間1918（大正7）年に竣工した南葵楽堂（南葵文庫大礼紀念館）のコンサート活動と連動している。南葵楽堂の創設から1920年までの演奏会プログラムと収蔵楽譜を照合してみると、上演曲目のスコアとパート譜の整備に努めていることが明らかである。


CATALOGUE
OF THE
NANKI MUSIC LIBRARY
(MUSICAL SCORES)
II
— 1920 —
TOKYO

1920 年の楽譜所蔵目録（表紙）


MUSICAL SCORES

	Class M	No
Der Glorreiche Augenblick. Op. 136. Leip. 1874.	o5	362b
Matsu no Ha. Tokyo.	o1	93
Meeresstille und Glückliche Fahrt. Op. 112. Leip.	o5	113
Messe. Leip.	o5	750
Missa Solemnis. Leip.	o5	960
Mount of Olives. Lond.	o5	304
Bellini, Vincenzo. (Italian. 1808–1835)		
Cavatina "Ma la Sola." [Beatrice di Tenda]. No. 6. Bost. 1888.	k1	2
Cavatina "Qui la Voce." [I Puritani]. No. 34. Bost.	k1	1
I'olacca from "I Prutani." Bost. 1888.	k1	3
Vi Ravvioso, O Luoghi Ameni. ["La Sonnambula"]. Lond.	o1	110
Benedict, Julius. (German. 1804–1885)		
The Moon has Raised Lamp Above. Lond.	o2	76
Beneken.		
Yukeru Tomo. (poem by S. Okkotsu). Tokyo, 1917.	o1	106
Berger, Feodor.		
The Hunter, the Rabbit and the		

(12)

MUSICAL SCORES

	Class M	No
Moon. N. Y.	o5	538
Berger, Wilhelm. (American. 1861–1911)		
The Awaken Rose. Op. 48. No. 2. Lond.	o5	533
Berlioz, Hector. (French. 1803–1869)		
La Fuite en Egypte. Paris.	m	507
Marche Funèbre pour le Dernière Scène d'Hamlet. Leip.	m	366
Ouverture zu Beatrice und Benedict. Leip. 1862.	m	18
Ouverture le Carnaval Romain. Op. 9. Lond.	m	810
Ouverture du Roi Lear. Op. 4. Leip.	m	912
Symphonie Dramatique "Romeo et Juliette." Leip. 1900.	m	363
Romeo und Julie. Op. 17. Lond.	m	936
Symphonie Fantastique. Leip. 1900.	m	364
Symphonie Fantastique. Leip. 1900.	m	934
Symphonie "Harold aux Montagnes." Op. 16. Lond.	m	932
Trojanischer Marsch [aus der Oper "Die Einnahme von Troja."].		

(13)

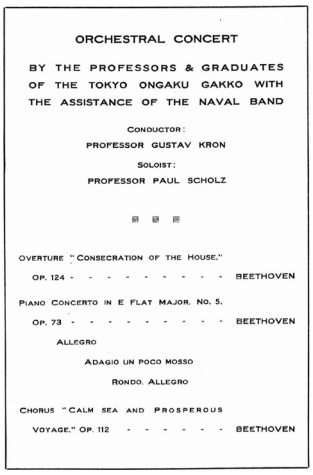
同ｐ.12-13
ベートーヴェン《海の静けさと幸運な航海》所載

(2) ハマースタイン２世 Oscar Grrelu Clendenning Hammerstein II（1895～1960年）。煙草で財をなし、オペレッタの興行主でもあったハマースタイン１世の孫。コロンビア大学法学部卒。ミュージカル《ショウボート》《オクラホマ》の台本作者、製作で知られ、ブロードウェイ・ミュージカルの古典的作品を多く世に送り出した。

パート譜の受入れは1918年10月27日の楽堂開館式の準備段階から始められたと考えられる。当日上演されたベートーヴェン《序曲「献堂式」》作品124、《ピアノ協奏曲第5番》作品73、カンタータ《海の静けさと幸運な航海》作品112のスコアとパート譜がセットで整備されている。とりわけ《海の静けさと幸運な航海》は、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル版のスコア、ピアノヴォーカル・スコア、および合唱パート譜が揃えられている。ピアノヴォーカル・スコアには譜の修正を含む書入れが多くみられ、その書入れにしたがって新たに作成された合唱パート譜がそれぞれおよそ50部ずつある。書入れは当日の指揮者東京音楽学校のG. クローン Gustav Kron によるものと推測されるが、主たるものは男声パートの音域にかかわるもので、東京音楽学校の生徒たちからなる当日の合唱団の実情を配慮したものと考えられる。作成されたパート譜には"Music department of Nanki Bunko [sic]"と印刷され、楽堂竣工に際して「音楽資料室 Music Room」は名称変更されたようである。名称は、まもなく再び改められ「音楽部 Music Section」となる。名称の変更は本格的な活動の展開に向けられた決意と意欲を示しているだろう。

南葵楽堂は専属のオーケストラをもたなかった。東京音楽学校と海軍軍楽隊の混成部隊や横浜のアマチュアのオーケストラ、あるいはまた宮内省雅楽部のオーケストラに、「正統派」の音楽の演奏を委ねている。ほとんどは自主公演で、演奏曲目は頼貞が企画し決定した。篠田大基氏が指摘しているように(3)、南葵楽堂の演奏会は曲目に重複がなく、頼貞の目が行き届いている。彼は楽堂のオーナーであると同時に「芸術監督」でもあり、プロデューサーでもあったのだ。楽堂の演奏会を充実したものにするためにも音楽資料室は必須であった。

南葵音楽図書館は音楽文献の蒐集・公開を目的とする音楽専門図書館とコンサートホール附属資料室の2つの機能を果たすべく出発したのだった。のち、この2つの機能に研究部門が加わることになる。


ORCHESTRAL CONCERT

BY THE PROFESSORS & GRADUATES OF THE TOKYO ONGAKU GAKKO WITH THE ASSISTANCE OF THE NAVAL BAND

CONDUCTOR:
PROFESSOR GUSTAV KRON

SOLOIST:
PROFESSOR PAUL SCHOLZ

OVERTURE "CONSECRATION OF THE HOUSE," OP. 124 - - - - - - - - - BEETHOVEN

PIANO CONCERTO IN E FLAT MAJOR, NO. 5, OP. 73 - - - - - - - - - BEETHOVEN

ALLEGRO

ADAGIO UN POCO MOSSO

RONDO. ALLEGRO

CHORUS "CALM SEA AND PROSPEROUS VOYAGE," OP. 112 - - - - - - BEETHOVEN

南葵文庫開館記念音楽会、第1回秋期音楽会　プログラム
1918(大正7)年10月27日(日)、28日(月)
午後7時30分開演(27日)、7時開演(28日)

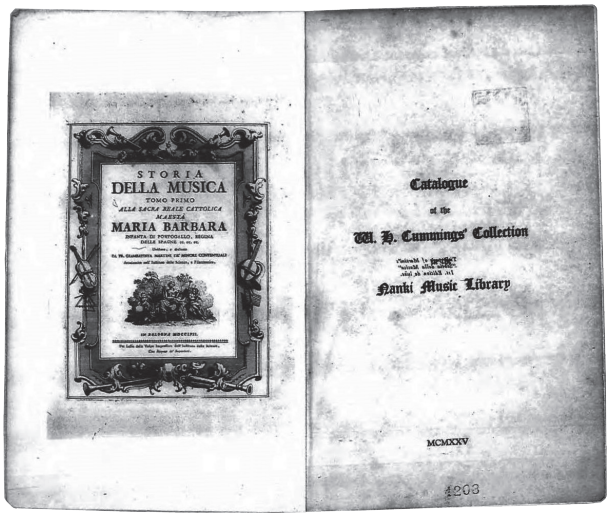
成長する音楽図書館──カミングス・コレクション

さて、楽堂の公演活動とともに滑り出した南葵文庫音楽部が音楽専門図書館としての性格を強くしてゆくのもこの頃である。

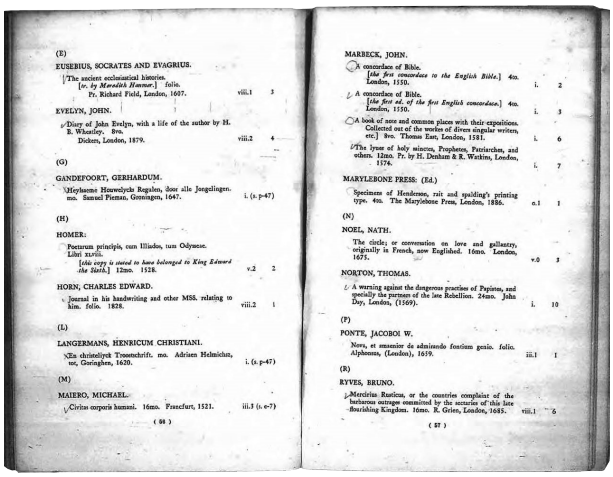
1917(大正6)年春、頼貞は雑誌 *Musical Opinion* 誌上で前年他界したW. H. カミングスが残したコレクションがロンドンでオークションにかけられることを

(3) 篠田大基「南葵楽堂の演奏会プログラム」本紀要第2号(2019), p. 25-26.

知った。南葵文庫の蔵書としてその一部でも買い取りたいと望んだ頼貞はケンブリッジでの和声とピアノを学んだ師E. ネイラーを通してその一部でも買い取る旨依頼したが、オークション開催は5月17日から24日の1週間で既に終了していた。しかしその後ネイラーから、遺族の手許に資料の残りが保管されているとの知らせがあり、早速買い入れる旨手配を依頼した。同年8月のことである。入手した資料の総数は454点であった。その中にはオークションに出品されたものの落札されなかったもののほかに、英国の18世紀の作曲家モーリス・グリーン Maurice Greene（1696 ～ 1755年）のアンセム《*O clap your hands*》や19世紀の作曲家で声楽家でもあったチャールズ・E・ホーン Charles Edward Horn（1786 ～ 1849年）の自筆の手記のようにオークションに出品されず、遺族の手許に残されていたものも含まれていた(4)。カミングス・コレクションの受け入れの一部始終については本誌1号掲載の「カミング音樂文庫競賈残餘図書購入顚末」（表題の「競賈残餘図書」はしたがって厳密にいえば正しくない）を参照して欲しいのだが(5)、このときの代金は13,300円というから現在の価格にするとどれくらいであろうか。貨幣価値は基準とするもので大きな開きがあるので断言することは難しいが、仮に、国家公務員（高等官→大卒）の初任給を基準とすれば2560倍で3400万円、米価基準ならば1700倍で2300万円に相当する(6)。頼貞はこの高額な買い物を両親の結婚式25年記念とすることで父頼



カミングス文庫目録（1925）
タイトルページ



同　p .56
チャールズ・E・ホーンの自筆手記所載 "Books which have no direct connection with music" の項。

(4) モーリス・グリーンのオード《*Descend ye Nine*》《*Ode for new year's day*》も同様である。チャールズ・ホーンの手記については既にM. カッスラーが「南葵音楽文庫」所蔵の状態を含めて言及している。Horn, Charles Edward. *Charles Edward Horn's memoir of his father and himself*. Edited by Michael Kassler. London, Society for Theatre Research, c2003.
(5) 本紀要第1号（2018）, p. 89.
(6) 森永卓郎監修『明治･大正･平成 物価の文化史事典』（展望社 ,2010.1（5刷））による。

倫と周囲の賛同を得たようである。

カミングス・コレクションの到着は世界大戦終了後の1920年初頭になるのだが、1917年夏のコレクションの発注とほぼ軌を一にして音楽蔵書の拡充が図られ、精力的な受入れが開始された。1917年以前の収書は上記のように数量からも、また、必ずしも体系的とはいいがたい質からみても蒐集は緒についたばかりであったことを思わせる。1917年から20年までの間に積極的かつ旺盛な収書活動が始められたことは、残されている発注報告書（1917）及び発注控え綴りが語る通りである。

報告書には発注351点、発注先7社（Chester、Breitkopf und Hartel、Novello、Ricordi、Durand、共益商社、丸善）、年内受入れ点数150（スコア118、パート譜42）、未着192と記され、細目の一部は控え綴りを参照することができる。発注書控え綴りの詳細は美山良夫氏が報告しているように(7)、チェスター社（ロンドン）への1916年12月以降6回にわたるシェーンベルク等同時代作品、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社（ニューヨーク）への1917年6月以降6回にわたるベートーヴェン、R. シュトラウスのスコアとパート譜、ケンブリッジのヘファーズ書店 W. Heffer & Sons Ltd への図書館学関係書（1917年10月付）、デュラン社へのドビュッシー作品（1917年12月付）である。到着した資料には*arrived*と書き込まれているが日付はない。このとき受入れた楽譜は1920年版蔵書目録に未収録のものが多い。旺盛な蒐集に整理が追いつかなかったのかもしれない。

残された1年分の記録文書のみを以て語るのは早急に過ぎるかもしれないが、逆に何故この年の文書だけが残されているかということも併せて考え、1917年夏以降に発注の勢いが増すことに今は注目しておきたい。

欧米の旅・1921年

パイプオルガン設置を無事完了し、楽堂の順調な運営と資料の発注に力を注いでいた徳川頼貞は、世界大戦の戦後処理が落ち着いた1921（大正10）年1月から10月か月の欧米旅行に妻為子を伴って出立した。家令の山東誠三郎、南葵楽堂主事高見廉吉が随行した。同年春から秋にかけて皇太子裕仁（昭和天皇）の欧州歴訪の旅も実現しており、ヨーロッパ各国は戦争の傷跡を残しながらも安定した状況を取り戻しつつあった。5年ぶりに訪

(7) 美山良夫「南葵音楽文庫の特徴と魅力──コレクションの形成から」本紀要第1号（2018）, p. 9-18.

れたヨーロッパでサン＝サーンスやプッチーニ、ヴァンサン・ダンディ、ニキシュなどの知遇を得、J. ホルマンと親交を結び、ロンドンでは指揮者ヘンリー・ウッドに楽堂の運営について助言を得た。この旅でヨーロッパの音楽界にその名が知られるようになったが、旅の目的には「図書館視察」も組み込まれていた。のちに刊行された音楽関係者名鑑『現代音樂大觀』は次のように徳川頼貞を紹介している(8)。

> 大正二年英國劔橋大學音樂科に入學しネーラー博士に就いて專ら斯道を研究し其の奥義を窮めて大正五年歸朝し、大正八年南葵樂堂を建設して專ら洋樂の普及に盡瘁したが大正十年再び渡歐し各國における音樂圖書館の事業状況を視察して歸朝後南葵音樂圖書館を創設した。爾来我が國に於ける洋樂の普及発達に常に意を注ぎつゝあるが君が多年斯道の爲に盡瘁したる功績は頗る大にして斯界の恩人と稱せられて居る。（傍点筆者）

図書館視察については出発前の新聞インタビューでも簡単に語っているのだが(9)、この「図書館視察」がどの程度のものであったかは明らかではなく、『薔庭樂話』でも多くは触れられていない。ヨーロッパからの帰途、アメリカ議会図書館を訪問し、音楽部を創設したことで知られるオスカー・ソンネック Oscar George Theodore Sonneck（1863 ～ 1928 年）(10) とカミングス・コレクションについて話し合ったこと(11)、R. シュトラウス《アルプス交響曲》のスコアとパート譜をニューヨークのブライトコプフ・ウント・ヘルテル社で購入したことなどがエピソードとして回想されているの

オスカー・ソンネック
（1873 ～ 1928 年）
Hitchcock, H. Wiley. *After 100 [!] years, the editorial side of Sonneck: a lecture : in memoriam, Oscar George Theodore Sonneck*, 1873-1928. Washington, DC: Library of Congress, 1975, c1974.

(8)『現代音樂大觀』東京日日通信社編 日本名鑑協会 , 昭和 2.11.

(9)「新春を迎へて南歐へ　徳川頼貞夫妻の鹿島立ち」『東京朝日新聞』大正 10 年 1 月 1 日付 .

(10) オスカー・ソンネックはアメリカ・ニュージャージー生れ。ハイデルベルク大学、ミュンヘン大学で哲学、音楽学、作曲を学ぶ。1800 年以前の音楽を専門とする音楽学者。1902 年より 17 年まで議会図書館音楽部 Library of Congress (LC) Music Division の部長を務め、同音楽部を世界有数の音楽コレクションを擁する音楽図書館に育てあげた。頼貞が会見したときは音楽部長を辞して精力的な執筆活動を行うとともに、雑誌 *Musical Quarterly* の編集長を務めていた。南葵音楽図書館には *Catalogue of Opera Librettos Printed before 1800* をはじめとしてソンネックが LC 時代に編集、執筆した書籍の多くが収められている。頼貞の回想によるソンネックの発言が正しいとすると、LC のカミングス資料もオークション後に受入れたことになる。

(11) 徳川頼貞『薔庭樂話』第 7 章「南葵樂堂　南葵樂堂附属圖書館とカミングス文庫」. 残念ながら音楽図書館についてどのようなことが語り合われたのかは不明である。

みである[12]。

しかし最近になって、1921年の旅先から喜多村進宛に送られた絵はがき数通が新たに確認され[13]、それらから図書館視察も資料の探索も熱心になされたことが充分推測される。資料の購入の仕事は6月末からロンドンで開始されたようである。

絵はがきは、①6月25日付、ブライトン発　②7月1日付（消印7月5日）、ロンドン発、③7月29日付、ブリュッセル発　④10月1日付（消印10月2日、モントリオール発の4通である。文面を要約すると、

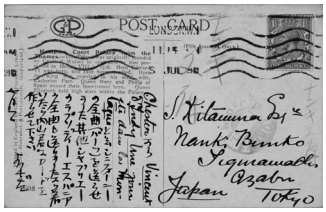
① ［ヨーロッパからアメリカに発つまで］2か月しかないので、買物（註・資料購入）にとりかかった。これからは音楽の書箱が届くことになるのでよろしく。

② ヴァンサン・ダンディ《山の夏の日 *Jour d'été à la montagne*》とシャブリエ《狂詩曲「スペイン」*Rapsodie"Espana"*》のスコアとパート譜をチェスター社から送った。

③ チェスター社から音楽書を送った（ほかに買い込んだ「大理石の像」とともに知り合いの海軍中佐に頼んで軍艦で運んでもらった）。ついで、

④ には、北米での図書館視察の経験にもとづく感想が次のように述べられている。

図書館の*Administration*はどう云っても米国に限る所謂ビジネス的な所が進歩することになる。カナダも其インフルエンスで進歩して居る。（下略）



徳川頼貞はがき②　喜多村進宛
1921年7月1日付（消印7月25日）
ロンドン発

徳川頼貞はがき④　喜多村進宛
1921年10月1日付　モントリオール発

近代的図書館の発展は議会図書館をはじめとするアメリカの図書館運動によって推進されてきた。「図書館学」の基礎的概念も彼らによって築かれた。伝統的なヨーロッパの図書館との比較において頼貞は深く印象づけられたに違いない。

頼貞の1921年の旅は、父頼倫が「図書館」を発見した1897年の旅にも似て、音楽図書館学びの旅であり、音楽図書館長・徳川頼貞形成の旅であった。

(12) 前掲書，第15章「ルビンシュタインそのほか　シュトラウスのアルペンジュンフォニー」.
(13) いずれも和歌山県立博物館「喜多村進資料」収蔵。

エフレム・ジンバリストと徳川頼貞
―その交流と南葵音楽文庫所蔵資料―

篠田大基

ロシア出身のヴァイオリニスト、エフレム・ジンバリスト Efrem Zimbalist（1890 ～ 1985年）は、ペテルブルク音楽院で名教師レオポルト・アウアーに師事し、同門のミッシャ・エルマン、ヤッシャ・ハイフェッツらと並んで、戦前には世界的名演奏家の一人として知られていた。彼は1922、24、27、30、32、35（大正11、13、昭和2、5、7、10）年の計6回、演奏旅行で日本を訪れている。

南葵音楽文庫にはジンバリスト作曲のヴァイオリン小品の楽譜が3点収蔵されている。いずれのスコアにも、ジンバリストが2度目の来日を果たした「1924年」の記載とともにジンバリストのサインが入っており、この年の日本での演奏会で披露されている。

エフレム・ジンバリスト
Library of Congress, Prints & Photographs Division, LC-B2-4102-13

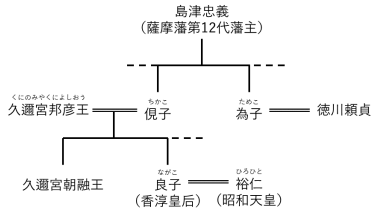
◎ "Sicilienne" from *Suite in alter Form*（《古風な形式による組曲》より〈シシリエンヌ〉）. Mainz: B. Schott, 1911. 1 part (2p.) + score (3p.). 34cm.（収蔵番号 3G2.4/3.2）

◎ "Menuet" from *Suite in alter Form*（同上〈メヌエット〉）. Mainz: B. Schott, 1911. 1 part (1p.) + score (3p.). 34cm.（収蔵番号 3G2.4/3.3）

◎ *Improvisation on a Japanese Tune*（《日本の調べによる即興曲》）. New York: G. Schirmer, 1924. 1 part (1p.) + score (7p.). 31cm.（収蔵番号 3G2.3/11.5）

特に興味深いのは《日本の調べによる即興曲》で、この作品は徳川頼貞の義理の甥で昭和天皇の義兄にあたる久邇宮朝融王（1901 ～ 59年）に献呈されており、楽譜冒頭ページ上部にその記載がある（本稿p.28の図版参照）。音楽好きであった朝融王は、同好の士の頼貞とは親しい間柄であった。頼貞の著書『薔庭樂話』私家版においても、彼の名は何度も登場する(1)。

久邇宮朝融王



ジンバリストは本論で見るように、日本滞在中に徳川頼貞や久邇宮朝融王と親しく交流していた。南葵音楽文庫に残る3点のサイン入り楽譜はその交流を物語る資料である。本論においては、1922年と24年のジンバリ

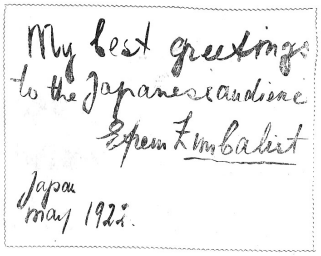
(1) 徳川頼貞『薔庭樂話』私家版　徳川頼貞刊行 , 1941（昭和 16）.11. なお同書普及版（春陽堂 , 1943（昭和 18）.3）においては皇族に関する記述が大幅に削除されており、久邇宮朝融王の名前はほとんど登場しない。

ストの来日に注目し、ジンバリストと頼貞や朝融王との交流を概観する。そしてそのなかに南葵音楽文庫所蔵の3点の楽譜資料を位置付け、解説する。

1. 1922年・初来日

> エフレム・ヂンバリストが初めて日本に來たのは大正十二年の五月であつた。その時知り合つて以來ヂンバリストは私の親しい友となつた。彼は同じアウワーの門下でも、エルマンのやうに派手な彈き方の提琴家ではない。然しその技倆は素晴らしいもので、地味な演奏には汲めども盡きない味がある[(2)]。

徳川頼貞は『薈庭樂話』のなかで、ジンバリストについてこのように記している。頼貞がジンバリストの演奏を高く評価していたことが分かる文章であるが、初来日の年は頼貞の記憶違いである。ジンバリストが初めて日本の地を踏んだのは、前年の1922（大正11）年4月25日であった。この来日は、ロシア出身のインプレサリオ（興行師）、アウセイ・ストローク Awsay Strok（1875 ～ 1956年）による招聘で、サンフランシスコを出発して日本を経由し、中国、ジャワ、シンガポール、香港を回る演奏旅行の一環であった。ストロークはロシア時代のジンバリストと交流があり[(3)]、1914年からは上海を拠点に、ヨーロッパの著名な演奏家のアジア・ツアーをマネジメントして名を上げていた。日本でのジンバリストの演奏は、5月1日から5日間の東京帝国劇場公演を皮切りに、大阪、名古屋、京都などを回り、5月19日から21日まで再び東京公演、さらに22、24日の横浜公演が続くという過密な日程であった。



1922年の日本滞在中に書かれたジンバリストの毛筆のサイン
『歌舞』第5年3号（1923（大正12）年3月号）, p. 31.

ジンバリストと徳川頼貞が初めて会った日については明らかではないが、ジンバリストの弟子ロイ・マランが執筆したジンバリストの伝記には、「東京でのある演奏会の後、ジンバリストは徳川頼貞夫妻と久邇宮朝融王を紹介された」とあり[(4)]、雑誌『音樂界』の報道に、5月19日の帝国劇場公演に頼貞と朝融王が来会したとあ

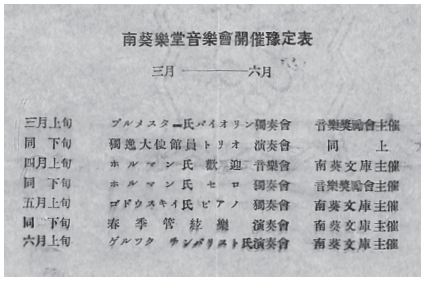
(2) 徳川 , 前掲書 , 私家版 , p. 276-277 ／普及版 , p. 237.
(3) アウセイ・ストロークについては、井口淳子『亡命者たちの上海楽壇――租界の音楽とバレエ』音楽之友社 , 2019, p. 167-197 が詳しい。ストロークは、もとはペテルブルクのオペラ団の打楽器奏者で、彼の弟のレオ（後にレオ・ストロコフと名乗る）は、ジンバリストと同じアウアー門下のヴァイオリニストであった。その縁でジンバリストはレオの兄アウセイとも親しく、ロシア時代のアウセイは、自分が演奏する歌劇場のオーケストラ・ピットにジンバリストを潜り込ませて、彼に数々のオペラを聴かせたという（Roy Malan, *Efrem Zimbalist: A Life*, Pompton Plains, New Jersey: Amadeus Press, 2004, p. 18-19）。
(4)Malan, 前掲書 , p. 185. 下線は筆者。

ることから[5]、この日が初めて会った日と推測される。他方、雑誌『中央美術』掲載の田村寛貞によるジンバリストへのインタビュー記事には、冒頭に「帝劇演奏會初日の前夜、徳川頼貞君のところで」と記されており、記事中に頼貞の名前も登場することから[6]、頼貞もインタビューに同席していたと考えられる。記事の最後には「五月四日夜」との付記があるが、これはインタビューの日ではなく、記事が書かれた日であろう。「帝劇演奏會初日の前夜」であれば4月30日のはずである。ともかくここから頼貞とジンバリストの交流が始まった。ジンバリストの伝記によれば、「徳川夫妻は英語とフランス語を完璧に話し、西洋の音楽や文学、芸術の熱心な愛好家だった。ジンバリストは彼らのことを謙虚で何もかもが魅力的な人々だと思った」[7]。

この日本での体験が、2年後の1924年、2度目の来日に際して作曲された《日本の調べによる即興曲》に結実することになるが、このときのジンバリストは多忙な旅程で観光にほとんど時間を割けなかった。田村寛貞のインタビューでも彼はそのように語っている[8]。ジンバリストが日本滞在中にどの程度日本の伝統音楽を聴くことができたかは定かではない。ただ、箏曲家の今井慶松（1871 ～ 1947年）と会い、その演奏に接したことは、当時の新聞記事に見ることができる。ジンバリストは「初めての來朝に際して、今井氏より箏曲『新ざうし』の一曲を聽いて、箏曲の決して侮りがたきものである事に打ち驚き、それ以來非常に我音樂といふものに特別の興味をもつやうになった」という[9]。

2. 1923年・実現されなかった招聘と関東大震災

読売日本交響楽団所蔵の南葵音楽文庫関連資料には、「南葵樂堂音樂會開催豫定表 三ー六月」という印刷紙片が含まれている。年号は書かれていないものの、南葵楽堂で実際に開催された演奏会も記載されており、そこから1923年春の予定表であると分かる。そのなかに「六月上旬」開催予定で「南葵文庫主催」によるジンバリストと夫人のソプラノ歌手アルマ・グルックのリサイタルが記載されている。この年にジンバリスト夫妻は来日していないが、この予定表は、1923年にもジンバリスト


南葵樂堂音樂會開催豫定表

三月 ――――― 六月

三月上旬	ブルメスター氏バイオリン獨奏會	音樂奬勵會主催
同 下旬	獨逸大使館員トリオ 演奏會	同 上
四月上旬	ホルマン氏歡迎音樂會	南葵文庫主催
同 下旬	ホルマン氏セロ獨奏會	音樂奬勵會主催
五月上旬	ゴドウスキイ氏ピアノ獨奏會	南葵文庫主催
同 下旬	春季管絃樂演奏會	南葵文庫主催
六月上旬	グルック サンバリスト氏演奏會	南葵文庫主催

南葵樂堂音樂會開催豫定表 三ー六月
（読売日本交響楽団蔵）
表中の「ホルマン氏歡迎音樂會」は1923年4月7日に予定され、4月28日に延期して開催された。「ブルメスター氏バイオリン獨奏會」は同年3月24日、「ホルマン氏セロ獨奏會」は4月3日、「春季管絃樂演奏會」は6月10日に、それぞれ南葵楽堂で開催された演奏会と考えられる。

(5)「中央樂況」『音樂界』1922（大正11）年6月号 , p. 40.
(6) 田村寛貞「チンバリスト（ママ）氏と私との對話」『中央美術』1922（大正11）年6月号 , p. 97-103.
(7)Malan, 前掲書 , p. 185.
(8) 田村 , 前掲書 , p. 102.
(9)「日本樂はいゝと樂聖チ氏の感激」『都新聞』1924（大正13）年12月7日 .

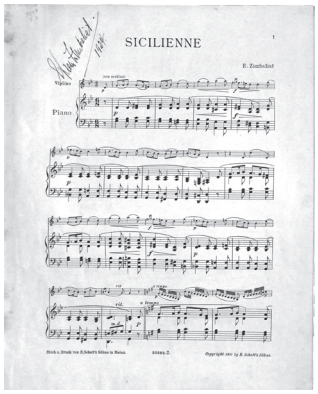
を日本に招聘する計画が――招聘者は明らかではないものの――あったことを示している。

ジンバリスト自身も日本への親愛の念を持ち続けていた。1923年の関東大震災による火災で、前年にジンバリストも演奏した帝国劇場が全焼したと知ると、彼はニューヨークでチャリティ・コンサートを開催し、その収益金5,000円全額を帝国劇場に寄付した(10)。

徳川邸「ヴィラ・エリザ」

3. 1924年・2度目の来日

1924（大正13）年のジンバリストの2度目の来日も、前々年同様、ストロークの招聘によるアジア・ツアーの一環であった。このときジンバリストらは、日本より先に中国、東南アジアを回るため、8月11日に横浜に一時寄港して香港へと向かった。その後再び日本に戻り、11月30日に東京に到着。日本での演奏会は12月1日から5日間の東京帝国劇場公演に始まり、京都、大阪を巡回した。東京で、ジンバリストは最初、関東大震災で倒壊を免れた帝国ホテルに宿泊したが、徳川頼貞夫妻に誘われ、上大崎の徳川邸、通称「ヴィラ・エリザ」に逗留するようになった。「夫妻は東京の真中に日本のものと思えないような屋敷を持っていて、屋敷は彫刻のある庭や鯉の池に囲まれていた」と、ジンバリストは回想している(11)。徳川邸では「朝早くから夕刻まで絶え間なく美しい音が樂人の部屋から流れてくるのが聽かれ」、頼貞は「音樂家が如何に熱心に練習をするかを目のあたりに見て私は藝術家の努力といふものに敬服した」という(12)。南葵音楽文庫所蔵のジンバリストの楽譜3点にサインが書き込まれたのは、この1924年の徳川邸滞在中であった。



ジンバリスト《古風な形式による組曲》より〈シシリエンヌ〉（収蔵番号 3G2.4/3.2）スコア冒頭
スコアに書かれたサインは "Efrem Zimbalist / 1924"（次頁の〈メヌエット〉のスコアも同様）

4. 南葵音楽文庫所蔵のジンバリストの楽譜資料

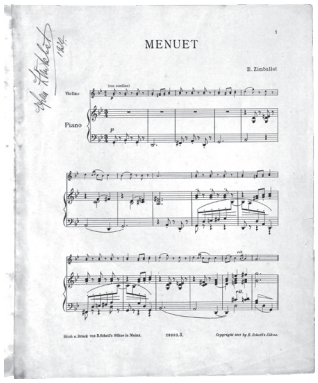
(1)《古風な形式による組曲》

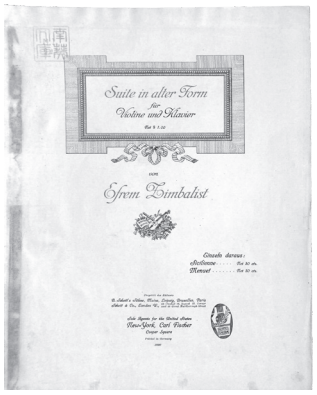
ヴァイオリンとピアノのための《古風な形式による組曲》は5曲からなり、南葵音楽文庫は、第2曲〈シシリエンヌ〉と第3曲〈メヌエット〉のピース楽譜を所蔵している。これらの楽譜はジンバリスト来日以前に購入されており、1917年10月刊行の楽譜蔵書目録第1版にすでに採録されている。しかし同年5月に作られたこの目録のタイプ稿には記載がなく、したがって収蔵時期は、

(10) 帝劇史編纂委員会編『帝劇の五十年』東宝, 1966.9, p. 179.
(11) Malan, 前掲書, p. 190. 本書中でジンバリストは徳川邸の名称を "Temple de Soleil" と述べているが、これは頼貞の大磯の別荘「ヴィラ・デル・ソル」と混同したためであろう。ジンバリストは大磯の別荘も訪れたことがあった。
(12) 徳川, 前掲書, 私家版, p. 277 ／普及版, p. 237.

1917年5月から10月の間と推定される[13]。パート譜のタイトルページにある「南葵文庫」の蔵書印は、この楽譜の収蔵時期が1923年以前（南葵文庫閉鎖前）であることを裏付け、同じくタイトルページに押された共益商社の印は、楽譜の入手経路を示している。

他方、それぞれのスコアには、蔵書印も共益商社の印もない。ジンバリストのサインは、それぞれのスコアのみに書かれており、楽譜カバーやパート譜とは判型が異なっている（スコア約32×26cm、楽譜カバーおよびパート譜約34×27cm）。スコアに関するこれらの特異点は、それぞれのスコアが、楽譜カバーやパート譜とは別の経路で受け入れられたことを示唆している[14]。ジンバリストのサイン入りスコアは、ジンバリストから頼貞へのプレゼントであったに違いない。これとは別に、共益商社から購入された楽譜セットにあったはずのスコアは、現在消失している。頼貞とジンバリストがスコアを交換した可能性も考えられるだろう。



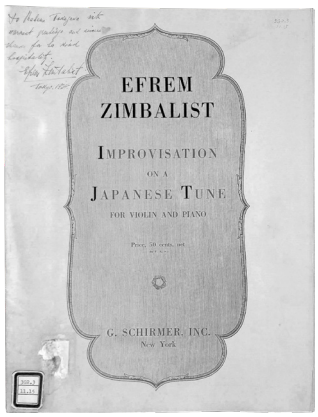


ジンバリスト《古風な形式による組曲》より〈メヌエット〉（収蔵番号 3G2.4/3.3）スコア冒頭とパート譜のタイトルページ

(2)《日本の調べによる即興曲》

1924年8月、アジア・ツアーに先立ってジンバリストが横浜に一時寄港した際、彼は新聞の取材に対して、「東京では久邇宮殿下に對しインプロパイゼーシヨンオーアージヤパニーペニユー（即興演奏日本氣質）［原文ママ］といふのを作曲して御前演奏をする筈です」と語っている[15]。この新曲、すなわち *Improvisation on a Japanese Tune*（日本の調べによる即興曲）こそが、1924年の来日公演の呼び物であった。ジンバリストの日本到着を報じた新聞記事にもこの曲への言及があり、ジンバリストは「その作曲動機は日本の優雅な感情に動かされた爲めでその氣持をたゝへてゐる日本の小唱をとり入れてゐます」と紹介している[16]。日本における演奏会のなかでは、まず東京公演初日の12月1日に披露され、さらに12月4日に久邇宮朝融王と徳川頼貞が来場することになったのを受け、再演がなされた[17]。

曲はヴァイオリンとピアノのための小品で、ピアノ



ジンバリスト《日本の調べによる即興曲》（収蔵番号 3G2.3/11.5）スコアのタイトルページ
タイトルページに記された献辞は
"To Madame Tokugawa with warmest greetings and sincere thanks for her kind hospitality.
Efrem Zimbalist
Tokyo. 1924."

(13)*Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Score)*, I, [Nanki Bunko, 1917 (大正 6).10], p. 36. *Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Notes)*, Second Edition, [Nanki Bunko], 1917 (大正 6).5, 東京大学総合図書館蔵 018.1:O41.

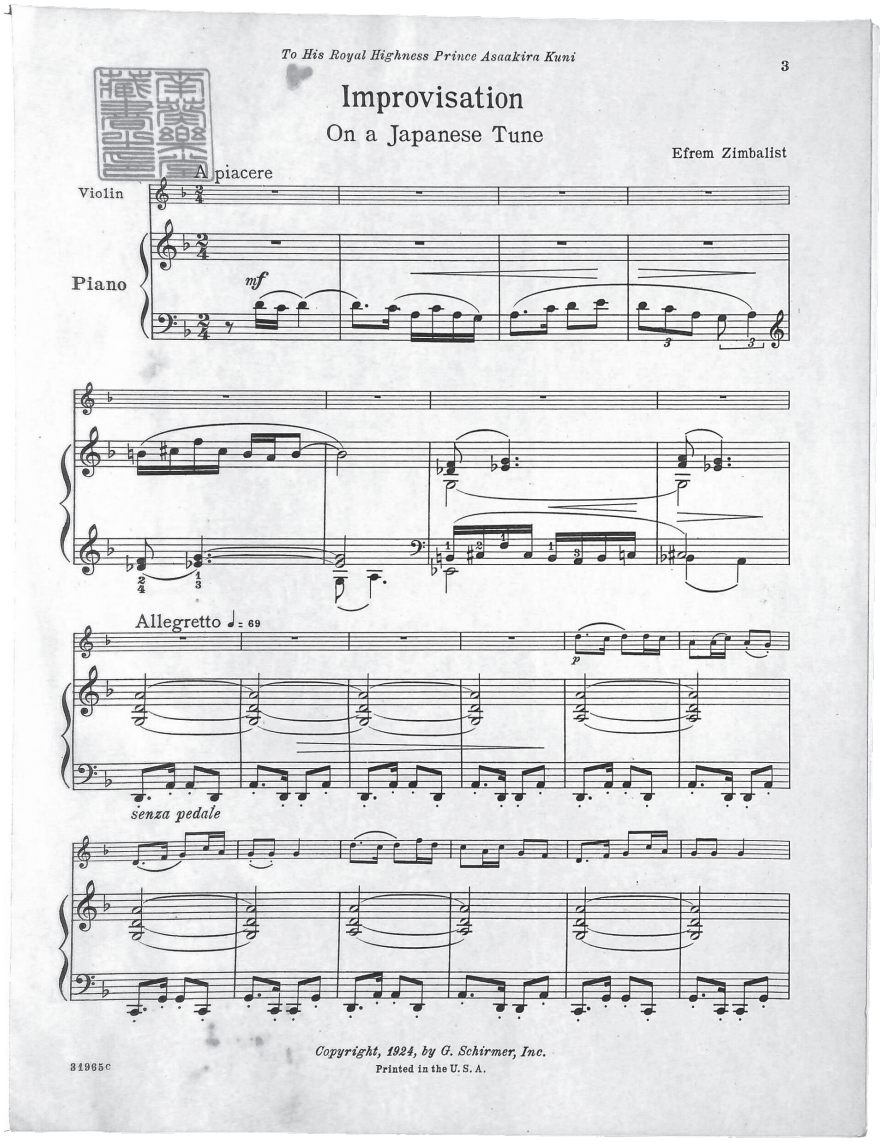
(14) この点は林淑姫氏よりご指摘いただきました。ここに記し感謝いたします。

(15)「ジンバリスト氏再び來朝す」『東京朝日新聞』1924 (大正 13) 年 8 月 12 日 .

(16)「『日本の調べ』を抱いて入京した樂聖チンバリスト氏」『讀賣新聞』1924 (大正 13) 年 12 月 1 日 .

(17)「ジ氏大演奏會に久邇宮朝融王殿下東伏見宮邦英王殿下台臨」『帝劇』1925（大正 14）年新年号 , p. 33.

による追分節風の前奏（後出の主題に由来）に続いて、ヴァイオリンが日本民謡らしい田舎節音階の主題を提示する。それを伴奏するピアノの低音部には、和太鼓のリズムを連想させる動きがある。主題は印象派風の和声を伴って変奏され、最後に前奏の追分節風の旋律が回帰して曲が閉じられる。日本での演奏会においてこの曲は聴衆から大喝采を博したが、一部の批評家からは「『支那街』の一角を思はせる」（小松耕輔）、「支那音樂に似た調子」（東京毎日新聞）などと、これが「日本の調べ」なのかという疑義的な意見も呈された(18)。しかしジンバリストの伝記によれば、この曲の主題は、曲が献呈された久邇宮朝融王がジンバリストに贈った旋律であった。



ジンバリスト《日本の調べによる即興曲》スコア冒頭

(18)「満都好樂家の胸を踊らしたジンバリスト氏再來演評判 本年棹尾の大收穫」前掲書, p. 26-32.

1924年のこと、久邇宮朝融王がジンバリストに、わずか18音の日本に伝わる旋律をくださった。その調べを気に入ったジンバリストは、その旋律を発展させて彼の作品でもっとも愛らしい小品《日本の主題による即興曲》を作った[19]。

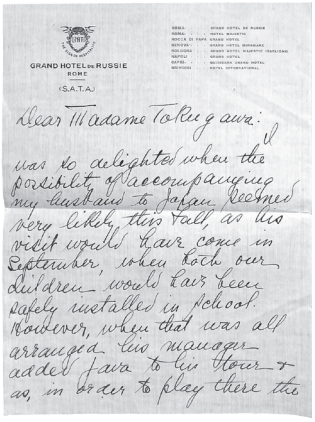
主題の原曲については曲目解説や演奏会評に言及が見当たらず、未詳であるが、日本の皇族から贈られた旋律である点では、紛れもなく「日本の調べ」なのであった。

《日本の調べによる即興曲》の作曲以前に、ジンバリストが日本の伝統音楽に触れる機会は、ごく限られていたはずである。しかし先述のように、この曲には彼がある程度、日本の伝統音楽を知っていたのではないかと窺わせる部分がある。1924年の日本滞在中、ジンバリストは徳川頼貞の案内により、宮中で雅楽を聴いて大変な感銘を受けたことが、伝記や当時の新聞記事には記されている[20]。1922年にも、ジンバリストは今井慶松による箏の演奏を聴いたほか、徳川頼貞や久邇宮朝融王との交流のなかで、日本の伝統音楽に接する機会があったのかもしれない。そのような想像をかき立てる音楽である。

《日本の調べによる即興曲》の楽譜は、作曲年と同じ1924年にニューヨークで出版された。南葵音楽文庫所蔵本には、1924年から翌年にかけて使われた「南葵楽堂図書部」の蔵書印があり、タイトルページには、ジンバリストが徳川邸に滞在している間、彼を親切にもてなした徳川頼貞夫人為子への謝意が記されている。

おわりに

ジンバリストと徳川頼貞夫妻の交流は1930年代以降も続くが、本稿はここで筆を置くこととし、最後に付録として、南葵音楽文庫関連資料に含まれるジンバリスト夫人アルマ・グルックから徳川為子に宛てられた手紙の全文対訳を掲載する。手紙の日付は1930年7月2日で、このときジンバリスト夫妻は2人の子どもを伴ってヨーロッパを演奏旅行中であった。手紙の便箋と封筒は、ローマでの滞在先のホテル・デ・ルッシエ Hotel de Russie のものである。ジンバリスト一家と徳川家の家族ぐるみでの親しい交流を示す資料である。


GRAND HOTEL de RUSSIE
ROME
(S.A.T.A.)

Dear Madame Tokugawa:
I was so delighted when the possibility of accompanying my husband to Japan seemed very likely, this fall, as his visit would have come in September, when both our children would have been safely installed in school. However, when that was all arranged his manager added Java to his tour — so, in order to play there the

アルマ・グルックから徳川為子に宛てられた手紙
（読売日本交響楽団蔵）

(19)Malan, 前掲書 , p. 191.

(20)Malan, 前掲書 , p. 190-191.「オンガク」『讀賣新聞』1924（大正 13）年 12 月 25 日 .

ジンバリスト夫人アルマ・グルックの手紙　対訳

Dear Madame Tokugawa:

I was so delighted when the possibility of accompanying my husband to Japan seemed very likely this fall, as his visit would have come in September, when back our children would have been safely installed in school. However, when that was all arranged his manager added Java to his tour & as, in order to play there the month of August he would have had to leave in June, just when the children's vacation began, he suggested we bring them along & that we leave him in Java & I bring them back to the United States in time for school.

I shall therefore be passing through Tokio the twenty-sixth and twenty-seventh of August and should be so happy if by a lucky chance you would be in tour or either of these days so that I might present my compliments to you, as well as my two children, Maria Virginia, aged fourteen and Efrem Jr., aged eleven.

We are having a most interesting trip, if a little strenuous & the children are really getting a great deal out of it.

With cordial greetings to yourself, in which my husband joins me, I remain,

Very sincerely yours,

Alma Zimbalist.

July second, 1930

親愛なる徳川令夫人

夫に同行して、この秋に日本を訪れることになりそうでしたので、大変うれしく思っておりました。夫が日本に参りますのは９月のはずでした。それなら、帰国後に子どもたちは、何事もなく学校に戻れます。ところが、全旅程がまとまってから、夫のマネージャーがジャワを演奏旅行に追加してしまいました。夫がジャワで８月に演奏するとなると、６月に出発しなければなりません。ちょうど子どもたちの夏休みが始まる時期です。夫は、私たちが一緒に子どもたちを連れて行き、夫をジャワに残して、私が子どもたちを学校が始まるのに合わせてアメリカに連れて帰れば、と申しております。

このようなわけで、私は、８月 26 日と 27 日に東京に寄ることになりました。もしご都合がよろしければ、あなた様と旅のひとときを、どちらかの日だけでもご一緒できたら幸運に存じます。そうすれば、あなた様にご挨拶申し上げ、子どもたち２人をお目にかけることができます。14 歳のマリア・ヴァージニアと 11 歳のエフレム・ジュニアです。

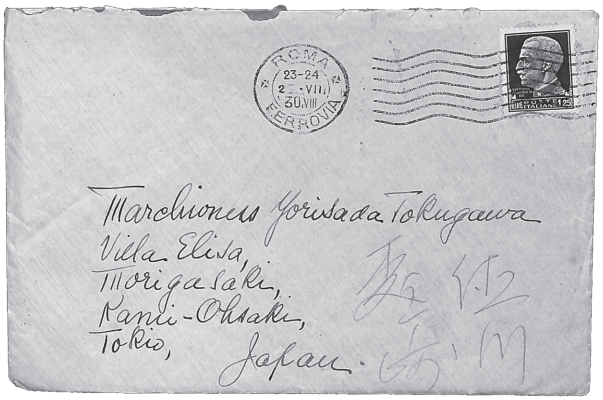
もう少しすれば楽しい旅です。子どもたちは、旅から多くのものを得ることでしょう。

くれぐれもご自愛ください。夫もよろしく申しております。

敬具

アルマ・ジンバリスト

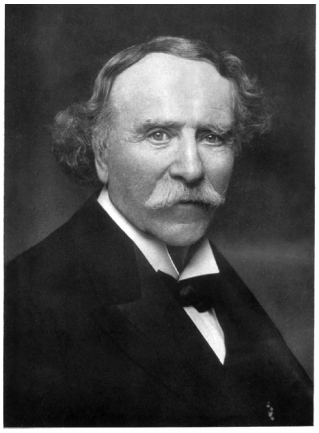
1930 年７月２日



手紙の入っていた封筒（読売日本交響楽団蔵）

カミングス文庫とW. H. カミングスをめぐって[1]
―カミングス文庫資料の来歴―

佐々木勉



最晩年のカミングスの肖像とサイン
出典：The Musical Times, vol.56, no.869 (July 1, 1915), p.397.

カミングス文庫資料、すなわちウィリアム･ヘイマン･カミングス William Hayman Cummings（1831～1915年）の旧蔵書は、南葵音楽文庫の中心的な蒐集である。

カミングスの旧蔵書は、その死後、1917年に競売にふされ、徳川頼貞は、競売には参加できなかったものの、遺族から一部を購入することができた。そして大戦の戦火を避けて1920年に、それらは日本に届けられた[2]。1925年に編纂されたカミングス文庫目録 *Catalogue of the W. H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library*（Nanki Music Library, 1925）には、この時もたらされたカミングスの旧蔵書の数は、454点と記載されている[3]。しかし、これまでに失われた楽譜などもあり、2019年末の調査の時点で確認できているのは、399点435冊である。

しばしば指摘されるカミングス文庫の特徴は、その蒐集が、イギリス人による作品やイギリスで出版された楽譜や音楽書を中心としている点である。しかも著名な音楽家による作品や著作ばかりでなく、広く一般の愛好家が楽しむために出版された大衆的な歌曲集や俗謡集なども含まれている。カミングスはイギリス人であり、オルガン奏者、歌手、指揮者、教育者、研究者として多方面に活躍した人物である。こうした蒐集の方向は、彼にとってきわめて自然なことであった。

もう一つ、カミングス文庫の特徴として指摘されるのは、手沢本、すなわちカミングスを含め、これまでの所蔵者たちによる書き込みや蔵書票などが残る書物が数多く含まれている点である[4]。

和歌山県立図書館、および博物館に収蔵されるカミングス文庫の一冊、一冊を見ていると、目当ての楽譜や書

(1) 本稿は、2018年12月1日に和歌山県立図書館講義研修室で開催された第4回「南葵音楽文庫定期講座」における筆者の講演「W. H. カミングスが愛した音楽　その2 ― W. H. カミングスの蔵書蒐集と『国立の音楽図書館の設立』の夢」をもとに加筆修正したものである。

(2) カミングス文庫購入の経緯については、本紀要第1号（2018）に掲載された美山良夫氏の論考「南葵音楽文庫の特徴と魅力――コレクションの形成から」p. 9-17で詳細に議論されている。

(3)『蔵書目録（貴重資料）*Catalogue of Rare Books and Notes*, 大木コレクション南葵音楽文庫 *The Ohki Collection, Nanki Music Library,* 1970』（大木コレクション･南葵音楽文庫, 1970）では、カミングス文庫は366点とされる。

(4) 美山良夫「南葵音楽文庫の特徴と魅力 ― 承前　手沢本の世界」本紀要第2号（2019）, p. 7-14参照。

物を入手した際のカミングスの様子が浮かんでくる(5)。

カミングスは、入手した楽譜や書物を机上に置くと、まず最初に自身の蔵書票を見返し（多くの場合に表紙裏側）に貼り付け、余白があれば、時にはサインを書き入れた。そして入手した経緯についても、印象に残っているような出来事があれば書き加えた。それが、カミングスの長年の「手続き」であった。ただしそれは、カミングスに限らず、19世紀のイギリスの蔵書家なら誰でもが行った作業であったろう。しかし、カミングスは、彼以前の多くの旧蔵者たちが行ったように、同じ手続きの痕跡を消し去ろうとはせず、すでに貼られていた蔵書票を剥がしたり、サインを削り取ったりするようなことはしなかった。むしろ逆に、意図的に残した。そして一通りの研究が終わると、その書物の特徴や旧蔵者のことなどを、やはり見返しなどの空白に書き込んだ。

こうした作業を見ると、カミングスは、書物の過去の所蔵者たちに敬意を表し、その歴史を尊び、さらにその延長に自らを加えようとしたかのようである。こうしたカミングスの「想い」によって、彼の旧蔵書は、完全に明らかになることは稀ではあるが、来歴をたどることが可能となっている。

南葵音楽文庫に収蔵されているカミングスの旧蔵書には、例外なく彼の蔵書票が貼られ、多くに彼のサインをはじめ、書き込みを見ることができる。そしてさらに、その中の170点を超える楽譜や音楽書には、カミングス以前の旧蔵者たちの蔵書票やサインもまた確認することができる。

カミングスが保存してくれた痕跡を手がかりに、18世紀の初めに出版された、2点の歌曲集の来歴をたどることにしよう。

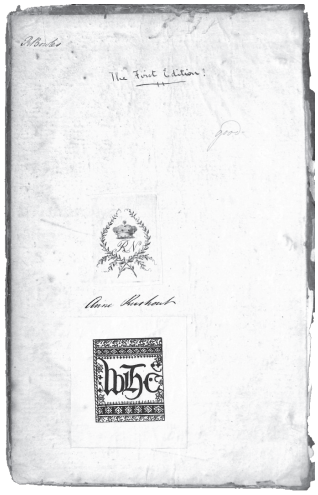
《ヘンデル氏の作曲によるオペラ「リナルド」の歌曲集 *Songs in the Opera of Rinaldo, composed by Mr. Hendel*》ロンドン、1711年（収蔵番号 N-7/22）は、ジョージ・フレデリク・ヘンデルがロンドンで上演した最初のオペラ《リナルド *Rinaldo*》からのアリア集で、まとまった形で出版された、同オペラの最初の曲集である(6)。出版年は記載されていないが、当時の新聞記事から1711年4月頃に出版されたと考えられている。

《ヘンデル氏の作曲によるオペラ「リナルド」の歌曲集 *Songs in the Opera of Rinaldo, composed by Mr. Hendel*》ロンドン、1711年（収蔵番号 N-7/22）からタイトルページ
右上にアン・ラッシュアウト "Anne Rushout" のサイン。

(5) カミングスが、作曲家の自筆楽譜や手写楽譜、印刷楽譜などを蒐集した方法については、本紀要第2号掲載の拙稿『カミングス文庫と W. H. カミングスをめぐって ― W. H. カミングスとその生涯』p. 35-42 を参照。
(6) この歌曲集については、本紀要に掲載の資料紹介の項を参照。

この歌曲集の見返し（表紙裏）には、カミングスの蔵書票の他、その来歴を知る手がかりがいくつか残されている。最も注目すべきは、タイトルページにも見られる“Anne Rushout”というサインである。記したのは、イングランド南西部グロスタシャーのノースウィック・パークを領地とする初代ノースウィック男爵ジョン・ラッシュアウト John Rushout（1738 ～ 1800年）の長女アン・ラッシュアウト（1768 ～ 1849年）であろう。晩年を今日のロンドン北東部レッドブリッジ自治区、ウォンステッドに暮らし、水彩による風景画を多数残したことで知られている(7)。このことは、同じく見返し（表紙裏）に見られる“R. Bowles”というもうひとつのサインによって補強される。これは、初代ノースウィック男爵ジョン・ラッシュアウトの夫人で、アンの母親であったレベッカ・ボウルズ Rebecca Bowles（1740 ～ 1818年）のサインと考えられる。歌曲集は、どの時点か不明であるが、母親から娘にプレゼントされたのであろう。

レベッカ・ボウルズ（上）とアン・ラッシュアウト（下）のサイン



《ヘンデル氏の作曲によるオペラ「リナルド」の歌曲集 *Songs in the Opera of Rinaldo, composed by Mr. Hendel*》ロンドン、1711年（収蔵番号 N-7/22）から見返し（表紙裏）
左上に“R. Bowles”のサイン。中央に冠と "RN" の蔵書票、その下にアン・ラッシュアウト“Anne Rushout”のサイン、さらにカミングスの蔵書票。

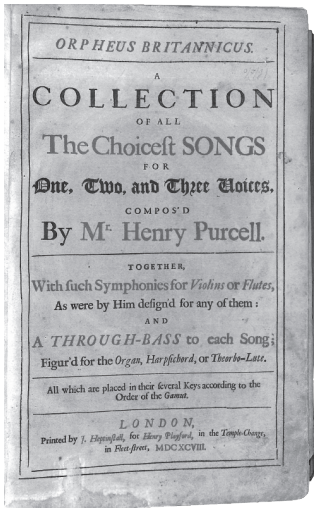
レベッカ・ボウルズと 3 人の子どもたち
左が長女のアン・ラッシュアウト。
© National Portrait Gallery, London

(7)http://www.wickedwilliam.com/lady-anne-rushout-wansteads-forgotten-artist/（参照 2019.9.30）
作品については、例えば https://collections.britishart.yale.edu/vufind/Record/3661269（参照 2019.9.30）。

18世紀の著名な音楽史家チャールズ・バーニー Charles Burney（1726～1814年）は、初代ノースウィック男爵ジョン・ラッシュアウトの父、エセックス、ミルスト・メイラーズの第4代准男爵ジョン・ラッシュアウト John Rushout（1685～1775年）が、1726年12月5日にヘンデルのオペラ興行を支えたロイヤル音楽アカデミー Royal Accademy of Music の「副理事兼監督 deputy-governer and director」の一人に選ばれたことを1726年12月17日付け *The Daily Courant* 紙の記事を紹介しながら報告している(8)。また、1760年に《ドナルド》の台本作者でもある、ロンドン、ヘイマーケット劇場の支配人アーロン・ヒル Aaron Hill（1685～1750年）の戯曲集が出版された時、この准男爵ジョン・ラッシュアウトはそれを予約購入している(9)。これらは、ラッシュアウト家の人々が、代々オペラに関心をもち、ロンドンにおける上演活動に関わっていたことを示唆しており、この歌曲集がラッシュアウト家に伝わった背景を物語っている。

この歌曲集を最初に購入した人物を第4代准男爵ジョン・ラッシュアウトと考えることは、あながち間違いないではないかもしれない。それは息子の初代ノースウィック男爵ジョン・ラッシュアウトに伝えられ、やがて夫人のレベッカ・ボウルズから娘のアン・ラッシュアウトへと受け継がれたのであろうか。

残念なことに、王冠と"RN"と記された蔵書票（図版）の人物は明らかではない(10)。カミングスが本歌曲集を入手した経緯についても不明である。しかし、アン・ラッシュアウトが他界したのは1849年であり、カミングスはすでに1850年には古書などの蒐集を始めていたことから、アン・ラッシュアウトの次の所蔵者がカミングスであった可能性は高い。


ORPHEUS BRITANNICUS.
A
COLLECTION
OF ALL
The Choiceſt SONGS
FOR
One, Two, and Three Voices,
COMPOS'D
By Mr. Henry Purcell.
TOGETHER,
With ſuch Symphonies for *Violins* or *Flutes*,
As were by Him deſign'd for any of them:
AND
A *THROUGH-BASS* to each Song;
Figur'd for the *Organ*, *Harpſichord*, or *Theorbo-Lute*.
All which are placed in their ſeveral Keys according to the Order of the *Gamut*.
LONDON,
Printed by *J. Heptinſtall*, for *Henry Playford*, in the *Temple-Change*, in *Fleet-ſtreet*. MDCXCVIII.

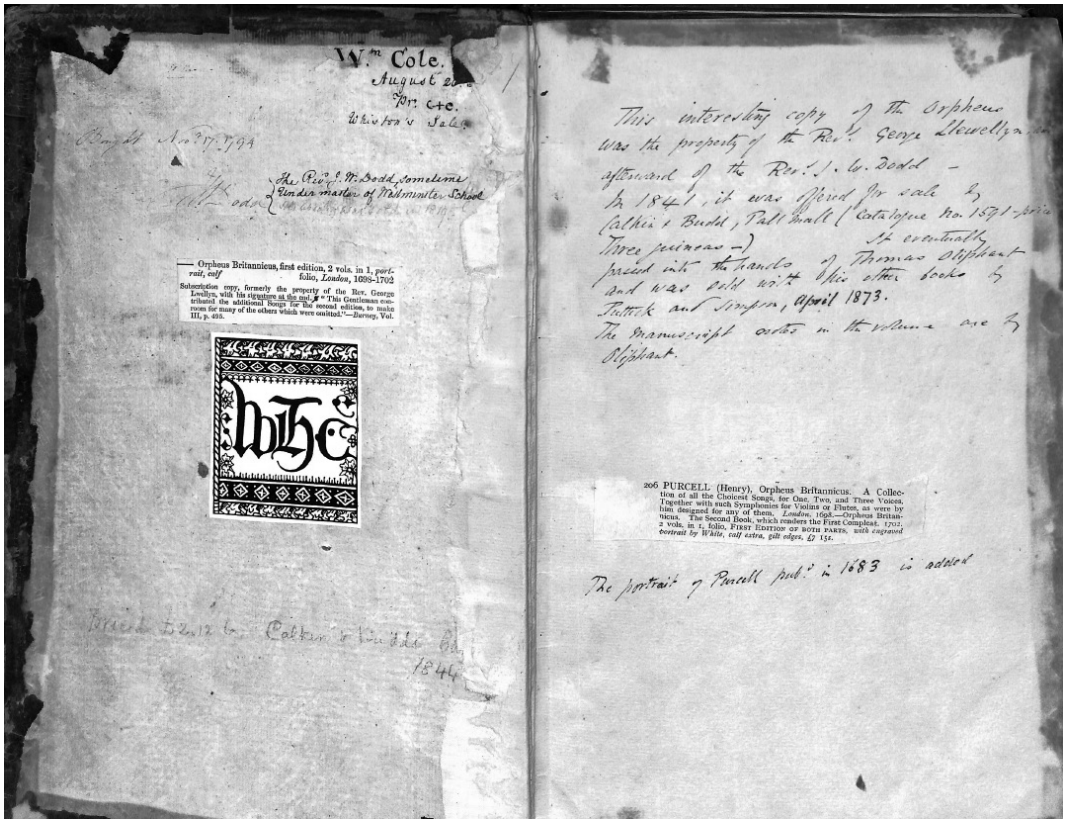
ヘンリー・パーセルの遺作歌曲集《イギリスのオルフェウス *Orpheus Britanicus*》ロンドン、1698/1702年（初版、収蔵番号 N-3/15）からタイトルページ

ヘンリー・パーセルの遺作歌曲集《イギリスのオルフェウス *Orpheus Britanicus*》ロンドン、1698/1702年

(8)Charles Burney, *A General History of Music from the Earliest Ages to the Present Period*, IV, London, 1789, p. 314.（収蔵番号 M-6/109）

(9)*The Dramatic Works of Aaron Hill in Two Volumes*, London, 1760, Names of the Subscribers［予約購入者一覧］

(10) 王冠と "RN" の蔵書票は、ラッシュアウト家の人物のものであった可能性もある。同家は、ノースウィック Northwick を所領としており、「ノースウィックのラッシュアウト」ということを示すために、その頭文字を組み合わせたのかもしれない。またアン・ラッシュアウトのサインは、この蔵書票に沿ってその下に書かれており、それは、彼女がサインした時には、すでに蔵書票が貼られていたことを示唆する。もしそうであるならば、蔵書票を貼ったのは、ジョン・ラッシュアウト父子のどちらか、あるいはアン・ラッシュアウトということになる。



（左ページ）ヘンリー・パーセル《イギリスのオルフェウス》の見返し（表紙裏）
右上にウィリアム・コール "W.Cole" の書き込み、上部左にウィリアム・ドッド "W.Dodd" のサインとドッドについての書き込み、中央に競売カタログからの切り抜きとカミングスの蔵書票。下部に鉛筆書きで 1844 年の "Calkin & Budd" 社の競売についての書き込み。
（右ページ）同見返し（遊び）
カミングスのよる本歌曲集の来歴についての記述。その下に競売カタログからの切り抜き。

（初版、収蔵番号 N-3/15）(11) の場合も、不明な点はあるが、かなり詳細に来歴をたどることができる。

《イギリスのオルフェウス》は、カミングス文庫に含まれる貴重書の中でも重要な位置を占める。カミングス文庫は、この初版以外に、第 2 版と第 3 版を所蔵するが、カミングスは、特に初版の来歴について関心をもっていた。すなわち、カミングスによる下記のメモ書きが、見返し（遊び）に残されている。向かい合う見返し（表紙裏）に残されていた、いくつかのサインなどに触発されて書いたのであろう。また、カミングスはもちろん、歴代の所蔵者たちも、自身の前にサインした人物たちの重要性にそれぞれ気づいていた。そうでなければ、このように歴代の旧蔵者たちのサインが消されずに残ることはなかったに違いない。

> This interesting copy of the Orpheus was the property of Rev. George Llewellyn, and afterward of the Rev. J. W. Dodd. In 1841, it was offered for sale by Calkin &

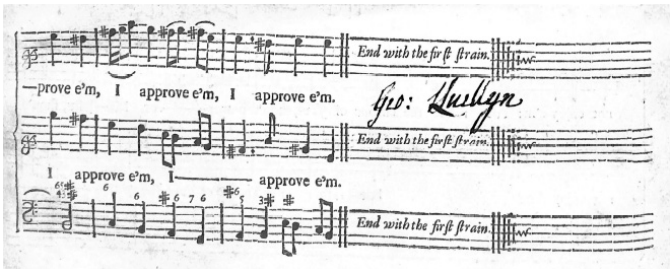
(11) カミングス文庫は、《イギリスのオルフェウス》の初版（収蔵番号 N-3/15）、第 2 版（同 N-7/32）、第 3 版（同 N-7/33）を収蔵する。それぞれ上下 2 巻（初版は 1698 年と 1702 年、第 2 版は 1706 年と 1711 年、第 3 版は上下巻ともに 1721 年の出版）からなり、版ごとに合本されている。

Budd, Pall Mall (Catalogue no.1591 price Three guineas). It eventually passed into the hands of Thomas Oliphant and was sold with his other books by Puttick and Simpson, April 1873. The manuscript order in the volume are by Oliphant.

この興味深い《オルフェウス［・ブリタニクス］》の1冊は、ジョージ・ルウェリン師の所有だった。そしてその後、J. W. ドッド師のものとなった。1841年、それはパル・モールの“Calkin & Budd”社によって競売にふされた（カタログ番号1591、価格3ギニー）。そしてついにトーマス・オリファントの手に渡り、1873年4月に“Puttick and Simpson”社によって、彼の他の蔵書とともに売りに出された。本歌曲集の手書きの指示書きは、オリファントによる。

このカミングスのメモ書きを手がかりに、本歌曲集の来歴をたどろう。

ジョージ・ルウェリン師 Rev. George Llewellyn（生没年不明）は、おそらく本歌曲集の最初の所蔵者であった。チャールズ・バーニーは、ルウェリンについてウェールズ出身のドミニコ会修道士でチャールズ2世（在位1660～85年）時代に宮廷でパーセルと親交を結び、音楽に造詣が深かった人物として紹介し、この遺作集を企画したパーセルの未亡人フランシスに第2版（第1巻1706年、第2巻1711年）の収録曲について助言したと記録している(12)。本歌曲集第2巻の巻末には、ルウェリンのサインを確認できる。

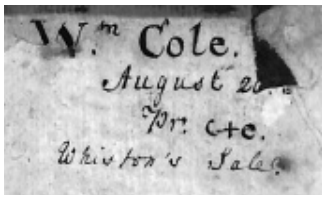


ジョージ・ルウェリン“Geo : Llewellyn”のサイン
ヘンリー・パーセル《イギリスのオルフェウス》の巻末。

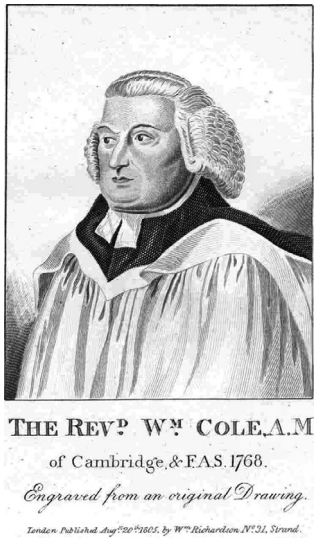
(12)Charles Burney, 前掲書, III, London, 1789, p. 495.（収蔵番号M-6/108）

次の旧蔵者は、ウィリアム・コール William Cole（1714～82年）であろう。見返し（表紙裏）の右最上部に“Wm. Cole/August 20/Pr. c+e/Whiston's Sale”（ウィリアム・コール／8月20日/価格［不明］/ウィンストンの競売）と書かれている。

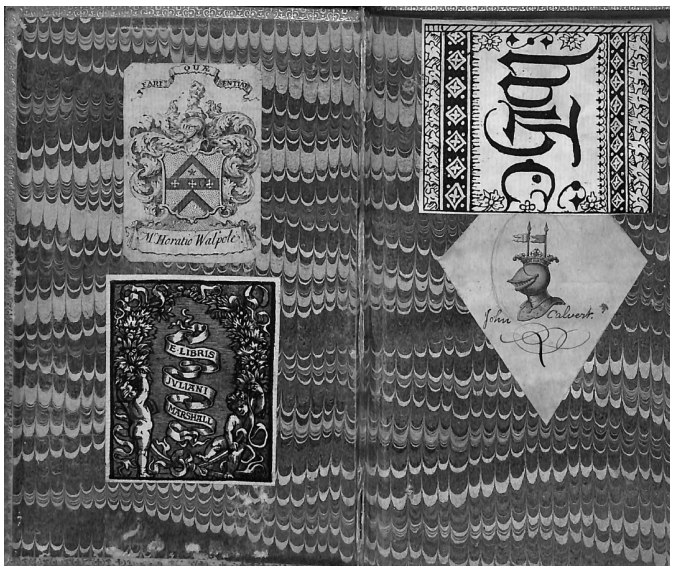
コールは、ケンブリッジシャー出身の聖職者で、学識ある蔵書家であったと記録されている[13]。コールの名前は、目立つ文字で書かれており、なぜカミングスが、来歴をまとめる際にコールに言及しなかったのか、理由は明らかではない。このコールは、イギリスの初代首相ロバート・ウォルポール Robert Walpole（在任1721～42年）の三男のオーフォード伯爵ホレース・ウォルポール Horace Walpole（1717～97年）と親交が深く、1765年から長期間のフランス旅行に同行したことが明らかとなっている。ホレース・ウォルポールも蔵書家として広く知られた人物であった[14]。



ウィリアム・コールの書き込み（拡大）



ウィリアム・コールの肖像
出典：John Nichols, *Literary Anecdotes of the Eighteenth Century*, 1812, p. 656.



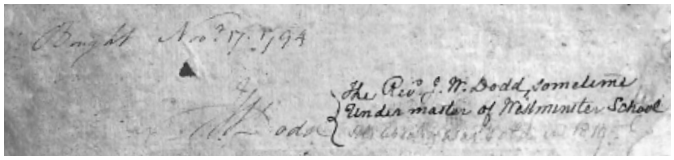
ジョン・プレイフォード John Playford（1623～86年）の著作《3巻本による音楽技法の手引き *An Introduction to the Skill of Musick in Three Books*》ロンドン、1697年（収蔵番号 M-5/29）の見返し
左上がホレース・ウォルポールの蔵書票。

(13)John Nichols, *Literary Anecdotes of the Eighteenth Century*, 1812, p. 657–701 (p. 656 肖像).
“Cole, William”, *Dictionary of National Biography, 1885-1900*, Volume 11, Thompson Cooper, http://en.wikisource.org/wiki/cole,_William_(1714-1782_(DBB00)（参照 2019.12.30）
(14)ホレース・ウォルポールは、カミングス文庫が所蔵するジョン・プレイフォード John Playford（1623～86年）の著作《3巻本による音楽技法の手引き *An Introduction to the Skill of Musick in Three Books*》（ロンドン、1697年）（収蔵番号 M-5/29）のかつての所有者の一人であり、同書にはその蔵書票を確認することができる（図版参照）。

コールの書き込みは、年代の部分が失われており、彼が“John Whiston and Benj[amin White]”社から購入した年代は明らかではないが、本歌曲集を同社が1759年8月14日か、1763年8月23日に開催した競売で購入したのかもしれない(15)。

コールが死去した1782年以降、しばらくの間、本歌曲集の行方は定かではない。

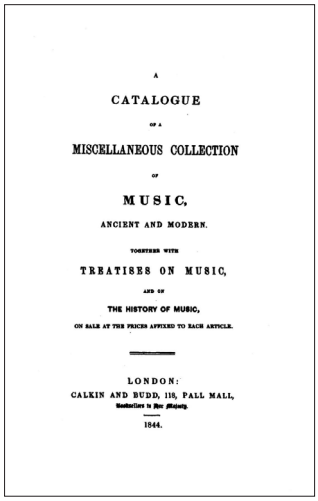
その後、本歌曲集を所蔵したのは、カミングスも言及しているジェイムズ・ウィリアム・ドッド師 Rev. James William Dodd（1760 ～ 1818年）である。1794年11月17日に購入したことが、やはり見返し（表紙裏）の上部、コールの左下におそらく本人自身によって“Bought Novr17.1[7]94/W. Dodd”（1794年11月17日購入/［ウィリアム・］ドッド）と記され、“The Rev. J. W. Dodd, sometime under master of Westminster School/His Library was sold in 1819”（一時期ウェストミンスター学校の教師の［指導］下にあった/彼の蔵書は1819年に売られた）と、彼についての情報が、別の筆跡でインクと鉛筆で書かれている。それによると、ドッドは聖職者であり、ウェストミンスター・アビイの敷地内にあるウェストミンスター・スクールに学んだことがあったという。そしてその死後、1819年に彼の蔵書は売却されたことになる。



ヘンリー・パーセル《イギリスのオルフェウス》の見返し（表紙裏）から ウィリアム・ドッド“W.Dodd”のサインとドッドについての書き込み

この1819年の売却から1844年まで、本歌曲集の記録は姿を消す。

再び姿を現すのは、競売の企画運営会社“Calkin & Budd”社が1844年に開催した競売のカタログである。ロット番号2368として掲載されている(16)。カミング


A
CATALOGUE
OF A
MISCELLANEOUS COLLECTION
OF
MUSIC,
ANCIENT AND MODERN.
TOGETHER WITH
TREATISES ON MUSIC,
AND OF
THE HISTORY OF MUSIC,
ON SALE AT THE PRICES AFFIXED TO EACH ARTICLE.
LONDON:
CALKIN AND BUDD, 118, PALL MALL,
Booksellers to Her Majesty.
1844.

1844年に“Calkin & Budd”社が開催した競売のカタログ
ロット番号2368に本歌曲集が記載されている。

2368 ——— ANOTHER COPY. *First Edition.* 2 Vols. in one. Bound; *with fine Portrait.* ... ... 2*l.* 12*s.* 6*d.*
This Copy contains the Autograph of the Rev. George Luellyn, who contributed the additional Songs for the Second Edition, from his Purcell MSS. *Vide* Burney's History of Music. Vol. 3, page 495.

(15) ジョン・ウィストン John Whiston（1711 ～ 80年）とベンジャミン・ホワイト Benjamin White（生没年不明）は、1740年代終わりから70年にかけて活発に競売を開催していることから、この年代を推定した。John Wallis, *Writings on Music*, ed. David Cram and Benjamin Wardhaugh, Routledge, 2014, p. 39 参照。

(16)*A Catalogue of a Miscellaneous Collection of Music, Ancient and Modern.*… London: Calkin and Budd, 118, Pall Mall,… 1844, p. 130.

スは、この競売を「1841年」と記したが、1844年の誤りである。見返し（表紙裏）の下方には、"Price £2.12s … Calkin & Budd's sa[le]1844"（1844年"Calkin & Budd"社の競売、価格2ポンド12シリング）という鉛筆書きがある。カミングスによれば、これを購入したのが19世紀イギリスを代表する蔵書家の一人、トーマス・オリファント Thomas Oliphant（1799～1873年）であった。オリファントは、音楽に極めて造詣が深く、ロンドンのマドリガル協会 Madrigal Society（1741年創立）の書紀や会長を歴任し、マドリガルについての研究書や楽譜を出版した。また、1841年11月から50年7月まで大英博物館（現大英図書館）に非常勤助手として勤務し、手写楽譜や音楽書の目録を完成させている(17)。彼の死後、その蔵書は1873年4月24日に"Puttick and Simpson"社が開催した競売へ出品され(18)、カミングスが購入することとなった。

本歌曲集の見返し（表紙裏側と遊び紙）には、競売カタログからの2つの切り抜きが糊付けされている。一方には、すでに述べたルウェリンについてのバーニーの証言が書かれ、本歌曲集の来歴を知る貴重な手がかりの一つとなっているが、これらが、上記のいずれかの競売の時のものであるのか、あるいは他の競売の時のものであるのか、現段階では確認できていない。

南葵音楽文庫に収蔵されるカミングス文庫から歌曲集2点の来歴を見てきた。《リナルドの歌曲集》と《イギリスのオルフェウス》を比較すると、内容的に前者の方がより一般愛好家向けであり、後者は専門性が高いと考えられる。書物の来歴を調べる作業は、主に旧蔵者をたどる作業ではあるが、それぞれの曲集を受容してきた人々を通して、こうした書物の性格までも描き出されることになる。《リナルドの歌曲集》を引き継いだのは、一般的な音楽愛好家と思われる一族の代々の人々であり、《イギリスのオルフェウス》は、著名な、より専門的な蔵書家たちの手によって保存され、今日にもたらされた。もちろん、蔵書家たちの蒐集欲を刺激するような、それぞれの歌曲集の稀少性なども考慮しなければならないであろう。

---

(17) "Oliphant, Thomas", *New Grove Dictionary*, https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/view/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-0000020309（参照 2019.12.24）

(18)A. Hyatt King, *Some British Collectors of Music*, c1600-1960, Cambridge University Press, 1963, p. 138.

すでに述べたように、南葵音楽文庫に収蔵されるカミングス文庫には、170点を超える手沢本がある。来歴を含め、それらの解明が進む時、カミングス文庫の音楽資料としてだけではない、新たな価値が明らかになるに違いない。

オネゲルとスナール
―室内楽シリーズを中心に―

近藤秀樹

アルテュール・オネゲル

紀要第１号の調査報告「スナール社[1]の挑戦」では、南葵音楽文庫所蔵のスナール室内楽シリーズを概観した上で、シリーズを代表する作曲家としてシャルル・ケクラン Charles Koechlin（1867 ～ 1950年）を取り上げた。また、紀要第２号の調査報告「時代とともに／時代の傍らで」では、室内楽シリーズが刊行されていた1920年代のパリの楽壇の動向を簡単に整理した上で、室内楽シリーズの常連で、かつ、特定の流派に属さないユニークな作曲家の一人としてジャン・クラース Jean Cras（1879 ～ 1932年）を紹介した。いずれもこのシリーズの“顔”というべき作曲家たちであるが、シリーズの Musique moderne に登場する作曲家たちのなかで今日もっとも有名なのは、やはりアルテュール・オネゲル Arthur Honegger（1892 ～ 1955年）であろう。

両大戦間に書かれたオネゲルの作品の多くはスナールから出版されており、オネゲルの作曲家としてのキャリアにおいてスナールが果たした役割は小さくない。スナールもオネゲルを自社にとって重要な作曲家と位置づけていたようで、同社が音楽雑誌『ルヴュ・ミュジカル *La Revue Musicale*』に出した広告では、しばしばオネゲルが大きな扱いを受けている。

そこで今回は、スナール室内楽シリーズに収録されたオネゲルの作品を取り上げ、1920年代におけるオネゲルの作曲家としての歩みをたどることにしたい。

Piano	
Le cahier romand	1923-2
Chant de Joie	1924-2
Pacific 231	1926-1
La neige sur Rome	1927
Violon et piano	
Deuxieme Sonate	1924-2
Chant et piano	
Trois poemes	1921-2
Six poesies	1924-1
Judith	1925-2
Trois chansons	1927
Ensemble	
Rhapsodie	1923-1

1. オネゲルとスナール

スナール室内楽シリーズに収められたオネゲルの作品は全部で10曲。シリーズの５つのカテゴリーのうち「ピアノ曲」「ヴァイオリン曲」「歌曲」「アンサンブル」の４つに渡っている。もっともスナール社から刊行されたオネゲルの作品はこの10曲のみではなく、管弦楽曲などの編成の大きな作品も同社から出版されている[2]。

(1) 楽譜出版社 Senart ならびに「室内楽シリーズ」の概要については、本紀要第１号（2018）の調査報告「スナール社の挑戦」p. 49-56 を参照。なお、Senart はしばしば Sénart とも表記され、これに対応して「セナール」の片仮名表記も用いられるが、ここでは『ニューグローヴ世界音楽大事典』に準拠して「スナール」と表記する。

(2) 交響曲第１番、《交響的運動》３部作、《夏の牧歌》、《勝ち誇るオラース》、《喜びの歌》、《地球の戯言》、《世界の叫び》、ピアノと管弦楽のための《コンツェルティーノ》など。無伴奏フルートのための《牝山羊の踊り》もスナールから出版された。

左から、オネゲル、アンセルメ、ロラン=マニュエル。1925年撮影。
https://notrehistoire.ch/entries/0lyYKOR0Ynw

当然ながらそれらは室内楽シリーズのカテゴリーには含まれないが、それらの曲（の一部）をピアノ独奏曲等に編曲したものが室内楽シリーズにいくつか入っている［後述］。

シリーズに収録された個々の作品については次節以降で見ていくとして、付録の冊子を先に見ておこう。スナール室内楽シリーズに毎号「付録論考 Suppléement littéraire et critique」と題した冊子が附いてくること、この冊子には、各号の内容の紹介に加えて、演奏会評や作曲家論などが掲載されたこと、については、紀要第1号の調査報告で記したが、1924年第2期の「付録論考」には、音楽評論家ロラン＝マニュエル Alexis Roland-Manuel（1891 ～ 1966年）がオネゲル論を執筆している。

ロラン＝マニュエルはオネゲルの生い立ち、音楽家としての経歴、代表作を紹介しながら、オネゲルとフランス六人組との相違を繰り返し強調している。フランス六人組 Les Six は、サティ Erik Satie（1866 ～ 1925年）に影響を受けた六人の作曲家の集まりで、詩人ジャン・コクトー Jean Cocteau(1889 ～ 1963年)の『雄鶏とアルルカン』が彼らの美学のマニフェストとされる。六人組の名づけ親は作曲家で音楽評論家のアンリ・コレ Henri Collet（1885 ～ 1951年）[3]だが、ロラン＝マニュエルによれば、コレがオネゲルをグループに含めたのは軽率であり、たとえ友情で結ばれていたとしても、音楽家としての資質や傾向は他のメンバーと明らかに異なる。オネゲルはサティの音楽やコクトーの美学の影響は受けておらず、オラトリオ《ダビデ王》が示すように、作風はより重厚でシリアスである。そしてこのような作風の根本には、ドイツ的なもの（ロマン主義）とフランス的なもの（簡潔さ、節度）との融合がある――とロラン＝マニュエルは言うのである。この判断は、オネゲルの両親がスイス人で、本人もチューリッヒ籍であり、母国語がスイス・ドイツ語であること、ベートーヴェンを糧として育ったこと等々を踏まえてのものであろう。

(3)「六人組 Les Six」の名称は、アンリ・コレが芸能評論誌『コメディア』1920年1月16日号に書いた記事「5人のロシア人と6人のフランス人」による。コレはスナール室内楽シリーズの付録論考の執筆者の一人であった。以下も参照。Jean Gallois: *Henri Collet*, Papillon, 2001, p. 43.

2. ピアノ曲

スナール室内楽シリーズの「ピアノ曲」編に収められたオネゲルの作品は4篇[表]。そのうち、最初からピアノ独奏曲として書かれたのは《ロマンドの音楽帖》のみで、他は管弦楽曲からの編曲である。

《ロマンドの音楽帖 *Le Cahier Romand*》は5曲からなる小品集。1921年から23年にかけて作曲された。各曲はスイス・ロマンド地方のオネゲルの友人たちに献呈されており、たとえば第2曲はジャックリーヌ・アンセルメ――スイスの指揮者アンセルメの娘、アンヌ・ジャックリーヌ Anne Jacqueline Ansermet（1907～没年不明）であろう――に、第5曲はオネゲルの出世作《ダビデ王》の台本を書いたルネ・モラ[後述]に献呈されている。初演は独立音楽協会のコンサートで、アンドレ・ヴォラブール Andrée Vaurabourg（1894～1980年）によって行われた。ヴォラブールはのちのオネゲル夫人で、オネゲルの他のピアノ曲や《ピアノと管弦楽のためのコンチェルティーノ》も初演している。

興味深いことに《ロマンドの音楽帖》に関しては、ロラン＝マニュエルが否定したサティの影響を指摘する声がある。「第1曲目から、オスティナートでたえまなく繰り返される同じメロディーの断片と、2パートの構成が用いられ、サティの手法を思わせる。4曲目はドビュッシーの吟遊詩人[《前奏曲集》第1巻第12曲〈ミンストレル〉]を想起させるが、同時にメロディーの不在にもかかわらずサティ風の印象も与える。この印象はオクターヴの出てくる部分でさらに強くなる。5曲目は《ジムノペディ》にどこか似ているが、メロディーは寂しいし、左手の調性は曖昧である。最後の短い曲が、いちばんサティ風であろう(4)。」5曲目がサティ風であることはギイ・サクルも指摘しており、このごく短い曲が「そのエッセンスを最良のサティに負うもの」で「オネゲルのピアノ曲のなかで最も感動的な瞬間」であるとしている(5)。

ピアノ音楽編

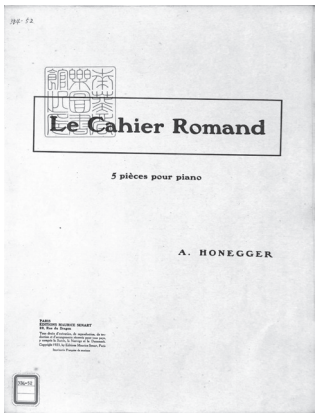
《ロマンドの音楽帖》1923年第2期
Le cahier romand H.52

《歓喜の歌》 1924年第2期
Chant de Joie H.47

《パシフィック231》1926年第1期
Pacific 231 H.53

《ローマに降る雪》 1927年
La neige sur Rome H.60B
※劇音楽《岩壁の皇后 *L'Impératrice aux rochers*》より

※「H.」はハリー・ハルブライヒによるオネゲル作品番号。



オネゲル《ロマンドの音楽帖》
楽譜の表紙

ヴァイオリンを持っているのがヴォラブール。その右がオネゲル。ピアノの前に坐っているのはコクトー。
https://en.expertissim.com/cocteau-jean-1889-1963-with-arthur-honegger-andree-vaurabourg-12150318

(4) エヴリン・ユラール＝ヴィルタール『フランス六人組 20年代パリ音楽家群像』飛幡祐規訳 晶文社 , 1989, p. 173.
(5)Guy Sacre, *La Musique de piano, dictionnaire des compositeurs et des oeuvres*, Robert Laffont, 1998, p. 1428.

オネゲル《パシフィック231》
ピアノ独奏版　楽譜の表紙
先軸-動輪-後軸の軸数が2-3-1のタイプを、フランスでは「231」、アメリカでは「Pacific」と呼ぶ。したがってPacific = 231 。実際、原曲の管弦楽曲のタイトルは" Pacific (231) "となっている。

《パシフィック231 *Pacific 231*》はオネゲルの作品でもっともよく知られたもののひとつであろう。原曲は管弦楽曲で「交響的運動(楽章) *Mouvement symphonique*」三部作の第1番[6]。スイスの指揮者エルネスト・アンセルメ Ernest Ansermet（1883～1969年)に献呈。初演は1924年5月8日、セルゲイ・クーセヴィツキー指揮パリ・オペラ座管弦楽団により行われた。ロラン＝マニュエルは「付録論考」のオネゲル論でこの曲を絶賛している。

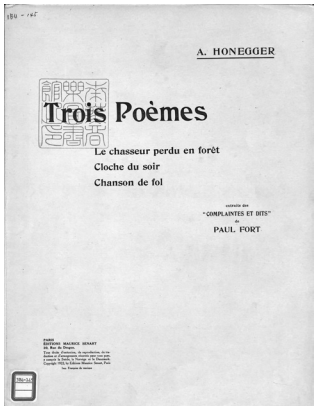
原曲の管弦楽曲が高く評価されたためであろう、これをピアノ独奏用に編曲したものが室内楽シリーズのピアノ曲編に組み込まれた(1926年)。編曲者のアドルフ・ボルシャール Adolphe Borchard（1882～1967年)はフランスの作曲家・ピアニスト。主にシャンソンや映画音楽を作曲し、サシャ・ギトリ監督の映画『とらんぷ譚 *Le Roman d'un tricheur*』(1936年)には自らピアニスト役で出演している。楽譜には被献呈者としてアンドレ・ヴォラブールの名が記されている。この楽譜が出版された1926年にヴォラブールはオネゲルと結婚した。

歌とピアノ編
《ポール・フォールの3つの詩》
Trois poemes de Paul Fort H.9
1921年第2期
《コクトーの6つの詩情》
Six poésies de Jean Cocteau H.51
1924年第1期
《祈り》*Prière* H.52
1925年第2期
《3つの唄》*Trois chansons* H.63
1927年

3. 歌曲

のちに述べるように、《祈り》《3つの唄》は歌曲として書かれたものではなく、劇音楽からの抜粋である。最初からピアノ伴奏の歌曲として作曲されたのは《ポール・フォールの3つの詩》と《コクトーの6つの詩情》の2つ。

《ポール・フォールの3つの詩 *Trois Poèmes de Paul Fort*》は1916年作曲。〈森の中で道に迷った狩人〉〈夕暮れの鐘〉〈道化の唄〉の3篇からなる。ポール・フォール Paul Fort（1872～1960年）は象徴派の影響下に出発し、リュネ・ポーらと「芸術座」(のち「制作座」)を立ち上げ、メーテルランクらの象徴派演劇を舞台にかけたが、のちに象徴派から離れ、より平明で庶民的な作風に移行した。その歩みをたどるかのように、オネゲルの歌曲は、ドビュッシーやラヴェルの影響を感じさせつつも、六人組らしい簡潔さや率直さ、ユーモアをすでに示している。第2曲〈夕暮れの鐘〉に聞かれる祈りの歌には、のちのオラトリオ作曲家の萌芽を見ることもできよう[7]。

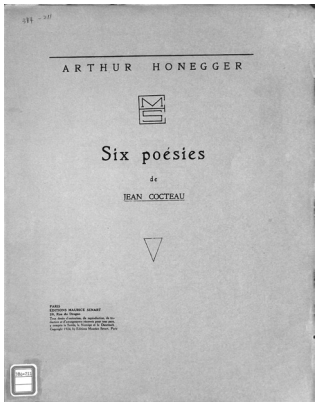


オネゲル《ポール・フォールの3つの詩》　楽譜の表紙

(6) 第2番《ラグビー》(1928年)、第3番[タイトルなし](1932年)。いずれもスナール社から刊行された。
(7) フランソワ・ル・ルー, ロマン・レイナルディ『フランス歌曲の珠玉』美山節子, 山田兼士訳, 春秋社, 2009, p. 239.

なお、第1曲〈森の中で道に迷った狩人〉は、スナールから出版される前に、フランスの代表的な音楽雑誌『ルヴュ・ミュジカル』1922年1月号に、付録として楽譜が掲載された。同じ号には《ロマンドの音楽帖》第1曲も《小品*Pièce*》の題名で掲載されており、また、詩人で音楽評論家であったルネ・シャリュ René Chalupt（1885～1957年）がオネゲル論を書いている。オネゲルに対する関心の高さがうかがわれるが、同時に、スナールと『ルヴュ・ミュジカル』とのつながりや、スナールの販売戦略（曲集の一部のみを付録として提供する）の一端を、ここに見て取ることもできよう。

《コクトーの6つの詩情 *Six poésies de Jean Cocteau*》は、オネゲルと六人組との微妙な距離を測定する上で興味深い。この歌曲集に関してもサティ（およびコクトー）の影響が指摘されているからである。「六人組美学の法典を信奉していなかったはずの彼が、[第1曲]〈黒人〉という題の詩につけた曲は初めから調性で、ラグタイムのリズムが効果的だ。伴奏もサティ風の調性の2パートからなっていて、六人組的スタイルの典型である[8]。」コクトーと六人組は黒人の音楽に強い関心を示したが、オネゲルもこれに無関心ではなかった。実際、オネゲルは《ピアノと管弦楽のためのコンチェルティーノ》（1924年）にジャズの影響を取り入れている。ロラン＝マニュエルは「オネゲルは、サティやコクトーや六人組から影響を受けなかった」と断じたが、両者の関係はもう少し微妙なものであったろう。



オネゲル《コクトーの6つの詩情》
楽譜の表紙

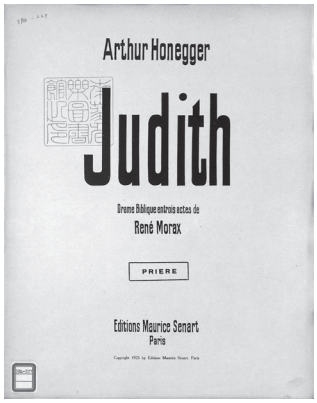
《3つの唄 *Trois Chansons*》は、人形劇《アンデルセンの「人魚姫」》（1926年）のために書かれた音楽。劇中で歌われる挿入歌であろう。原作はアンデルセン、劇の台本はルネ・モラ René Morax（1873～1963年）。ソプラノ、フルート、弦楽四重奏という編成だが、ピアノ伴奏版も作られ、後者がスナール室内楽シリーズ「歌曲」編に収められた。戯曲の上演に先駆け、1927年3月26日にパリで初演されている。

第1曲〈人魚たちの唄〉は、歌詞の内容からして、人魚姫が泡と化して消えてしまう場面で、仲間の人魚たちによって歌われるものかと思われる。複調性による波と泡の表現が見事。第2曲〈人魚姫の子守唄〉は、誰かをあやして寝かしつける唄ではなく、自分たちを揺すってほしいと海に向かって訴える唄のようだ。第3曲〈梨の

ルネ・モラ
https://notrehistoire.ch/entries/JN9Yd4evYKw

(8) ユラール＝ヴィルタール，前掲書，p. 188.

唄〉は、西洋梨が捥がれ、叩かれ、潰されて、その果汁を飲まれてしまうさまをユーモラスに歌う。どんな場面で誰が歌う歌なのかは不明だが、歌い手は人魚姫ではないかもしれない(9)。



オネゲル《ユディト》 楽譜の表紙

4. オラトリオ《ユディト》

室内楽シリーズの「歌曲」編には**《祈り *Prière*》**という短い歌曲が入っているが、これはオネゲルの**オラトリオ《ユディト》**からの抜粋。台本は《アンデルセンの「人魚姫」》と同様、ルネ・モラである。

モラはスイスの劇作家。ロマン･ロランの「民衆演劇」の理念に影響を受け、スイスはローザンヌにほど近いメジエールに「ジョラ劇場 Théâtre du Jorat」を立ち上げた(1908年)。第一次世界大戦中は劇場は閉鎖されていたが、1921年に活動を再開。その第1作として上演されたのが『ダビデ王 *Le Roi David*』であり、その音楽を担当したのがオネゲルであった。オネゲルの音楽は、現代的な手法を駆使しながら、一般大衆にも分かりやすいものになっていて、大成功をおさめた。1923年に芝居抜きでも演奏できるようオラトリオ版が作られ、これがオネゲルの初期の代表作となった(10)。ロラン＝マニュエルは《ダビデ王》を、オネゲルと他の六人組のメンバーとの方向性の違いを明確に示した作品と位置づけている。

そのオネゲルとモラが再び手を組んだのが『ユディト』(1925年)である。《ダビデ王》と同様、モラが台本を、オネゲルが音楽を担当し、ジョラ劇場で上演された。戯曲の題材が旧約聖書(『ユディト記』)によるものであることも、《ダビデ王》と共通している。オネゲルの音楽は、ジョラ劇場での初演で主役を歌った歌手、クレール・クロワザ Claire Croiza（1882 ～ 1947年）に献呈された(11)。

だが、《ユディト》は、《ダビデ王》ほどの成功をジョラ劇場で収めることはできなかった。その原因として、

左から、クレール・クロワザ(ユディト役)、オネゲル、ピエール･アルコヴェル(ホロフェルネス役)。
写 真 は Kate Espasandin, *Musical Modernism at the People's Theatre: Arthur Honegger and René Morax's Judith at the Théâtre du Jorat* (Schulich School of Music, McGill University, Montreal, 2013) より。

(9) この3篇の歌曲の歌詞には、堀口大學による訳がある。「三潴牧子 第五回獨唱會(現代イタリア及フランス歌謡曲)、(1929年5月6日)」のために訳された。『堀口大學全集』第4巻「訳詩 III」小沢書店, 1982, p. 461-462.

(10)《ダビデ王》自体はスイス・ローザンヌの出版社 Fœtisch Frères から刊行されており、スナール社とは無関係。

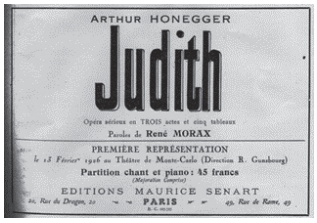
(11)クロワザはこの時期オネゲルと親密な関係にあり、1926年には息子ジャン＝クロードが生まれているが、結局二人は結婚しなかった。1929年にクロワザはオネゲルのピアノ伴奏で、オネゲルの歌曲〈秋〉(《6つのアポリネールの詩》第3曲)、《アンデルセンの「人魚姫」の唄》第1, 第2曲を録音している。また、1928～29年には、Louis de Vocht の指揮で《ユディト》の抜粋を録音している。

題材そのものの難しさや、台本の難点などが指摘されているが、オネゲルの音楽自体、《ダビデ王》ほど親しみやすいものにはなっていない。オネゲルの研究家ハリー・ハルブライヒ　Harry Halbreich によれば、「人々は前作のさまざまな特徴を期待し、予想したのに、それらは《ユディト》にはまったく見られず、反対に《ユディト》が打ち出した新しい側面は、人々にはまったく理解されなかった」。だが、それはまさに「《ユディト》のほうが《ダビデ王》よりも円熟していて、完成度が高くて、奥が深く、様式的にはより統一されていて、表現はより個性的で、語法はより現代的」であったからである(12)。

《ダビデ王》と同様、《ユディト》も劇音楽からオラトリオへと改作されたが、同時に歌劇版も作られた。楽譜はいずれもスナールから刊行。室内楽シリーズに収録された《祈り》は、オラトリオの第1部第3曲に当たる。オラトリオの第1部で、主人公ユディトはベトリアの街を守るため、街を包囲している敵軍の将、ホロフェルネスのもとに赴く決意を固める。《祈り》は、ユディトがいよいよ敵陣に向かうというときに、神の加護をもとめて祈る場面の音楽である。

5. スナールと音楽雑誌『ルヴュ・ミュジカル』

スナール社はフランスの音楽雑誌『ルヴュ・ミュジカル』に頻繁に自社広告を掲載しているが、その広告の幾つかは《ユディト》を大きく扱っている。



『ルヴュ・ミュジカル』1926年2月号掲載の広告。

○1925年6月号

近刊としてオネゲル《ユディト》とダンディ《ピアノ五重奏曲》を並べて広告。後者は「スナール室内楽シリーズ」1925年第1期・アンサンブル編の一環として出版。

○1926年2月号

《ユディト》歌劇版の世界初演 (モンテカルロ歌劇場、2月13日) に合わせ、ヴォーカル・スコアを宣伝。

○1928年5月号

《ユディト》オラトリオ版のパリ初演(5月18日) に合わせ、ヴォーカル・スコアを宣伝。

このように特定の作曲家とその作品を大きく掲げるのは、少なくとも『ルヴュ・ミュジカル』掲載のスナール

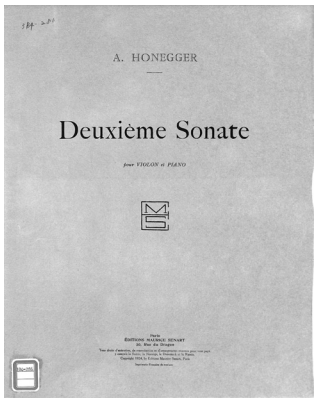
(12)CD [Cacavelle VEI 1013, 1991年] 解説より。

社の広告では珍しい。それだけ《ユディト》に対する人々の期待が大きかったということであろうが、同時に、オネゲルがスナール社を代表する“看板作曲家”の一人であったことがうかがわれる[13]。

残念ながら《ユディト》は《ダビデ王》ほどの成功を収めることはできず、オラトリオ版や歌劇版も《ダビデ王》に比べると全くと言ってよいほど知られていない。しかしこのあとオネゲルは、詩人のポール・クローデル Paul Claudel（1868 ～ 1955年）との出会いにより、オラトリオの作曲家としての資質を十二分に発揮することになる。それが《火刑台上のジャンヌ・ダルク *Jeanne d'Arc au bûcher*》である（1935年作曲、38年初演）。そして、《ダビデ王》から《ユディト》を経由して《火刑台上のジャンヌ·ダルク》へと至る線にこそ、六人組とは異なるオネゲルの音楽の本質が表現されている――ロラン＝マニュエルは恐らくそう考えていたであろう。

ヴァイオリンとピアノ編
《ソナタ》第2番　1924年第2期
Deuxieme Sonate H.24

アンサンブル編
《ラプソディ》　1923年第1期
Rhapsodie H. 13



オネゲル《ヴァイオリン・ソナタ》第2番　楽譜の表紙

6. ソナタとラプソディ

残る2つのカテゴリー、「ヴァイオリン」と「アンサンブル」についても、ここで簡単に触れておこう。

オネゲルはヴァイオリンのためのソナタを3曲書いているが、スナール室内楽シリーズに入っているのは第2番。1919年に作曲され、1920年1月8日にダリウス・ミヨーの家で、オネゲル自身のヴァイオリン、ヴォラブールのピアノにより、私的な初演が行われた。実は、この日の客の中にいたのが、本稿第1節で触れたアンリ・コレである。彼はこの日、ミヨーの家に集まっていた6人の作曲家のうちに或る共通の傾向を認めて「六人組」と呼ぶことにしたのだが、その記念すべき日に演奏されていたのがオネゲルのソナタ第2番であった[14]。ただ、その第1楽章はいわば「フォーレを多調にしたもの」(ハルブライヒ) [15] で、六人組的な音楽の典型とは言い難い。

一方、「アンサンブル」編に収められた《ラプソディ *Rapsodie*》（1917年作曲）は、2本のフルート、1本のクラリネット、ピアノ（あるいは2台のヴァイオリン、1台のヴィオラ、ピアノ）、というユニークな編成で書かれている。管楽器を重用すること、従来にない組み合

(13) スナール社は 1928 年にオネゲルの交響的運動第 2 番《ラグビー》の豪華版を刊行。これも『ルヴュ・ミュジカル』誌上の広告で大きく扱われている。
(14)Jean Gallois, 前掲書 , p. 43.
(15)CD [Timpani 1C1008, 1992 年] 解説より。

わせで用いることは、ユラール＝ヴィルタールも指摘するように六人組が好んだ手法であり、この点で《ラプソディ》はいかにも六人組的である[16]。その一方で、ドビュッシーやラヴェルの影響が随所にうかがわれることも否めない。

かくしてスナール室内楽シリーズに収められたオネゲル初期の作品は、オラトリオ作曲家としてのオネゲルの歩みを跡づけるとともに、オネゲルと六人組との微妙な距離――遠さと近さ――をうかがわせるものとなっている。

7. オネゲル、スナールを語る

オネゲルは、音楽評論家ベルナール・ガヴォティとの対談の中で、音楽出版社の果たす役割をめぐって、スナール室内楽シリーズに言及している［資料］。無論、スナールの側の言い分を聞かずに、オネゲルの側の発言だけを鵜呑みにするわけにもいくまいが、スナール室内楽シリーズの困難を指摘した、貴重な証言と言えよう。特に、出版に値する作品を集めることの難しさは、1927年の室内楽シリーズの方向転換と無関係ではあるまい。この年スナール社は、デュランやルアール・ルロルなどの他社の楽譜をシリーズにまぜて出すことにしたのである[17]。この1927年度刊行分を最後に、南葵音楽文庫所蔵の室内楽シリーズの楽譜は途切れている。そして、翌1928年以降、『ルヴュ・ミュジカル』からスナール室内楽シリーズの広告は姿を消すのである。

1941年にスナール社の楽譜はサラベール社 Salabert に売却。当初スナールから刊行された楽譜の多くは、オネゲルの作品も含めて、サラベール社から再刊されることになった。また、サラベール社は、スナールから引き継いだオネゲルの旧作だけでなく、第2番から第5番までの《交響曲》や《クリスマス・カンタータ》など、オネゲルの新作も刊行している。

【資料】

オネゲル
音楽出版の経済事情はとてもデリケートです。例をあげてみると、セナール [ママ] 出版社は室内楽という標題で三カ月 [ママ] ごとに、ピアノとヴァイオリンのソナター つ、ピアノとチェロのソナター つ、ピアノのはいった三重奏ないし四重奏を一つ、ピアノの小品数曲を出版していました。この出版は雑誌みたいなもので、じつにわずかな価格で予約で売っていた。

ガヴォティ
うまくゆきましたか？

オネゲル
じょうだんでしょう！　作曲者をさがすのが、予約者を集めるのにおとらず、たいへんだった。毎年、ヴァイオリン・ソナタ四曲、チェロソナタ四曲、三重奏ないし四重奏曲、それも名作といわないまでも、出版されるに値するものをみつけるなんて、むちゃな計画ですよ！　たちまち原稿につまってしまって、セナールは疑問の余地のある作品を出版するようになっちゃった。凡庸な作曲家がまるで救世主みたいなかっこうで、ソナタをわきの下にまるめこんであらわれてきた！

ガヴォティ
予約者のほうは……

オネゲル
彼らはもう少し高くても気に入ったソナタを買ったほうがよいという……

(オネゲル『わたしは作曲家である』吉田秀和訳 音楽之友社, 1970, p. 50-51)

(16) ユラール＝ヴィルタール, 前掲書, p. 178.
(17) 以下を参照。近藤秀樹「スナール社の挑戦」本紀要第1号（2018）, p. 49-56.

エピローグ：仕事への讃歌

最後に、室内楽シリーズには含まれないが、オネゲルとスナールとの関係を語る上で外すことのできない、小さな曲について触れておきたい。《仕事への讃歌 *Hommage au trail*》と題されたシャンソンである。歌詞はモーリス・スナール Maurice Senart（1878～1962年）その人によるもので、1938年に作曲され（楽譜の末尾には「1938年12月31日」と記されている）、翌年スナール社から出版。1955年にマックス・エシック社 Max Eschig から再刊された。歌詞は仕事の喜びと意義を讃える素朴なもので、曲も有節形式によっていて単純平明である。

オネゲルはいわゆる芸術歌曲 Mélodie とは別に、劇音楽の一齣（劇中歌など）としてシャンソンに類した歌も多数書いており、それらは当時のシャンソニエたちによって歌われ、録音もされている。しかしながらこの曲は、歌詞の内容から見て、むしろ同時期にオネゲルが書いた「アンガジュマンの音楽」――ロマン・ロランの革命劇『7月14日 *Le 14 Juillet*』（1936年）のための吹奏楽曲《バスティーユへの行進 *March sur la Bastille*》や、人民戦線への共感から書かれた合唱曲《若者たち *Jeunesse*》（1937年）など――に近い[18]。《仕事への讃歌》の歌詞と曲の平明さは、この観点から理解されるべきであろう。

してみれば、このささやかなコラボレーションには、オネゲルとスナールのつながりの記念というだけでなく、両者が歩んだ困難な時代の記録という意味もあるであろう。オネゲルとスナール室内楽シリーズをめぐる論考の末尾に、この忘れられた小さな歌を敢えて取り上げる所以である。

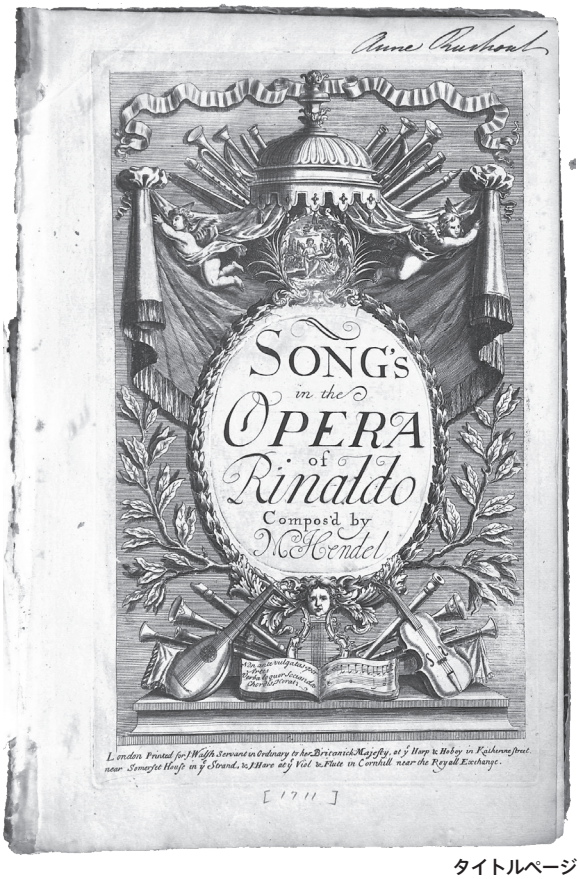
(18) 以下を参照。Catherine Miller, *Cocteau, Apollinaire, Claudel et le groupe des Six*, p. 77.

資料紹介

《ヘンデル氏の作曲によるオペラ「リナルド」の歌曲集》初版楽譜

***Songs in the Opera of Rinaldo, compos'd by Mr. Hendel*, London: J. Walsh, n.d. [1711]. Passe-partout titlepage, "A table of the Songs", 65p. 31cm.（収蔵番号 N-7/22）**

オペラ《リナルド *Rinaldo*》HWV7a は、ジョージ・フレデリク・ヘンデル George Frederic Handel（1685 ～ 1759 年）が、イギリスのために作曲した最初のオペラ作品であると同時に、野心あふれる音楽家たちがロンドンで上演するために書いた多数のイタリア語オペラの中で最初の作品となったものであった。1711 年 2 月 14 日にロンドンのクィーンズ劇場で初演され、好評を博して同年 6 月までに 15 回上演されている。物語は、トルクァート・タッソー Torquato Tasso の叙事詩《解放されたエルサレム *La Gerusalemme liberata*》（1581 年刊行）に基づいており、ロンドンのヘイマーケット劇場の支配人アーロン・ヒル Aaron Hill（1685 ～ 1750 年）があらすじをまとめ、劇場詩人ジャコモ・ロッシ Giacomo Rossi（生没年不明）が台本を書き下ろした。ヘンデルは、音楽のかなりの部分を旧作から転用したが、わずか 2 週間で作品を完成させたと伝えられる [1]。



タイトルページ

《ヘンデル氏の作曲によるオペラ「リナルド」の歌曲集》は、《リナルド》の初演後、まとまった形で出版された最初の楽譜である [2]。出版年代は記載されていないが、1711 年 4 月 24 日付け *The Daily Courant* 紙に「ちょうど出版された新刊楽譜 New Musick, just Publish'd」として記事が掲載されていることから、同月中旬には刊行されたと考えられる [3]。新ヘンデル全集（いわゆるハレ版）のオペラ《リナルド》の批判報告では、この歌曲集をヘンデルの自筆楽譜から直接作られた重要な資料と見なし、歌詞付けやフレージングの点で相応の注意を払って作られていると評価している [4]。表題にある "Hendel" という表記は、イタリア滞在中（1706 ～ 10 年）のヘンデルに対してイタリア人た

(1) ヘンデルが、《リナルド》を「2 週間」で作曲したという逸話は、そのリブレット（*Rinaldo, Opera da rappresentarsi nel Reggio Teatro a Londra*, London, 1711）に掲載されたジャコモ・ロッシの「賛辞」による。リブレットは、*Halleische Handel-Ausgabe*, Series II: Opern Band 4/1, 1993, XX 以下に収録されている。

(2)William C. Smith, *Handel, A Descriptive Catalogue of the Early Editions*, London: Cassell, 1960, p. 56.

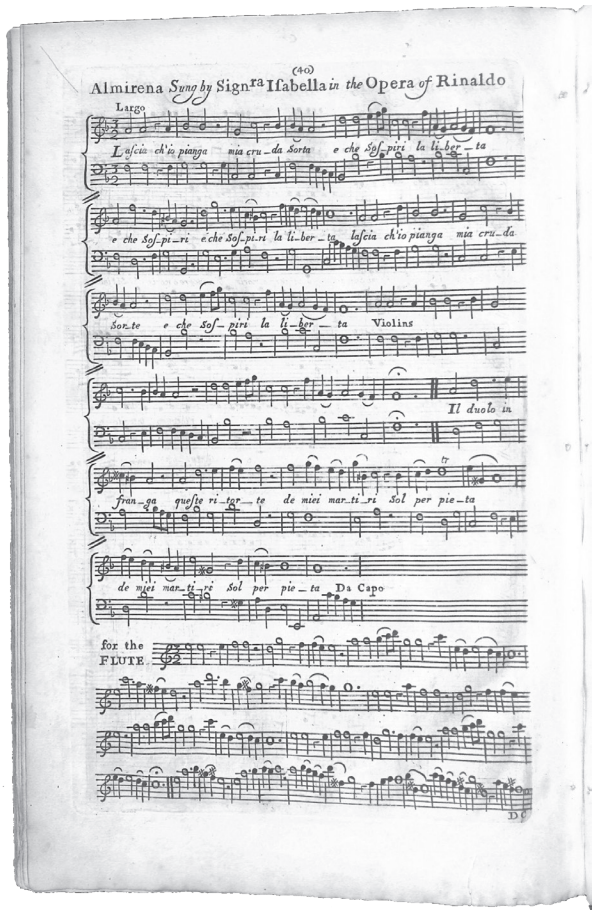
(3)*George Frideric Handel, Collected Documents*, vol. 1, 1609-1725, Cambridge, 2013, p.210. 新聞記事は、歌曲集は「ジョージ・フレデリク・ヘンデル氏によって作曲され、正確に修正されている」と紹介している。

(4) 前掲書、*Halleische Handel-Ausgabe*, Series II: Opern Band 4/1, XII 及び p. 257.

ちによって使われ、その後もロンドンで出版された初期の楽譜に見られるものである[5]。出版者のジョン・ウォルシュ John Walsh（1665/66 ～ 1726 年）は、出版者、楽譜商、楽器商として 17 世紀終わりからロンドンで活躍し、多くのヘンデルの作品を出版したことで知られている。またパスパルトゥー手法によって、本書のような装飾的な図柄を表紙に用いた最初の印刷業者でもあった。

この《オペラ「リナルド」の歌曲集》は、南葵音楽文庫収蔵資料の中核となるウィリアム・ヘイマン・カミングスの旧蔵書（カミングス文庫）に含まれる[6]。表紙裏側には、カミングスの蔵書票の他、その来歴を知る手がかりがいくつか残されている。それらの中で興味深いのは、イングランド南西部グロスタシャーのノースウィック・パークを領地とする初代ノースウィック男爵ジョン・ラッシュアウト John Rushout（1738 ～ 1800 年）の夫人レベッカ・ボウルズ Rebecca Bowles（1740 ～ 1818 年）のサインと、タイトルページにも見られる "Anne Rushout" という、彼らの長女アン･ラッシュアウト（1768 ～ 1849 年）のサインである。残念なことに、王冠と共に "RN" と記された蔵書票の所有者は明らかではない。また、カミングスがそれを入手した経緯についても不明である[7]。

収録されているのは、初演当時に演奏された序曲の他、アリア、二重唱、合唱の



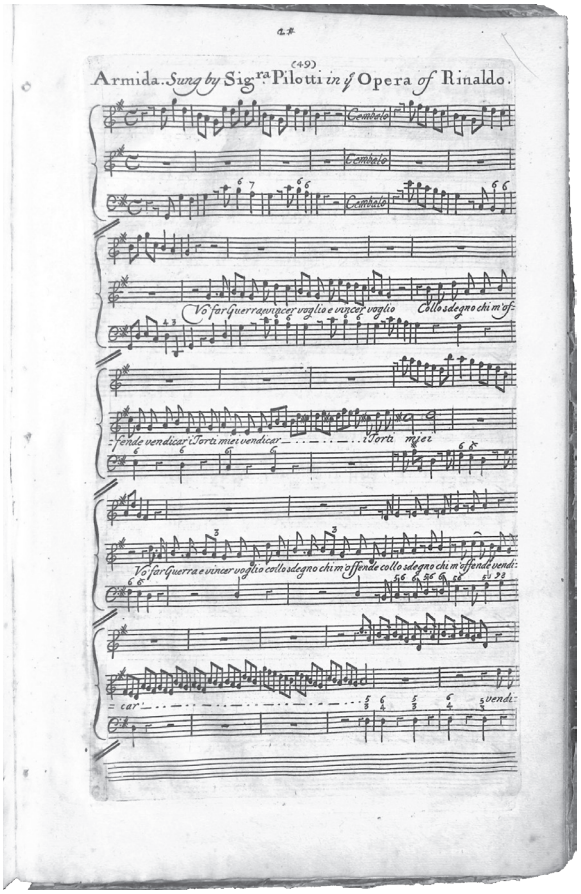
第２幕第４景で歌われるアルミレーナのアリア
〈どうか泣くのを許して下さい *Lascia ch'io pianga*〉
伴奏は通奏低音のみが記され、下に移調されたフルート（リコーダー）用の楽譜が添えられている。表題には、このアリアを初演の時に歌ったアルミレーナ役のイザベッラ・ジラルドー Isabelle Girardeau の名が書き添えられている。

(5)"Hendel" という表記は、ドイツ語によるヘンデルの本来の表記である "Georg Friedrich Händel" の "ä"（a-Umlaut）をイタリア人やイギリス人が発音できなかったことに由来すると考えられる。イタリア人は、ヘンデルの名のしばしばイタリア風に "Giorgio Federico Hendel" と表記し、ヘンデル自身も同じようにサインした（例えば、ローマにおけるヘンデルのパトロンであったパンフィリ家の 1707 年 5 月 14 日付け勘定書。前掲書 *George Frideric Handel, Collected Documents*, vol. 1, p. 89-91）。イギリス人は、後にヘンデルを "George Frideric [Frederick] Handel" と表記するが、それは、出版楽譜においては、1720 年代以降のことであった。

(6) この歌曲集は、W. H. カミングスの没後に開催されたその蔵書の競売（1917 年 5 月 17 ～ 23 日）で競売番号 795 番として競りにかけられた。しかし、買い手がつかなかったために遺族に返却され、その後、他の資料と共に徳川頼貞が遺族から購入している。*Catalogue of the Famous Musical Library of Books, Manuscripts, Autograph Letters, Musical Scores, etc. The Property of the Late W.H.Cummings, Mus. Doc. of Sydcote, Dulwich, S.E. Sold by Order of the Executors* (London: Dryden Press, 1917).

(7) 来歴の詳細については図版を含め、本紀要 p.32-34 を参照。

全曲である[8]。レチタティーヴォと、序曲以外の器楽曲は含まれていない。ただし、アリアを伴奏する大規模なオーケストラ（通奏低音を含む弦楽合奏の他、オーボエ、リコーダー、トランペット、打楽器を伴う）については、ほとんどが省略され、通奏低音の他は、多くの場合に前奏などの主旋律を担う第 1 ヴァイオリンの旋律のみが書かれている。すなわち、この歌曲集は、本格的な演奏を前提とするのではなく、例えば家庭で、劇場で聴いたアリアを楽しみたいという愛好家のために出版されたものなのであろう。また、伴奏の簡略化は、紙面を節約するという目的もあったと考えられる。しかしその一方で、伴奏を簡略化してアリアを 1 ページ、あるいは 2 ページに記譜し、余白ができた場合には、そこに「フルート」（リコーダー）でアリアの旋律を容易に演奏できるように移調した楽譜が書き加えられた。



第 2 幕第 10 景で歌われる
〈私は戦いを挑み *Vo' far guerra*〉の前半部分
第 5 小節目に「チェンバロ cembalo」とのみ記載され、楽譜は書かれていない。

収録されたアリアのうち第 2 幕第 10 景で歌われる〈私は戦いを挑み *Vo' far guerra*〉の楽譜は、ヘンデルがオペラを上演する際にチェンバロ奏者として参加していたことを示している。第 5 小節目には「チェンバロ cembalo」とのみ記載され、楽譜が書かれていない。ヘンデルはここで即興演奏を行い、観客を喜ばせたという[9]。

初演当時の上演の様子を知る手がかりが、もうひとつこの歌曲集にはある。それは、アリアごとに歌った歌手たちの名が記載されていることである。主役のリナルドを歌ったニコリーニ・グリマルディ Nicolini Grimaldi（1673 ～ 1732 年）をはじめ、6 名の歌手の名を確認することができ、それらはリブレット[10]の記載と一致する。（佐々木勉）

(8) この歌曲集では、第 2 幕第 3 景でエウスタツィオが歌うアリアとして〈盲目の愛に引きずられて *Scorta rea di ciero amore?*〉が含まれているが、それはリブレット（注 1 参照）には掲載されていない。また逆に、リブレットには第 3 幕第 11 景のゴフレッドのアリア〈ただ剣と分別によって *Solo dal brando*〉が掲載されているが、この歌曲集には含まれていない。これらは、ヘンデルが初演後、上演を重ねる中で追加、あるいは削除されたものと推測される。

(9) この歌曲集の 1731 年版では、この部分に「ヘンデル氏によって演奏されたハープシコードの小曲 Harpsichord Piece Perform'd by Mr. Handel」が加えられている。前掲書、*Halleische Handel-Ausgabe*, Series II: Opern Band 4/1, p. 257.

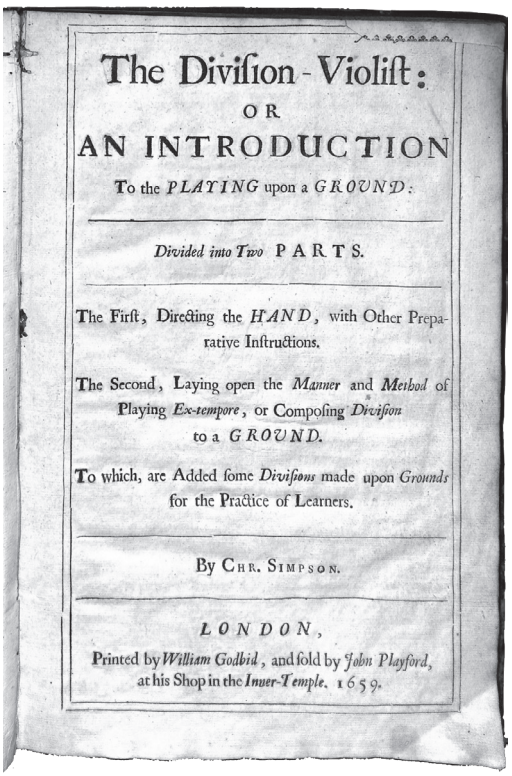
(10) 前掲書、リブレット、XXIII, Person represented (Personaggi).

クリストファー・シンプソン《ディヴィジョン・ヴァイオル奏者》とディヴィジョン関連資料

音楽における「ディヴィジョン division」とは、17 世紀のイギリスで「定旋律、あるいはグラウンドを構成する各音を、通常、音高の異なるより小さな音価の音符に分割する変奏技法」(1) に対して用いられた呼称である。南葵音楽文庫には、ディヴィジョンに関する理論書や曲集が 3 点収蔵されている。それらは、いずれもウィリアム・ヘイマン・カミングスの旧蔵書であったカミングス文庫に含まれる。カミングスの蒐集は、年代的にも、内容的にも広範囲にわたっているが、中心となっているのは、イギリスの 17 ～ 18 世紀の資料であり、これらの資料は、その点でカミングス文庫の核心的な存在といえる。

1.《ディヴィジョン・ヴァイオル奏者、あるいはグラウンド上での演奏の手引き》

The Division - Violist : or An Introduction to the Playing upon a Ground, divided into two parts. To which are added some divisions made upon grounds for the practice by Chr[istopher] Simpson. London, Printed by W. Godbild and sold by J. Playford, 1659. 67p. 31cm. RISM A/I S 3493 (収蔵番号 N-7/33)



The Division - Violist:
OR
AN INTRODUCTION
To the *PLAYING* upon a *GROUND*:

Divided into Two PARTS.

The First, Directing the *HAND*, with Other Preparative Instructions.

The Second, Laying open the *Manner* and *Method* of Playing *Ex-tempore*, or Composing *Division* to a *GROUND*.

To which, are Added some *Divisions* made upon *Grounds* for the Practice of Learners.

By Chr. Simpson.

LONDON,
Printed by *William Godbid*, and sold by *John Playford*, at his Shop in the *Inner-Temple*. 1659.

タイトルページ

クリストファー・シンプソン（1605 頃～ 69 年）は、17 世紀イギリスの最も重要な音楽理論家、弦楽器奏者で、ヴァイオリンなどの弦楽器によるコンソート音楽も少なからず残している。生涯については生没年を含めて不明な点が多いが、清教徒革命に王党派として参戦し、ヨーク攻囲（1644 年）後には、リンカーンシャー、スカンプトンのボルズ男爵家に仕え、第 2 代男爵ロバート・ボルズ Robert Bolles（1619 ～ 63 年）の庇護を受け、その息子の第 3 代男爵ジョン・ボルズ John Bolles（1641 ～ 86 年）の音楽教師を務めた。《ディヴィジョン・ヴァイオル奏者》はロバート・ボルズに献呈され、その献辞で本書がジョン・ボルズを指導するために書かれたことを明らかにしている。

《ディヴィジョン・ヴァイオル奏者》は、シンプソンの代表的な著作である。本文は２つに分けられ、第 1 部は「ディヴィジョンに適したヴァイオルの種類」に始まり、弓の種類、楽器の構え方などの基本的な奏法が、第 2 部では具体的にディヴィジョンの種類などをはじめ、その即興演奏法や作曲法が解説される。そして巻末には、「学習者の練習のためのディヴィジョン Divisions for the practice of Learners」と題された様々な技法による 11 曲の実例集が収録されている。

本書は好評を博し、1665 年には、第 2 版が、表題に《ケリス、グラウンドによる即興演奏の技法 *Chelys minuritionum*

(1)「ディヴィジョン」『ニューグローヴ世界音楽大事典』第 11 巻 , 講談社 , 1994, p. 110-112.

artificio exornata》（「ケリス」はラテン語で古代ギリシアの「リラ（竪琴）」の意）と追記されて、英語とラテン語の対訳の形で出版された。この第 2 版の本文は 3 部分から構成されているが、内容は初版と基本的に同じで、特に巻末の曲集は最初のページを除いて初版と同じ印版が用いられている。そして献呈を受けたのは、すでに他界したロバート・ボルズではなく、ジョン・ボルズであった。

2.《ディヴィジョン・ヴァイオリン：トレブル・ヴァイオリンのためのいくつかのグラウンドによるディヴィジョン曲集》

The Division - Violin : Containing A Collection of Divisions uopon several Grounds for the Treble - Violin, Being the First Musick of this kind made publick, The Third Edition, much enlarg'd. London, Printed on Copper-Plates, and sold by Henry Playford near the Temple Church, 1688. [60]p. 16 x 20cm.（収蔵番号 N-5/11）

タイトルページ

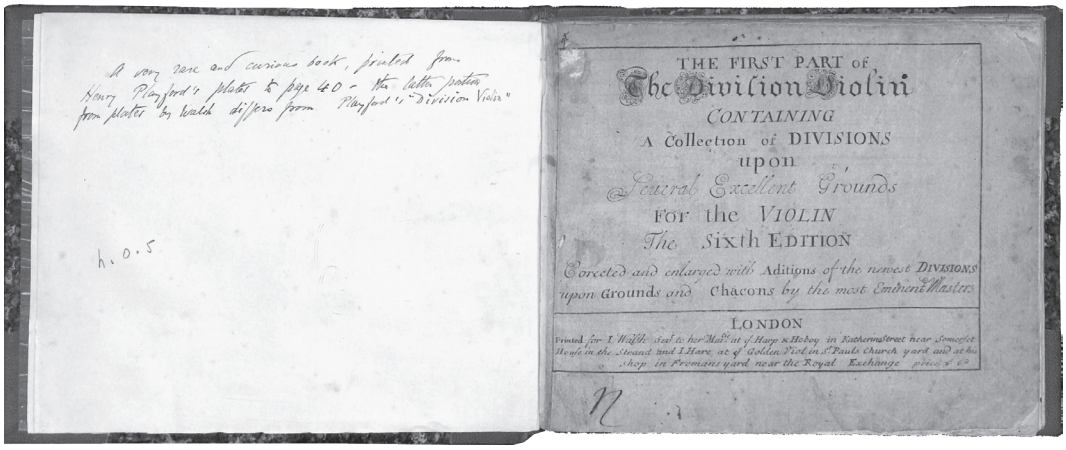
ヘンリー・プレイフォード（1657 ～ 1707 年頃）は、ロンドンで出版者、書籍商として成功を収めた父親のジョン・プレイフォード（1623 ～ 1686/7 年）の仕事を継ぎ、17 世紀末にはロンドンで最も有名な楽譜商として活躍した。本書は、1684 年に初版が出版され、その第 3 版となる。タイトルに「この種の音楽で最初に公刊された曲集」とあり、上述のシンプソンによる《ディヴィジョン・ヴァイオル奏者》はすでに 1659 年に出版されているものの、ディヴィジョンのみによる作品集としては最初のものとなった。36 曲が収録され、作曲者として上記のシンプソンをはじめ、ジョン・バニスター John Banister（1625 頃～ 79 年）、ロヴァート・スミス Robert Smith（1648 頃～ 75 年）ら、今日ではあまり知られていないが、生前にはロンドンの教会や宮廷礼拝堂で活躍した音楽家の名が挙げられている。第 27 曲は、有名な《グリーンスリーヴス、あるいはプディングパイと呼ばれるグラウンドによるディヴィジョン》である。

3.《ディヴィジョン・ヴァイオリン　第 1 部：ヴァイオリンのためのいくつかの優れたグラウンドによるディヴィジョン曲集》(2)

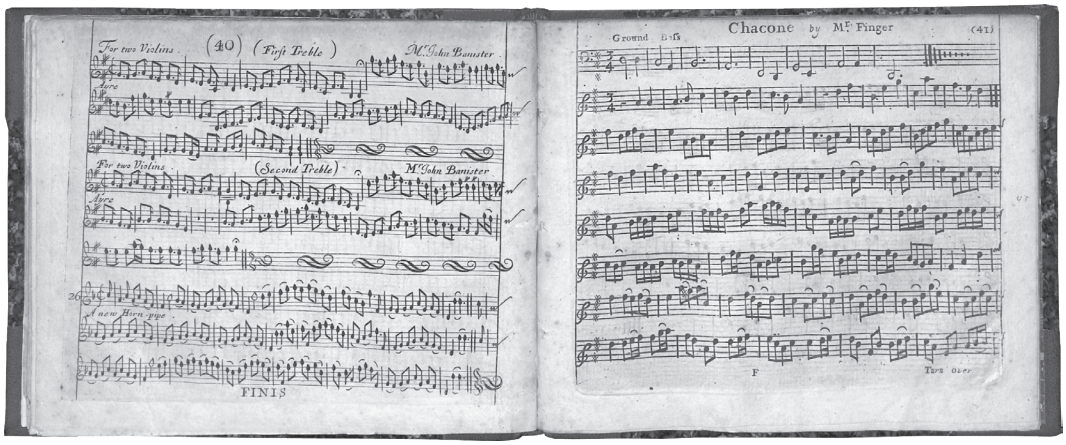
The First Part of the Division Violin, Containing A Collection of Divisions upon Several Excellent Grounds for the Violin, The Six Edition, Corrected and enlarged with additions of the newest divisions upon grounds and chacons by the most eminent masters, London, John Walsh, [1705]. 57p. 18 × 22cm.（収蔵番号 N-5/12）

本書を出版したジョン・ウォルシュ（1665/66 ～ 1736 年）は、1690 年頃にロンドンで楽譜商、楽器商、出版者として起業に成功し、92 年には、イングラ

(2) 現代版：Margaret Gilmore, Oxford : Oxford University Press,1982



タイトルページ　左側はカミングスによる書き込み



40～41ページ　ヘンリー・プレイフォードの印版（40[左]ページ）とジョン・ウォルシュの印版（41[右]ページ）

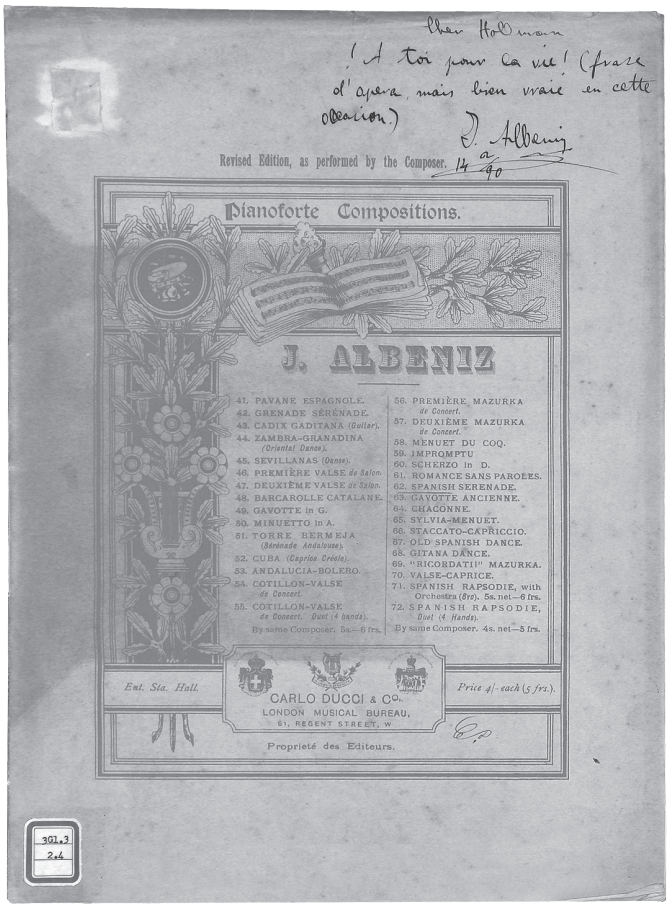
ンド国王ウィリアム 3 世（在位 1689 ～ 1702 年）から「王室御用達」の楽器商に指名されている。

カミングスは、しばしば蔵書にその特徴を書き込んだことで知られているが、本書にも「とても珍しい、奇妙な本。40 ページまではヘンリー・プレイフォードの印版で印刷されているが、それ以降の部分は、プレイフォードの《ディヴィジョン・ヴァイオリン》とは異なる、ウォルシュの印版による」という書き込みがある [3]。ここで言及されている、本書が「ヘンリー・プレイフォードの印版で印刷されている」という事実は、上記のプレイフォードによる《ディヴィジョン・ヴァイオリン》との比較から確認することができる。理由は明らかではないが、確かに上記の《ディヴィジョン・ヴァイオリン》と本書は、タイトルページや目次を除いて 40 ページ（第 26 曲）まで共通しており、41 ページ以降は、例えば楽譜の外観などが、それ以前とはまったく異なっている。また、本書の 39 ページは上下が逆さまに印刷されているが、これもプレイフォードの《ディヴィジョン・ヴァイオリン》（第 24 曲）と共通している。一方、プレイフォードの《ディヴィジョン・ヴァイオリン》は収録曲ごとに番号が付けられているのに対して、本書ではそれがページ番号に変更されているため、印版の曲番号の部分に修正が加えられた形跡がある。なお、収録曲は、上記のようにプレイフォードの《ディヴィジョン・ヴァイオリン》が 36 曲であるのに対して、本書は 32 曲である。　（佐々木勉）

(3)A very rare and curious book, printed from Henry Playford's plates to page 40 - the latter portion from plates by Walsh differs from Playford's "Division Violin".

アルベニス《スペイン風セレナータ》

Albéniz, Isaac. *Sérénade Espagnole (Spanish Serenade)*, Op. 181. London: C. Ducci & Co., 1890. 6p. 35cm.（収蔵番号 3G1.3/2.4）



Cher Hollman
! A toi pour la vie! (Frase d'Opera mais bien vraie en cette occasion.)
J. Albeniz
14/2/90

親愛なるホルマン！
命あるかぎり、君とともに！（まるでオペラのセリフだけど、いまここでは真実だ）
J. アルベニス
[18]90年2月14日

スペインの作曲家イサーク・アルベニス Isaac Albéniz（1860 ～ 1909 年）のピアノ小品。《カディス (サエータ)》の別名でも知られる（後述）。同じ曲の楽譜は、同年、バルセロナの J. B. Pjol & co. から《有名なスペイン風セレナータ *Célèbre Sérénade Espagnole*》の題で出版されている。この楽譜は南葵音楽文庫所蔵のホルマン文庫の一部 (1)。同曲にはさまざまな楽器のための編曲版が存在するが、この楽譜はチェロ用の編曲ではなく、ピアノ原曲である。

表紙右上にホルマンへの献辞がある。Frase は Phrase とすべきところを、うっかりスペイン語 Frase を書いてしまったものであろう。なお、楽譜表紙の作曲者名も献辞のサインも、"I. Albéniz" ではなく "J. Albeniz" となっている（同時期にスペインで刊行された楽譜では "I. Albéniz"）。あるいは当時のアルベニスはイギリスでは J. Albéniz で通していたのかもしれない。日付は「1890 年 2 月 14 日」と読める。

ロンドンのアルベニス

この時期、アルベニスはロンドンを活動の舞台としていた。アルベニスは 1889 年 4 月にパリでピアニスト兼作曲家としてデビューを飾ったあと、ロンドンに渡っ

(1) チェリストのジョセフ・ホルマンならびにホルマン文庫については以下を参照。美山良夫「ホルマン文庫所蔵ジョセフ・ホルマン作品　解題と資料一覧」本紀要第 2 号 , p. 96-111.

て演奏活動を展開、高い評価を得、ポーランド出身の実業家レーベンフェルド Henry Lowenfeld（1859 ～ 1931 年）から経済的援助を受けることとなる。かくしてアルベニスは、家族──妻ロジーナと3 人の子供たち──とともにロンドンに移住し、1893 年までロンドンを活動の拠点とすることになる。

ロンドン時代のアルベニスの活動は、ピアニストのそれにとどまらなかった。1890 年 11 月にはトマス・ブレトン Tomás Bréton（1850 ～ 1923 年）やルペルト・チャピ Ruperto Chapí（1851 ～ 1909 年）など、同時代のスペインの作曲家の作品を紹介する管弦楽のコンサートを企画。1892 年には、ギルバート＆サリヴァンの様式で喜歌劇《魔法のオパール *Magic Opal*》を作曲、翌年上演されて好評を博した。さらに 1893 年には富裕な銀行家バーデット・マニー＝カウツと相知り、経済的援助を受けるかわりに、彼の手になる英語台本で歌劇を作曲することになる。このように、この時期のアルベニスの活動は、「スペイン出身のヴィルトゥオーゾ・ピアニスト」の枠をはるかに超えて多彩である。

アルベニスとチェリストたち

上記の楽譜の献辞の日付が正しければ、アルベニスがホルマンにこの楽譜を贈ったのは、ロンドン時代の初期ということになる。W. A. クラークによれば、1890 年初頭のアルベニスは、複数の演奏家たちと一緒にイギリス各地を演奏して回っており、その間、或るチェリストと共演する機会があったようである [(2)]。一方のホルマンは、1885 年にロンドン・デビューを飾ったあと、たびたびイギリスで演奏をしたことが知られている。二人が舞台で共演したかどうかはともかく、《スペイン風セレナータ》に献辞が記されたのがイギリスにおいてであった可能性はある [(3)]。

なお、翌 1891 年に、アルベニスのピアノ伴奏でデビューを飾ったイギリスのチェリストがいる。ウィリアム･ヘンリー･スクワイヤ William Henry Squire（1871 ～ 1963 年）、のちにフォーレが名曲《シシリエンヌ》を献呈することになる人物である。また、1892 年には、アルベニスはイギリスで、チェリストのダーヴィト･ポッパー David Popper（1843 ～ 1913 年）と共演している。アルベニスのチェリストたちとの関係を示すとともに、彼の室内楽ピアニストとしての活躍ぶりを伝える、興味深い挿話である [(4)]。

サロン風小品とスペイン音楽

とはいえ、今日、アルベニスの作品で最も重視されているのは、室内楽曲でも歌劇でもなく、《イベリア *Iberia*》全 4 巻（1905 ～ 1908 年）を頂点とするピアノ曲であろう。この点でも《スペイン風セレナータ》の楽譜の表紙は興味深い。1890 年当時 C. Ducci から出版されていたアルベニスのピアノ作品のリストが掲げられているからである。

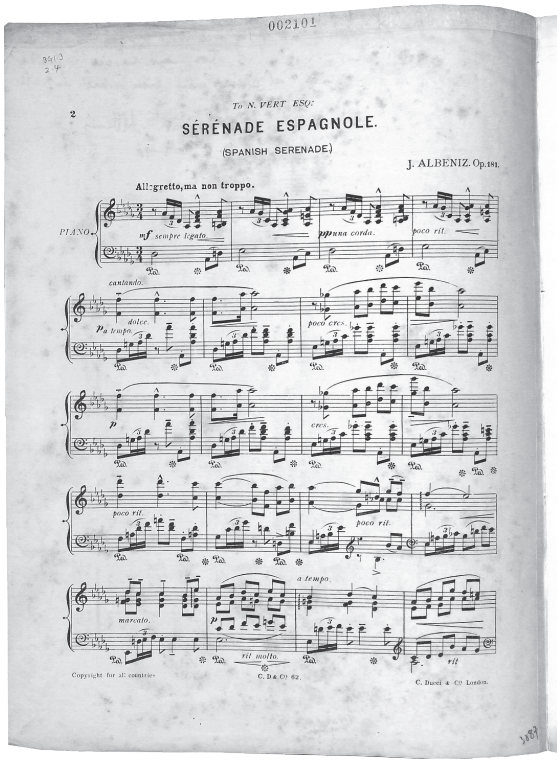
リストに掲載された 32 の曲には、題名とともに番号 [(5)] が付されており、最初が 41 番、最後が 72 番。《スペイン風セレナータ》は 62 番である。リスト中の作品のほとんどはサロン風の小品で、今日演奏される機会は少ない。しかしながら《ワルツ》《マズルカ》《メヌエット》等々の小品に立ちまざって、44 番《グラナダのサンブラ》、

(2)Walter Aaron Clark, *Isaac Albeniz, Portrait of Romantic*, Oxford University Press, 2002, p.76. チェリストの名は記されていない。

(3) 両者はアルベニスが 1889 年にパリで演奏した際にすでに出会っていたとも考えられる。ホルマンは 1887 年以降、パリに居を構えていた。

(4) クラークによれば、アルベニスは 1891 年に、バルセロナのレストランで演奏していた若き日のカザルスの演奏を聴き、推薦状を書いた。この推薦状のお陰で、3 年後、カザルスはブリュッセル王立音楽院に入ることができた。Clark, 前掲書 , p.253.

(5) この番号はアルベニスの作品の作品番号ではない。出版社が付けた便宜上のものであろう。



51 番《朱色の塔》(6)、71 番《スペイン狂詩曲》など、スペイン色豊かな佳品がすでに姿を見せているのは興味深い。後年の《イベリア》への道のりはまだまだ遠いとしても、この時期すでにアルベニスがスペイン的なものの音楽的表現を試み始めていたことが、このリストからうかがわれる。そして、そのような作品のひとつが、この《スペイン風セレナータ》なのである。

《スペイン風セレナータ》と《カディス》

《スペイン風セレナータ》は今日ではもっぱら《カディス *Cadiz*》の名で知られているが、これには以下のような事情がある。アルベニスは 1886 年頃に 8 曲からなる《スペイン組曲》第 1 集を構想したが、一度にこれを全部書き上げるのではなく、全 8 曲のプラン (各曲の題名と副題、曲順) をあらかじめ示したうえで、そのうちの 4 曲を先にばら売りにした。すなわち第 1 曲〈グラナダ (セレナータ)〉、第 2 曲〈セビーリャ (セビリャーナ)〉、第 3 曲〈カタルーニャ (コレンテ)〉、第 8 曲〈キューバ (奇想曲)〉が 1886 年に刊行されたが、残る 4 曲は書かれないままになっていた。1901 年にスペインの楽譜出版社 Casa Dotesio は、残りの 4 曲を、すでに出版されていたアルベニスの別のピアノ曲で補ったうえで、《スペイン組曲》第 1 集を一冊の曲集として刊行することにした。第 4 曲〈カディス (サエータ)〉は《スペイン風セレナータ》作品 181、第 5 曲〈アストゥリアス (伝説曲)〉は〈前奏曲〉(《スペインの歌》第 1 曲)、第 6 曲〈アラゴン（幻想曲)〉は〈ホタ･アラゴネーサ〉(《二つのスペイン舞曲》第 1 曲) が、そして第 7 曲〈カスティーリャ (セギディーリャ)〉は〈セギディーリャ〉(《スペインの歌》第 5 曲) で代用されることになった。

この措置にはさまざまな問題があり、たとえば第 5 曲〈アストゥリアス〉として代用された〈前奏曲〉は明らかにアンダルシアの音楽の特徴を備えていて、アストゥリアス地方とは何の関係もない。また、〈カディス〉の副題は「サエータ Saeta」であるが、これはアンダルシアの民衆的な宗教歌を意味する言葉であり、《スペイン風セレナータ》の気だるいメロディにふさわしいかどうか、疑問の余地なしとしない。

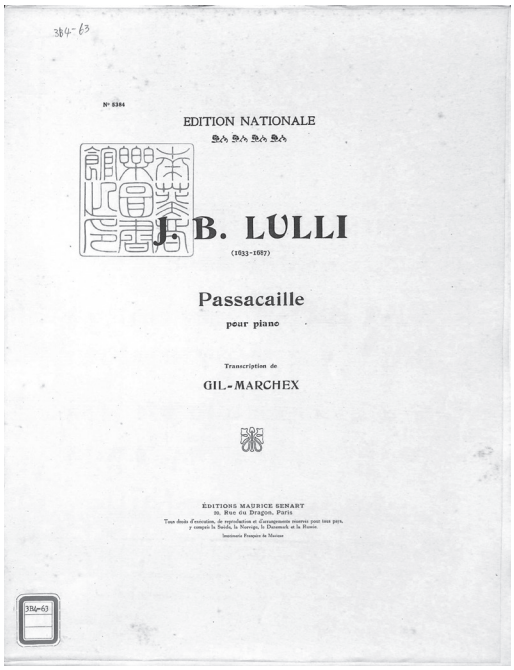
このように代用される作品の選曲に無理があることに加え、代用された曲が先に出版された時点のミスプリント等をそのまま受け継いでいることから、アルベニス自身は《スペイン組曲》第 1 集の刊行に関与していないのではないか、とも考えられている(7)。 (近藤秀樹)

(6) この曲は 1889 年にアルベニスがパリで催したリサイタルのプログラムに含まれており、ピアノによるギター的な効果についてフランスの作曲家たちの目を開かせることとなった。Clark, 前掲書 , p.75.

(7) このあたりの事情については、ヘンレ版の楽譜（Isaac Albeniz, *Suite Espagnole*, Opus 47, G. Henle Verlage, 2005）の前書き（Ullrich Scheideler）に詳しい。なお、この前書きで Scheideler は、当時アルベニスは歌劇の作曲に取り組んでいたため、ピアノ曲には関心が薄かったのではないか、と推測している。当時アルベニスは、マニー = カウツの台本で、歌劇《マーリン *Merlin*》(《アーサー王》3 部作の第 1 部) に取り組んでいた。

ジル＝マルシェックス編曲 リュリ《パサカイユ》

Lulli, Jean-Baptiste Maurice. *Passacaille*, pour piano deux mains par Henri Gil-Marchex. Paris: Maurice Senart, 1922. 4p. 35cm.（収蔵番号 3B4/118）



リュリの《パサカイユ》を、フランスのピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックス Henri Gil-Marchex（1894～1970年）がピアノ独奏用に編曲したもの。スナール室内楽シリーズ 1923 年第 2 期の「ピアノ」編に、Musique ancienne の一環として収録された [1]。

リュリと抒情悲劇《ペルセ》

ジャン＝バティスト・リュリ Jean-Baptiste [de] Lully（1632 ～ 87 年）[2] は、フランス盛期バロック音楽の作曲家で、ルイ 14 世の宮廷楽長にして寵臣。リュリはイタリア出身だが、イタリア様式の歌劇はフランスには適さないと考えて、「叙情悲劇 tragédie lyrique」または「音楽悲劇 tragédie en musique」と呼ばれる新しいタイプの歌劇を始めた。スナール室内楽シリーズに収められた《パサカイユ》は、叙情悲劇《ペルセ》から採られたものである。

リュリは、フィリップ・キノー Philippe Quinault（1635 ～ 88 年）の台本で、オヴィディウスの『変身物語』を原作とする歌劇をいくつも作曲している。《カドモスとエルミオーヌ》(1673 年)、《テセウス》(1675 年)、《ファエトン》(1683 年)。《ペルセ》(1682 年) もそのひとつで、古代ローマ神話に登場するペルセウスが主人公。アンドロメダ、メドゥーサなどが登場する。全 5 幕。

《パサカイユ》は抒情悲劇《ペルセ》の第 5 幕第 8 場で踊られる。ペルセウスとアンドロメダの婚礼を祝福するために、愛の女神ヴェヌスが、キューピッドとヒュメイナイオス (結婚の祝祭の神) を引き連れて登場する場面である。

パサカイユ (パッサカリア) は、フランスではしばしば、組曲の終曲や、抒情悲劇やオペラ・バレエでの締めくくりの曲として用いられた。リュリの叙情悲劇《ペルセ》の〈パサカイユ〉は、後者の好例であろう。

ジル＝マルシェックスについて

アンリ・ジル＝マルシェックスはフランスのピアニスト。ディエメ Louis Diémer（1843 ～ 1919 年)、コルトー Alfred Denis Cortot（1877 ～ 1962 年）に師事。1911 年にパリ音楽院を首席で卒業後、ヨーロッパを中心に活躍した。

ジル＝マルシェックスは薩摩治郎八 (1901 ～ 76 年) の肝煎りで 1925 年に初来日し、10 月～ 11 月にかけて、帝国ホテルで 6 回の連続リサイタルを開催した。これは、3 つのテーマ (主観的音楽、

(1) スナール室内楽シリーズについては、本紀要第 1 号の調査報告「スナール社の挑戦」, p. 49-56、ならびに本紀要の「スナール室内楽シリーズ目録　解題」を参照。

(2) リュリは Lully と綴るのが一般的だが、スナール室内楽シリーズの楽譜では Lulli とされている。後述するジル＝マルシェックスの来日リサイタルのプログラムでも同様である。

追想的音楽、舞踊的音楽) を設け、各テーマについて 2 回のリサイタルを行い、バロック時代の作品から、古典派、ロマン派を経て同時代 (1920 年代) の作品までを、テーマごとに網羅するというユニークなもので、当時の日本の楽壇に大きな影響を与えた [3]。

リュリ《パサカイユ》は、この連続リサイタルの第 5 回、すなわち「舞踏的音楽」をテーマにした 2 回のリサイタルの 1 回目の最初に演奏された。つまりジル＝マルシェックスは、「舞踊的音楽」の流れを追うに際して、その出発点をこの曲に定めたのである。

プログラムには、この曲の題名は以下のように記されている。《ペルセとアンドロメードの結婚式を挙げる為に天使を伴ふて来たヴィナスの為のパサカイユ》。ジル = マルシェックス自身による曲目解説は以下の通り。

> リュリーは生れは伊太利人であつたが、ルイ十四世の寵愛を集めた作曲家で仏蘭西に於ての歌劇の創始者であつた。
>
> 彼は舞踊に對し非常な興味を有し舞台上で女を踊らすと云ふ試みを最初に遂げた人である。
>
> このパサカイユは帝王や王姫、貴族等が参集し、ギリシャの英雄達に假装した貴公子等の為めに造られた靜厳な舞踊、宮廷特有の舞踊の一片である。

曲目解説では、叙情悲劇の筋書きや、そのなかでの《パサカイユ》の位置づけには触れられていない。リサイタルのテーマに即して、この曲の「舞踊的音楽」としての側面に力点を置いたのであろう。

リサイタルでは、この曲のあとにパーセル、ラモー、リスト、シャブリエ、バルトーク、ドビュッシーの「舞踏的音楽」が続き、最後はサン = サーンス《ワルツ形式のエチュード》で締めくくられた。

なお、「舞踊的音楽」第 2 回は、やはりジル = マルシェックス編曲のフランシスク《オルフェの宝》で始め、シューマン、ウェーバー、ショパン、ファリャ、アルベニス、ドビュッシー、ミヨー、ストラヴィンスキーと続き、最後はラヴェルの《フォックストロット》という曲目であった [4]。

ジル = マルシェックスの編曲について

ジル = マルシェックス編のリュリ《パサカイユ》を見たときに、まず目に入るのは、次のような演奏上の指示であろうか。

> jouer de manière soutenue avec beaucoup de pédale, en évitant cependant d'embouteuiller des harmonies et d'arpèger inutilement les accords.
> (たくさんペダルを使って響きを保って、ただし、和声を混雑させたり、和音を不必要に分散したりしないように。)

また、随所にクレッシェンド記号が書き込まれており、ピアノでクラヴサン的な効果を出すよりは、ピアノならではの表現を意図しているように思われる。espressivo という発想記号も使われている（第 56 および 77 小節）。オクターヴを重ねて分厚い響きを作っていること、曲の終わりが、モルト・リテヌートとフォルティシシモ、派手なトリルにより、やや物々しいことなどは、ジル＝マルシェックスな

(3) ジル＝マルシェックスの連続リサイタルの詳細については、以下を参照。白石朝子「アンリ・ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流の試み――4 度の来日（1925-1937）における音楽活動と日本音楽研究をもとに」愛知県立芸術大学音楽研究科博士後期課程学位論文 , 平成 25 年度。

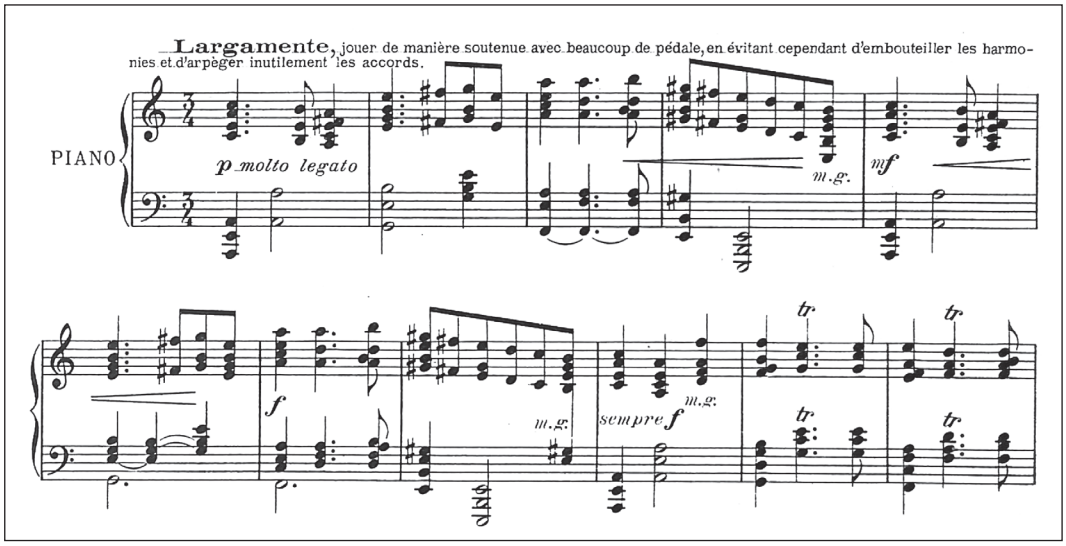
(4) ラヴェル《フォックストロット》については、本紀要第 2 号の資料紹介（p. 74-77）を参照。なお、ジル＝マルシェックスは、1923 年 3 月 23 日にパリのシャンゼリゼ劇場で、やはり舞曲をテーマにしたリサイタルを開催しており、このときのチラシに掲載された作曲家名の大部分は、日本での「舞踊的音楽」のリサイタルのそれと一致する。リュリ《パサカイユ》も演奏された可能性がある。

りに「靜厳な舞踊」を思い描いてのことであろうか。

こうした特徴は、同じスナール室内楽シリーズ中の別の作品と比較すると、より明確になる。たとえば、リュリ《パサカイユ》と同じ 1923 年第 2 期のピアノ曲編には、ニコラ・シェドヴィルの《ラ・ボジョレーズ *La Baujolaise*》が Musique ancienne の 1 つとして入っている。原曲は 18 世紀に流行した " ヴィエルないしミュゼットと通奏低音のための作品 " で、シリーズに入っているのは、これをピアノで演奏できるように編曲したものだが、楽譜にはこのジャンルについての解説が掲載されていて、装飾音の弾き方についての説明もついている (5)。強弱の記号はあるが、クレッシェンド、デクレッシェンド号はなく、もちろんペダル記号もない (6)。

ジル＝マルシェックスがこの編曲を行ってから、そろそろ 100 年が経つ。その間、古楽の研究は長足の進歩を遂げ、ピリオド楽器による演奏は普通のことになった。ジル＝マルシェックス編《パサカイユ》に時代の制約が感じられるとしても不思議はない。

しかしながら現代のピアニストたちは、古楽の研究をふまえつつ、再び現代のピアノで、ピアノの特質を生かして、バロック期の音楽に取り組みつつある。そんな今だからこそ、100 年前にピアノという楽器で、リュリからラヴェルまで西洋音楽 240 年の歩みを辿ってみせたジル＝マルシェックスの業績は、また違った角度から評価することができるのではないだろうか。 (近藤秀樹)



ジル＝マルシェックス編 リュリ《パサカイユ》冒頭部分

(5) 編曲、解説はポール・ブリュノルト Paul Brunold（1875 ～ 1948 年）による。ブリュノルトはクラヴサン奏者で音楽学者。主に鍵盤楽器のための音楽を研究。フランソワ・クープランに関する著作がある。

(6) このように、かなり方向性の違う楽譜が同居しているという事実は、スナール室内楽シリーズの Musique ancienne 部門が一枚岩ではなく、さまざまな傾向を含んでいるということを示している。この問題については、同時代のフランスにおける古楽復興運動との関連と併せて、別稿を期することとしたい。

《日本の歌》特装版の表紙

ワインガルトナー《日本の歌》作品 45

Weingartner, Felix. *Japanische Lieder*, Op. 45. Leipzig and New York: Breitkopf & Härtel, 1908. 特装版 17p. 35cm.（収蔵番号 N-7/43）; 通常版 2vols. (9p., 9p.) 31cm.（収蔵番号 3H2.6/11.18, 3H2.6/11.19）

戦前にベートーヴェン演奏の権威として知られたオーストリアの名指揮者、フェリックス・ワインガルトナー Felix Weingartner（1863 ～ 1942 年）は、指揮活動のみならず作曲・編曲活動も旺盛で、指揮と作曲の両面における成功を強く望んでいたという。《日本の歌》作品45は彼が1908年に作曲した全９曲の歌曲集で、日本の和歌や漢詩のドイツ語訳を歌詩にして、曲ごとに異なる旋法／音階を選んで作曲されている。当時ヨーロッパで一世を風靡していたジャポニズムの音楽作品の一例として興味深い(1)。

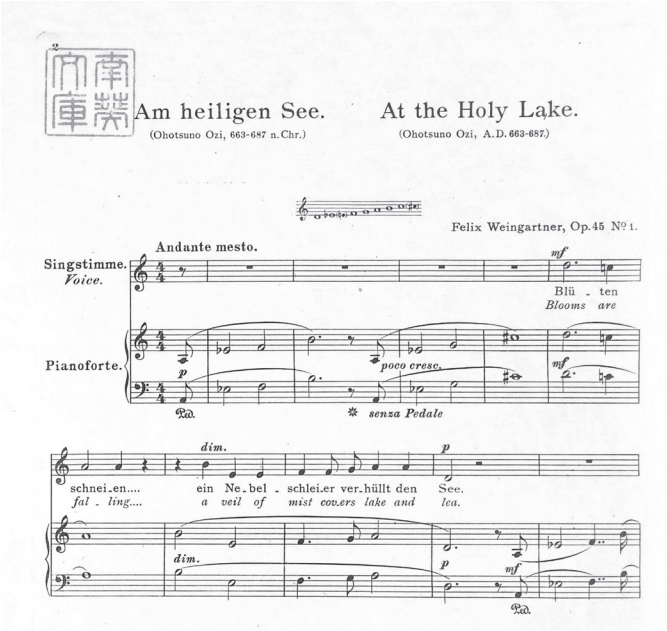
ワインガルトナーは日本の文化に強い関心を持ち、この作品以外にも、歌舞伎『菅原伝授手習鑑』の寺子屋の段にもとづくオペラ《村の学校 *Die Dorfschule*》作品64（1920年）など、日本を題材にした作品をいくつか残している。そのなかで、この《日本の歌》はかなり早い時期の作品に位置付けられ、また彼の日本への関心を端的に示す代表作と見なされてもいたようである。1937（昭和12）年にワインガルトナーが初来日した際の日本の新聞記事のなかには、彼が「古くから日本に對して非常な興味を持ち、日本の和歌にも數多く作曲してゐる」との記述がある(2)。

(1)《日本の歌》は、メゾ･ソプラノ／アルト歌手のティリー･ケーネン Tilly Koenen（1873 ～ 1941 年）に献呈されている。彼女はグスタフ･マーラーの交響曲第８番の初演（1910 年）でソリストを務めるなど、当時トップクラスの歌手の一人であった。また彼女はジャワ島生まれでマレー語の歌をレパートリーに持つユニークな歌手でもあり、そのような東洋との結びつきが、ワインガルトナーが彼女に《日本の歌》を献呈した背景にあったのかもしれない。

(2)「タクトの王者ワインガルトナー氏」『東京朝日新聞』1937（昭和 12）年 5 月 28 日付夕刊 , p. 5.

《日本の歌》の歌詩はポーランド出身の作家・翻訳家のパウル・エンデルリンク Paul Enderling（1880 ～ 1938年）の著作『日本の小説と詩 *Japanische Novellen und Gedichte*』（Leipzig: P. Reclam, [1905]）からとられており、楽譜にはさらにイギリスの作詞家・劇作家のエドワード・オクセンフォード Edward Oxenford（1846または47 ～ 1929年）による英訳も加えられている。エンデルリンクの訳詩は、日本語の意味を伝える忠実な翻訳ではなく、むしろヨーロッパの人々に容易に理解できるように、またドイツ語詩として形式を整えるために、原歌・原詩のイメージを膨らませ、言葉を加えた自由な翻訳（追創作 nachdichtung(3)）である。ワインガルトナーが曲を付けた和歌と漢詩は、凡河内躬恒など平安時代の作を中心に、飛鳥時代（大津皇子ほか）から鎌倉時代（静御前）まで、時代の幅をもって選ばれている。なかには僧正遍昭や和泉式部の歌のように、日本人には百人一首などで親しまれている名歌も見られるが、他方、作者名の誤記も見られる（後掲の歌詩対訳参照）(4)。

《日本の歌》が作曲された1908年は、ワインガルトナーがグスタフ・マーラー（1860 ～ 1911年）の後任でウィーン宮廷歌劇場総監督に就任した年であった。奇しくもマーラーもこの年、東洋趣味の色濃い作品を作曲している。交響曲と連作歌曲の両方の性格を併せ持った全6楽章の大作《大地の歌 *Das Lied von der Erde*》である。《日本の歌》が和歌の自由なドイツ語訳を歌詩にしているのと同様、《大地の歌》も、ハンス・ベートゲ Hans Bethge（1876 ～ 1946年）による漢詩の自由なドイツ語訳を歌詩にしている点で、両者は近しいコンセプトから生まれたと言える(5)。しかし音楽的には、マーラーの《大地の歌》が大オーケストラでの演奏を前提とした厚みのある音響を特徴とし、五音音階を多用することで「東洋らしさ」を表現したのに対し、ワインガルトナーの《日本の歌》のテクスチュアは簡素で、五音音階の使用は見られない。伝統的な教会旋法（第2、8、9曲）やナ抜き音階（第4曲）



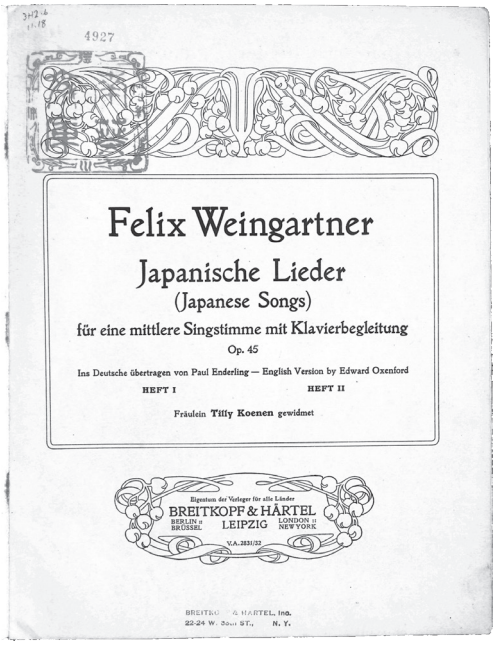
第1曲〈聖なる湖水で〉

(3)「自由訳」「翻案」などとも訳される "nachdichtung" は、後続、反復、追随などを意味する nach と dichtung（詩、文芸）とで構成されているように、dichtung の後から dichtung を真似て作り直された作品と解することができ、詩歌の翻訳においては、原作のもつ情趣など、字義どおりの翻訳では表しきれない要素を別の言語において模倣的に再現しようとした創作物と言える。後述するマーラー《大地の歌》の歌詩がとられたベートゲによる漢詩の自由な訳詩集『中国の笛 *Die chinesische Flöte*』の副題が、「中国抒情詩の追創作 *Nachdichtungen chinesischer Lyrik*」である。

(4) ちなみに、ワインガルトナーの《日本の歌》の4年後に発表されたボフスラフ・マルティヌーの歌曲集《ニッポナリ *Nipponari*》H. 68（1912年）も、同じエンデルリンクの訳詩をチェコ語に重訳したものから歌詩がとられている。ワインガルトナーが曲を付けた大津皇子と静御前の歌（第1、6曲）は、《ニッポナリ》においてもそれぞれ第7曲と第5曲で登場する。

(5) ワインガルトナーも1917年の歌曲集《東方からの花 *Blüten aus dem Osten*》作品63においてベートゲ訳の漢詩に作曲している。

作曲者のサインの入った特装版タイトルページ



通常版タイトルページ

が用いられた曲がある一方で、非伝統的な特殊な音階を設定して、その音程的特徴を強調するように作曲された曲も見られる。

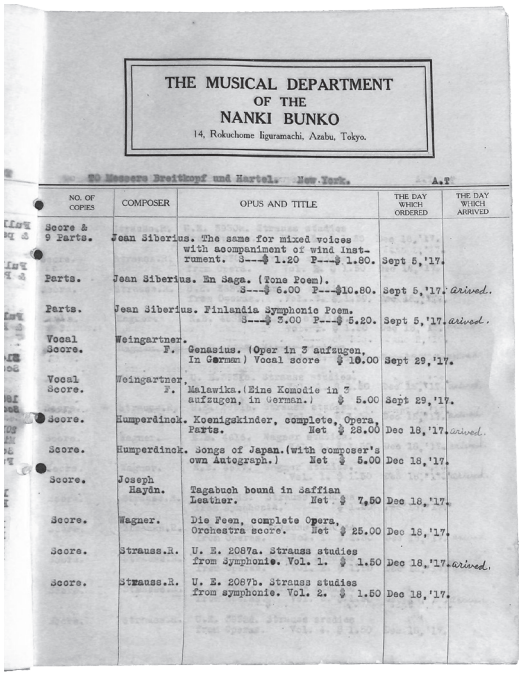
たとえば第１曲〈聖なる湖水で〉は荘重な単旋律を特徴とするが、ピアノによる前奏と間奏においてオクターヴのユニゾンで繰り返される８音のモティーフ a-es-f-h a-es-g-cis は、４対の三全音で構成されており、最後の cis が導音となって、歌唱声部の冒頭の音である主音の d につながる。伝統的に「悪魔の音程」と呼ばれる三全音の不吉な響きは、歌詩である大津皇子の辞世歌の内容を踏まえて選ばれたのであろうが、同時にこのような旋法の使用には、西洋的な長調・短調の枠組みを離れて、新しい音楽語法を開拓しようとする狙いもあったと考えられる。同時代のフランスではドビュッシー等が日本や東洋の風物にインスピレーションを得て、独自の様式を築いていったように、ワインガルトナーにとっても、「日本」とは伝統的な西洋音楽を超克するための好適な題材だったのではないだろうか。

南葵音楽文庫にはこの《日本の歌》の楽譜が２種類所蔵されている。ここでは便宜的に通常版と特装版と呼ぶことにしよう。通常版（収蔵番号 3H2.6/11.18-19）は第１～５曲と第６～９曲の２分冊となっており、特装版（収蔵番号 N-7/43）は通常版と同じプレートが使われているものの、１冊に合本され、和本を模した豪奢な装丁が施されている。特装版のタイトルページには作曲者本人のサインが入っており、エディション・ナンバーもあることから（南葵音楽文庫所蔵本は９番）、小部数の限定版であったようである。

収蔵時期については、南葵文庫音楽部による1917年の楽譜目録第１版にこの曲の楽譜は採録されておらず、1920年の第２版で採録されていることから(6)、1917年から20年までの間と考えられる。南葵音楽文庫の関連資料（読売日本交響楽団蔵）に含まれる南葵文庫音楽部の発注書リストには、ブライトコプフ・ウント・ヘルテルのニューヨーク支社に注文した楽譜のなかに、1917年12月18日の発注日で、フ

(6)*Catalogue of the Nanki Music Library (Musical Scores)*, II, [Nanki Bunko, 1920 (大正 9).8], p. 99.

ンパーディンクの作品として「日本の歌（作曲者自署付き）Songs of Japan. (with composer's own Autograph)」という記載がある。エンゲルベルト・フンパーディンクにそのような題名の作品はなく、リストのすぐ上にはワインガルトナーの別の楽譜が2点記載されていることから、これは《日本の歌》をフンパーディンクの作と誤記した結果と思われる。そうだとすれば、《日本の歌》の楽譜は1917年12月18日にブライトコプフ・ウント・ヘルテルのニューヨーク支社に発注され、遅くとも1920年までの間に、南葵文庫に収蔵されたことになる。



THE MUSICAL DEPARTMENT
OF THE
NANKI BUNKO
14, Rokuchome Iiguramachi, Azabu, Tokyo.

20 Messers Breitkopf und Hartel. New York. A.F.

NO. OF COPIES	COMPOSER	OPUS AND TITLE	THE DAY WHICH ORDERED	THE DAY WHICH ARRIVED
Score & 9 Parts.	Jean Siberius.	The same for mixed voices with accompaniment of wind instrument. S---$ 1.20 P---$ 1.80.	Sept 5,'17.	
Parts.	Jean Siberius.	En Saga. (Tone Poem). S---$ 6.00 P---$10.80.	Sept 5,'17.	arived.
Parts.	Jean Siberius.	Finlandia Symphonic Poem. S---$ 3.00 P---$ 5.20.	Sept 5,'17.	arived.
Vocal Score.	Weingartner. F.	Genesius. (Oper in 3 aufzugen, In German) Vocal score $ 10.00	Sept 29,'17.	
Vocal Score.	Weingartner. F.	Malawika.(Eine Komodie in 3 aufzugen, in German.) $ 5.00	Sept 29,'17.	
Score.	Humperdinck.	Koenigskinder, complete, Opera, Parts. Net $ 28.00	Dec 18,'17.	arived.
Score.	Humperdinck.	Songs of Japan.(with composer's own Autograph.) Net $ 5.00	Dec 18,'17.	
Score.	Joseph Haydn.	Tagebuch bound in Saffian Leather. Net $ 7.50	Dec 18,'17.	
Score.	Wagner.	Die Feen, complete Opera, Orchestra score. Net $ 25.00	Dec 18,'17.	
Score.	Strauss.R.	U. E. 2087a. Strauss studies from Symphonie. Vol. 1. $ 1.50	Dec 18,'17.	arived.
Score.	Strauss.R.	U. E. 2087b. Strauss studies from symphonie. Vol. 2. $ 1.50	Dec 18,'17.	

南葵文庫音楽部の発注書リスト

1937年、ワインガルトナーは朝日新聞と日墺協会の招聘により、初めて日本を訪れた。《日本の歌》の作曲から約30年後である。この招聘を主導したのも徳川頼貞であったことが、彼の著書から窺われる。頼貞はワインガルトナーとレオポルド・ストコフスキーという当時日本でも人気の高かった2人の大指揮者を日本に呼ぶことで、日本の楽壇の発展を促そうとし、結果、ワインガルトナーの招聘のみが実現したのであった(7)。世界屈指の名指揮者の来日は、日本の音楽界に一大センセーションを巻き起こした。ワインガルトナーは5月7日からの約2ヶ月にわたる滞在期間中に、夫人で指揮の弟子でもあったカルメン･シュトゥーダとともに新交響楽団（現･NHK交響楽団）を率いて国内各地で公演し、またウィーンで日本の現代作曲家の作品を紹介する演奏会を発案。「ワインガルトナー賞」を設けて、1937年9月末締切で国際文化振興会(8)と日墺協会が共同で、日本人の作曲家による管弦楽曲の募集にあたった。

離日の際、ワインガルトナーは次の言葉を残している。「日本の藝術家よ！　藝術の概念を哲學書の中に漁る以前に、忘れる［こ］となく周圍とともに自己を眺めよ。そうして近き將來に「日本なるもの」を世界に聽かしめよ！」(9)

ワインガルトナー賞の選考にあたって、彼は西洋の音楽とは異なる「日本なるもの」をとりわけ重視した。その選考方針に対しては後に「エクゾティ［シ］ズムに墮した」といった批判もなされたが(10)、受賞者のなかには、箕作秋吉、大木正夫、早坂文雄、尾高尚忠など、この賞をきっかけに、その後の日本の音楽を牽引する存在へと成長していった作曲家が名を連ねたことも事実である。ワインガルトナーが《日本の歌》において、特殊な旋法／音階の使用というかたちで探究した西洋音楽の伝統の超克は、ワインガルトナー賞を通じて、「日本なるもの」の追究という日本の作曲家たちの課題として受け継がれた。そう言ってよいだろう。　（篠田大基）

(7)『頼貞隨想』徳川頼貞遺稿刊行会編 , 河出書房 , 1956 (昭和 31).6, p. 107.

(8) 国際文化振興会（略称 KBS）は 1934 年に設立された民間の国際文化交流事業実施機関。高松宮宣仁親王を総裁に、会長は歴代内閣総理大臣が務めた（初代会長は近衛文麿）。副会長以下が実務を担当し、徳川頼貞が副会長の職にあった。

(9) ワインガルトナア（ママ）「さよなら日本」『東京朝日新聞』1937（昭和 12）年 7 月 21 日 , p. 9.

(10) 有馬大五郎「日本に来た頃のワインガルトナー」『レコード音楽』vol. 20, no. 2 (1950.2), p. 62-65.

歌詩対訳と原歌・原詩[1]

1. Am heiligen See

Ohotsuno Ozi

Blüten schneien...
　ein Nebelschleier verhüllt den See.
Die Wildgänse[2] schreien
　am heiligen Weiher von Iware.
Dunkler Träume Schar tanzt ihren Reihen;
Mein Herz ist schwer:
Wenn übers Jahr die Wildgänse schreien,
Hör'ich's nicht mehr.

1. 聖なる湖水で

大津皇子

花が舞い落ちる……
　霧が湖水を覆う
磐余の聖なる池に
　雁は鳴く
夢魔の群れは列をなして舞い
我が心は重い
年がめぐり　また雁が鳴くとき
もうそれを聞くことはないのだ

ももづたふ磐余(いはれ)の池に鳴く鴨を今日(けふ)のみ見てや雲隠(くもがく)りなむ
(『万葉集』3-416)

2. Schneeglöckchen

Kwoko Tenno

Ich habe für dich, du Liebste,
Mich hundertmal gebückt
Und lächelnd der Wakana
　schimmernde Blüte gepflückt.[3]
Und ist doch noch kein Frühling!
Kein Grün sonst weit und breit:
Der Wind zog über die Felder,
Und Schnee fiel auf mein Kleid.

2. 待雪草

光孝天皇

いとしいお方　あなたのために
何度も身をかがめ
そして若菜にほほえみながら
　きらめく花を摘み取りました
それにまだ春ではないのですから
見渡しても他に緑はどこにもありません
風は野を吹きわたり
雪が私の衣に降り落ちます

きみがため春の野にいでてわかなつむわが衣手(ころもで)に雪は降りつゝ
(『古今和歌集』春上 21)

(1) 和歌の文字遣いと漢詩の訓み下しは『日本古典文学大系』『新日本古典文学大系』（岩波書店）に従った。
第 4 曲〈わが家へ *Nach Hause*〉の原歌は、電気通信大学教授・島内景二氏よりご指摘いただきました。詩の翻訳にあたっては、日本学術振興会特別研究員・丸山瑶子氏にご助言をいただきました。ここに御礼申し上げます。
(2) エンデルリンクは原歌のイメージを膨らませ、「鴨」を渡り鳥の "Wildgänse"（ハイイロガン）に変えて訳している（ここで渡り鳥が想定されていることは "übers Jahr"（年がめぐり）という表現からも明らかである）。同様に、訳詩の "Blüten"（花）や "Träume"（夢）といった要素も原歌にはない。これらの言葉が加えられた結果、古典文学において「花」といえば桜を想像する日本人の感覚からすると、訳詩は季節感が不自然になっている。
(3)"Wakana"（若菜）は本来、花とかぎらないが、エンデルリンクはヨーロッパで親しまれている早春に咲く花 "Schneeglöckchen"（待雪草）に読み替えて訳している。

3. Mondlicht

Buntoku [sic]

Das Mondschiff segelt am Himmelsmeer
Und streift den Wolkenstrand.
Über das nächtige Nipponland
Gleitet sein Leuchten her.
In meinem Glase flimmert sein Schein,
Der im Kräuseln des Sees sich bricht.
Majestätisch zieht sein Licht
In die Sternenflut hinein.

3. 月の光

文武天皇

月の舟は空の海を進み
雲の渚をかすめる
夜の日本の空の上
舟の灯火は滑りゆく
玻璃の杯にきらめく光は
水面のゆらめきに砕け
厳かにその光は
天の川へと曳かれゆく

月舟移霧渚　楓楫泛霞濱　(月舟霧渚に移り　楓楫霞浜に泛かぶ)
臺上澄流耀　酒中沈去輪　(臺上流耀澄み　酒中去輪沈む)
水下斜陰碎　樹除秋光新　(水下りて斜陰砕け　樹除りて秋光新し)
獨以星間鏡　還浮雲漢津　(獨り星間の鏡を以ちて　還に雲漢の津に浮かぶ)
(『懐風藻』15「詠月」)

4. Nach Hause

Mitsune [sic]

Zäumet die Rosse und steiget auf:
Zu der Heimat führt uns der Lauf!
Zu der Heimat, wo laue und sachte
Winde wehn, wo der Frühling erwachte!

4. わが家へ

よみ人しらず

馬具をつけ　馬に乗る
故郷へ　我らをいざなう道
故郷へ　あたたかな
そよ風の吹く　春の目ざめるところへ

駒並めていざ見にゆかむ古里は雪とのみこそ花はちるらめ
(『古今和歌集』春下 111)

5. Sommerduft

Mitsune

Die Nacht ist dunkel.
Trüb und trüber flimmern die Sterne,
Die so hell einst glühten.
Ein süsser Duft lebt nur und weht herüber:
Der Duft von Pflaumenblüten.(4)

5. 夏の香り

凡河内躬恒

夜は闇
いよいよ鈍く瞬く星影
かつてあれほど明々と光っていたのに
ただ一すじ　甘い香りが漂う
梅の花の香りだ

春の夜の闇はあやなし梅花色こそ見えね香やはかくるる
(『古今和歌集』春上 41)

(4)"Pflaume"（梅、あるいはセイヨウスモモ）はヨーロッパでも日本と同様、春に花を咲かせるが、エンデルリンクが"Sommerduft"（夏の香り）と題を付けた理由は不明。なお凡河内躬恒には同じ趣向の和歌がもう 1 首ある。「月夜にはそれとも見えず梅花香をたづねてぞしるべかりける」(『古今和歌集』春上 40)。

6. Spuren im Schnee

Sidzuka Gozen

Am Berg von Myosino[5], in kahler Höh,
Entdeckt'ich seine Spuren
    im Flimmerschnee.
Beim Sternlicht
    überschritt er den Felsengrat.
Und in Gedanken
    ging ich mit ihm den Pfad.

6. 雪の中の足跡

静御前

御吉野の山の荒涼とした峰で
ちらちら光る雪のなかに
    あの人の足跡を見つけた
星の光をたよりに
    岩の尾根を渡っていったのだ
想いの中で
    私もあの人とともに山道を歩く

吉野山峰の白雪ふみわけて入りにし人の跡ぞ恋しき
(『義経記』)

7. Mädchentanz

Sodzyo Hendzyo

Die Jungfrauen tanzen...
O Himmel[6], hab' Gnade:
Versperre mit Türen
Und Wolken die Pfade,
Die zu dir führen!
Dann stribt ihr Begehren,
Aus irdischer Klause
Nach Hause, nach Hause:
Zum Himmel zu kehren.
Die Jungfrauen tanzen...

7. 娘たちの踊り

僧正遍昭

乙女たちが踊っている……
おお神よ　御慈悲をもって
あなたのもとへお導きになる
道を　天の扉と
雲で　ふさいでください
そしてこの世の仮住まいから
魂の故郷に
天にお召しになろうとする
お望みをお忘れください
乙女たちが踊っている……

天(あま)つかぜ雲の通(かよ)ひ路(ぢ)ふきとぢよをとめの姿しばしとゞめむ
(『古今和歌集』雑上 872)

(5)"Myosino" は「御吉野」(吉野の美称) の意か。この歌の本歌である「みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のをとづれもせぬ」(壬生忠岑。『古今和歌集』冬 327) と混同されたためのかもしれない。
(6) 原歌は遍昭の出家前の作だが、「僧正」を意識してか、エンデルリンクの訳には宗教色が加味されている。

8. Komm einmal noch!

Idzumi Shikibu

Komm einmal noch, Geliebter!
Am Lager steht der Tod.
Der läßt Schnee erbleichen
Meiner Wangen Rot.
Komm einmal noch, Geliebter!
So stirbt sich's gut und mild:
Ein Liebeswort auf den Lippen,
Im Senne dein liebes Bild.

8. もう一度逢いに来て

和泉式部

もう一度逢いに来て　愛する人よ
臥所のかたわらに死神は立ち
私の頬の赤みを消して
雪のように青白くしてしまう
もう一度逢いに来て　愛する人よ
そうすれば安らかに死ねる
愛の言葉を口唇にのせて
愛しい姿を心にとどめて

あらざ覧(らん)この世のほかの思ひ出でにいまひとたびの逢ふこともがな
(『後拾遺和歌集』恋 3-763)

9. Japan

Yakamochi [sic]

Das Land Yamato hat Berge
Und Berge in seinen Reichen.
Aber der schimmernde Kaguyama
Hat nicht seinesgleichen.
Auf seinem Gipfel stand ich und blicket
Nieder ins Land:
Aus grüner Ebne stieg langsam zum Himmel
Rauch und entschwand.
Über die Meerflut, der schlohweiße Flügel
Der Möwe strich...
O Land Yamato, Libelleneiland,(7)
Wie lieb' ich dich! Wie lieb' ich dich!

9. 日本

舒明天皇

大和の地は山また
山の国なれど
輝かしき香具山に
並ぶ山なし
その頂に立ちて
国を見下ろせば
緑野より炊煙
ゆるやかに空へのぼり消え
海の波頭の上にはかもめ
白き翼をはばたかせる
おお　大和の地　秋津島よ
いかに汝を愛せん

大和(やまと)には　群山(むらやま)あれど　とりよろふ　天(あめ)の香具山　登り立ち
国見(くにみ)をすれば　国原(くにはら)は　煙(けぶり)立ち立つ　海原(うなはら)は　かまめ立ち立つ
うまし国そ　あきづしま　大和の国は
(『万葉集』1-2)

(7)"Libelleneiland" は直訳すれば「蜻蛉(とんぼ)の島」。日本の美称である「秋津島」(秋津＝蜻蛉) をそのままドイツ語に訳している。

徳川頼倫と音楽　──残された資料から──

南葵音楽図書館を設立した徳川頼貞の音楽体験と業績はその詳細が今日ようやく明きらかにされつつある。頼貞の音楽事業は父頼倫の南葵文庫を礎として形成されたことはいわば自明の理とされてきたが、一方頼倫と音楽については、彼自身による言説も残されておらず、直接触れられた周囲の証言もほとんどなく語られることは無きにひとしい。しかし疑問は残る。頼貞の初期の音楽教育は彼の教育方針に基づくこと、長じて頼貞を留学させ、音楽学を学ばせたこと、南葵文庫による楽堂と音楽部の設置、また南葵文庫の東京帝大への寄贈の際に音楽資料を残し、南葵音楽図書館設立への道を用意したこと、それらは頼倫の音楽への理解と共感なくしてはあり得ない。そうした視角から頼倫と音楽について改めて考察すると朧気ながら見えてくるものがある。

先ず、頼貞が自らの初期音楽体験を記した文章から始めよう。

頼貞の回想

『薔庭樂話』（1941 年刊）より

「幼年時代の思ひ出」

私の父は、恰度この頃歐米遊歴の旅から歸つて來た。そして當時一般の洋行者のやうに父もまた西洋かぶれの一人となつて歸朝した。それで、家の中は萬事西洋式でなければならなかつたし、娯樂も日本のものは喜ばれなかつた。殊に音樂は、日本のものは遊藝に過ぎないと云つて、一顧も與へられなかつたばかりでなく、全く禁ぜられた。そして父は周圍の者に命じて、私のために軍歌や軍樂のやうなものを聽かせるやうにした。また晩餐の後などに父はよく外國から持つて歸つた蠟管の蓄音器レコードを取りだして、私に西洋の音樂を聽かせてくれた[1]。（p.6）

「初めて聞く管絃樂」

九歳の時であつた。ある初夏の午後、華族會館から歸つて來た父が私を呼んで「近いうちに音樂會があるから伴れて行つて上げよう」と云つた。私は音樂會とはどんなものかまつたく知らなかったが、何か珍らしいものに違ひないと思つた。そしてよく話に聞く夜會といふやうなものを聯想して、綺麗な幻を描いたりした。

いよいよ音樂會の日が來ると私は行水をさせられた。音樂會は夜なのであつた。私は夕暮、両親に伴はれ、馬車に乘つて、音樂會のある華族會館に出掛けた。（略）

私の馬車が門を潜つて玄關に着いたときにはもう電氣が灯つてゐた。建物の中は大變立派であつた。恰度お伽話に出て来る女王様の宮殿のやうに思はれた。私はぴかぴかしてゐる階段を昇つて真中の大きな部屋に這入つた。其處は煌々とシャンデリアが輝いて、人が多勢ゐた。椅子が澤山並んでゐて、その向うには燕尾服を着た樂人が三四十人行儀よく椅子に腰掛けてゐた。暫くすると同じ燕尾服を着た西洋人が這入つて來て、並んでゐる樂人の前に立つて棒を振つた、どんな音樂が奏されたか少しも覺えてゐない。ただ何もかも綺麗であつたといふ印象だけが殘つてゐる[2]。（p.12-13）

頼倫が西洋音楽に関心を抱き、日々の生活に取り入れていたことは明らかである。彼の音楽への関心が「西洋かぶれ」のなせるわざであったとしても、単なる好奇心や社交では収まらないものがあった筈である。彼は二人の息子頼貞と治兄弟のピアノ

(1) 聴いた楽曲はギャルド･レピュブリケーヌ演奏のビゼー《カルメン》抜粋とヴェルディ《トロヴァトーレ》から《アンヴィル・コーラス（鍛冶屋の合唱）》が挙げられている。

(2) 演奏は宮内省雅楽部を中心としたオーケストラで、指揮者は雅楽部教師として着任したばかりのオーストリア人グリエルモ・ドブラヴィッチ。演奏曲目等詳細不詳。

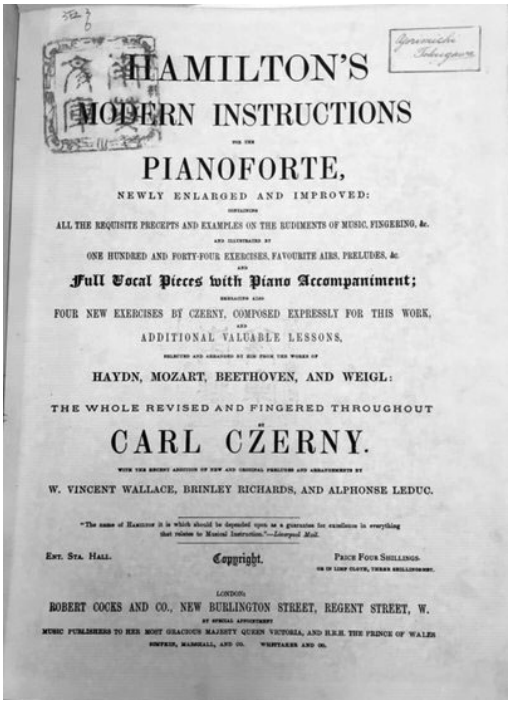
教師にジョン・T・スウィフト[3]の妻ベル Belle Wallace Swift（1870 ～ 1937 年）を選び、本居長世を迎えて和声を学ばせた。

次に頼倫の音楽への積極的な関心を示す楽譜を紹介したい。

頼倫の蔵書

音楽部設置以前に南葵文庫が所蔵してしていた西洋音楽資料は、1914（大正 3）年に刊行された外国版資料目録 *Catalogue of Nanki Bunko* によれば 3 点である。うち 2 点は、1897 年、頼倫が英国での修学を終えて、リヨン駐留のシャルル・ルルーを訪れた際に献呈されたピアノ楽譜 2 冊――《扶桑歌 *Fou-So-Ka*》《日本と中国の歌 第 1 集 *Airs japonais et chinois. 1er Série*》――であり、もう 1 点は、ピアノ教本 *Hamilton's Modern Instructions for Piano-Forte* である。ルルーの楽譜については、本紀要 1 号（2018）で紹介したので、そちらを参照して欲しいのだが（「日本吹奏楽の師・フランス陸軍軍楽隊長ルルーの 2 つの楽譜」）、後者については、上記 *Catalogue* の書誌事項が不正確なこともあって同定が難しかった。最近になって資料本体が姿を現したので確認することができた。詳細は次の通りである。

【ハミルトンの現代ピアノ教本 新訂版】
Hamilton's Modern Instructions for the Pianoforte, newly enlarged and improved: containing all the requisite precepts and examples on the rudiments of music, firngering, and illustrated by one hundred and forty-four exercieses, favorite airs, preludes, and full vocal pieces with piano accompaniment; embracing also four new exercises by Czerny, composed expressly for this work, and additional valuable lessons, selected and arranged by him from the works of Haydn, Mozart, Beethoven, and Weilg: the whole revised and fingered throughout by Carl Czerny. With the recent addition of new and original preludes and arrangements by W.Vincent Wallace, Brinley Richrds, and Alphonse Leduc.
London, Robert Cocks and Co., [n.d]
67p. 35 cm. Pl.no.16483
南葵文庫蔵書印および蔵書票
頼倫蔵書票「Yorimichi ／ Tokugawa」（図右上）
製本　（収蔵番号 3E2.3/6）

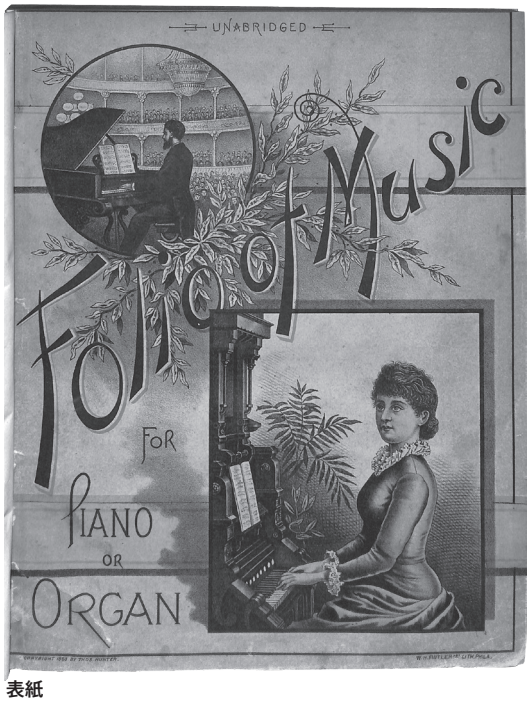

HAMILTON'S
MODERN INSTRUCTIONS
FOR THE
PIANOFORTE,
NEWLY ENLARGED AND IMPROVED:
CONTAINING
ALL THE REQUISITE PRECEPTS AND EXAMPLES ON THE RUDIMENTS OF MUSIC, FINGERING, &c.
AND ILLUSTRATED BY
ONE HUNDRED AND FORTY-FOUR EXERCISES, FAVOURITE AIRS, PRELUDES, &c.
AND
Full Vocal Pieces with Piano Accompaniment;
EMBRACING ALSO
FOUR NEW EXERCISES BY CZERNY, COMPOSED EXPRESSLY FOR THIS WORK,
AND
ADDITIONAL VALUABLE LESSONS,
SELECTED AND ARRANGED BY HIM FROM THE WORKS OF
HAYDN, MOZART, BEETHOVEN, AND WEIGL:
THE WHOLE REVISED AND FINGERED THROUGHOUT
CARL CZERNY.
WITH THE RECENT ADDITION OF NEW AND ORIGINAL PRELUDES AND ARRANGEMENTS BY
W. VINCENT WALLACE, BRINLEY RICHARDS, AND ALPHONSE LEDUC.
"The name of HAMILTON is it is which should be depended upon as a guarantee for excellence in everything that relates to Musical Instruction."—*Liverpool Mail.*
EST. STA. HALL.
Copyright.
PRICE FOUR SHILLINGS.
OR IN LINEN CLOTH, THREE SHILLINGS.
LONDON:
ROBERT COCKS AND CO., NEW BURLINGTON STREET, REGENT STREET, W.
BY SPECIAL APPOINTMENT
MUSIC PUBLISHERS TO HER MOST GRACIOUS MAJESTY QUEEN VICTORIA, AND H.R.H. THE PRINCE OF WALES
SIMPKIN, MARSHALL, AND CO. WHITTAKER AND CO.

タイトルページ

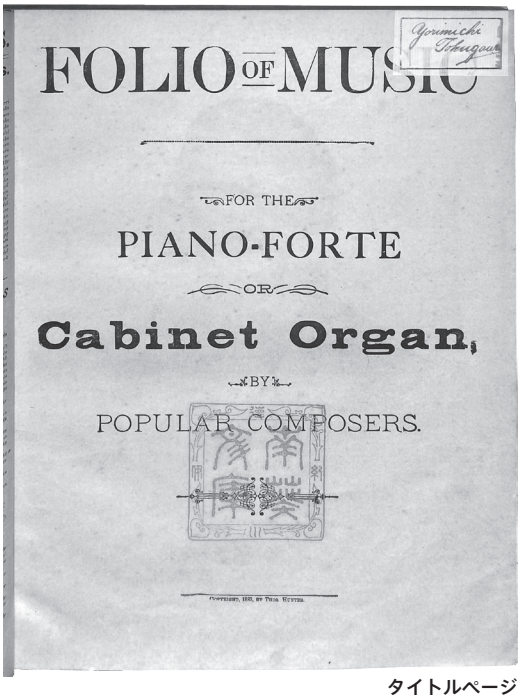
イギリスの音楽評論家で音楽教育に携わったジェイムズ・A・ハミルトン James Alexander Hamilton（1755 ～ 1845 年）編集のピアノ教本。運指法と楽曲 144 曲の選曲はツェルニーによる（ツェルニーがこのために新たに作曲したものも含まれ

(3)John Trumbull Swift（1861 ～ 1928年）。アメリカ人。1888年初来日。東京高等師範、東京帝大、学習院などで英語を教え、YMCAの創立にかかわる。頼貞、治兄弟の英語の家庭教師を務めた。

る)。本書の内容は標題紙の長いタイトルに表現され尽くしているが、冒頭にピアノの構造など楽器解説を含み、進度に応じて添えられた楽曲はハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンから当代の人気作曲家ヨーゼフ・ヴァイグル Joseph Weigl (1766 ～ 1846 年) に及ぶ。書名に「現代」と冠された所以であろう。当該書の刊行年は確定できないが、初版は 1848 年頃。その後アメリカでも出版されて版を重ね、19 世紀中に 50 版を上回る刊行が確認されている。



表紙



タイトルページ

【ピアノまたはオルガンのための名曲集】
Folio of Musc for the Piano-forte or Cabinet Organ by Popular Composers.
[Philadelphia] : Thos. Hunter, c1883
207, [1]p., illus. (ports), 31 cm.
Contains "Biographical sketches of prominent composers and performers"
南葵文庫蔵書印および蔵書票
頼倫蔵書票「Yorimichi ／ Tokugawa」(図「タイトルページ」右上)
製本　(収蔵番号 3E2.2/80)

ヨハン･シュトラウス 2 世「南国の薔薇」、グスタフ・ランゲ「花の歌」、バダジェフスカ「乙女の祈り」、スッペ「悪魔のマーチ」など、19 世紀のポピュラーなピアノ曲を収める。巻頭に作曲家とピアニストの略伝が 16 ページにわたって掲載されている。評判をとった刊行物であったようで、アメリカ各地の出版社から同内容の楽譜が数種刊行されている。

この楽譜は 1914 年の蔵書目録に収載されていない。上記ハミルトンと同様、頼倫の蔵書であったことには変わりはないので除外された理由は判然としないが、頼貞の帰国後、頼貞自身の私的蔵書が文庫の音楽資料として供されており、ほぼ同時期に文庫蔵書に加わったものと推測される。

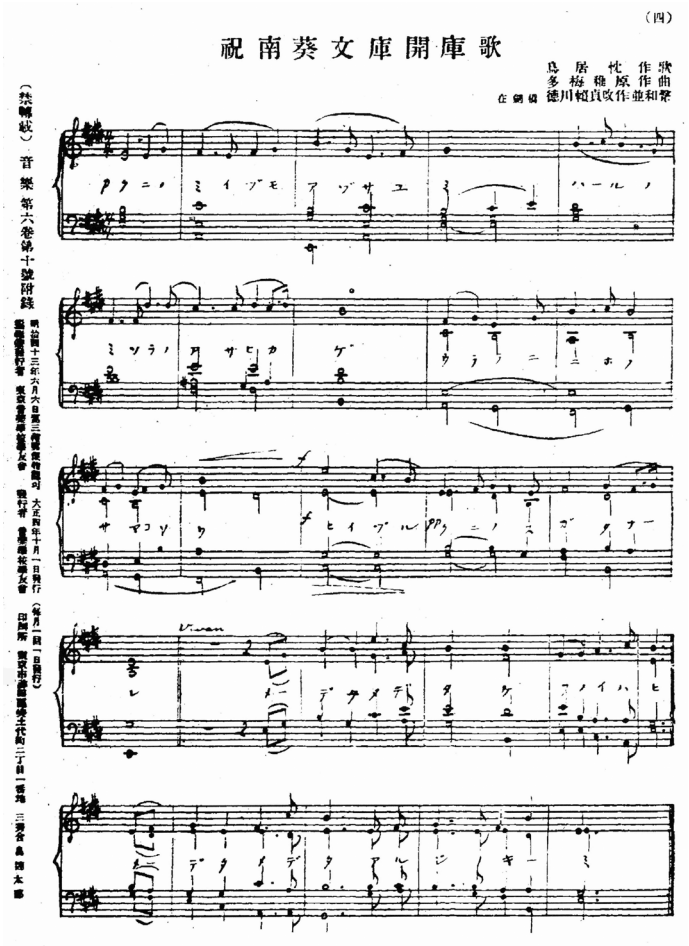
南葵文庫蔵書票
頼倫旧蔵の楽譜 2 冊に貼付。ごく初期に使用されたものと思われる。

祝南葵文庫開庫歌 (1908)

鳥居忱作歌　多梅稚作曲

頼倫は、1908（明治 41）年 10 月、私立図書館「南葵文庫」の公開披露式を催した。一週間にわたる大々的な行事は話題をよび新聞紙面も賑わせた。《祝南葵文庫開庫歌》はその折に、歌詞を鳥居忱、作曲を多梅稚 (4) に委嘱、当日の園遊会で軍楽隊によって発表されたものと思われる。南葵文庫は 1902（明治 35）年に開庫式、この年に公開式を開いていて紛らわしいのだが、作品の発表年代は 1917 年に刊行された *Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Score) I* によった。但し、蔵書中にその楽譜自体は見出せない。

下掲の楽譜は、1914（大正 3）年、頼貞留学中に東京音楽学校学友会誌『音楽』編集部に送られたもので、もともとは旋律のみであったものに、彼が和声付けし、改編した譜である。『音楽』6 巻 10 号附録として刊行された。南葵蔵書には、雑誌本体は所蔵されているが、附録楽譜は散逸したものか、こちらも見出すことはできない。歌詞も曲も典型的な明治期唱歌のスタイルである。タイトルの下に「鳥居忱作歌／多梅稚原作曲／在剣橋 徳川頼貞改作並和聲」とある。



歌詞 (5)

国の　御稜威も　梓弓
春のみ空の　朝日影
麗に匂ふ　さまこそは
日出づる国の　姿なれ
めでた　めでた　今日の祝ひ
めでた　めでた　主の君

これらの資料によって頼倫の音楽志向がどのようなものであったか、その総体を知るには些か不足の感が否めない。しかし、明治期華族徳川頼倫の西洋音楽への関心の一端を知ることはできよう。

（林淑姫）

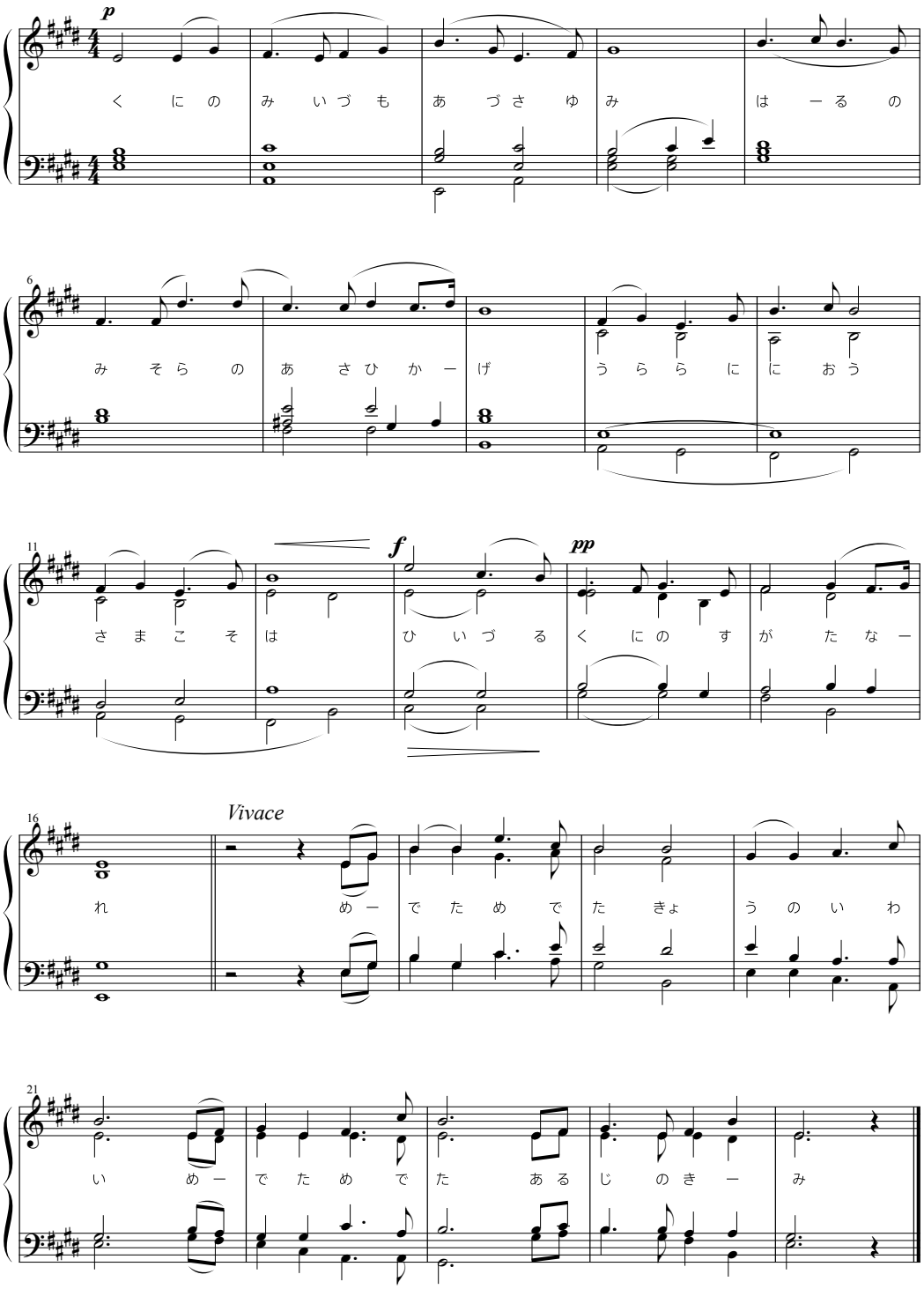
＊次頁に校訂譜を掲載。

(4) 多梅稚（おおの・うめわか　1869-1920）は《鉄道唱歌》（1900）で有名。当代随一の唱歌作曲家。鳥居忱（とりい・まこと 1855-1917）は東京音楽学校教授。唱歌の作詞を多く手掛けた。瀧廉太郎《箱根八里》の歌詞の作者でもある。

(5) 歌詞は別掲歌詞がなく譜面中から採った。当該楽譜は不二出版刊行（2013 年刊）の複製版による。文字がつぶれて判読困難な箇所は、筆者の解読による。解読にあたって日本近代音楽館森本美恵子氏のご協力をいただいた。御礼申し上げます。

祝南葵文庫開庫歌

作詩：鳥居　忱
作曲：多　梅稚
編曲：徳川頼貞

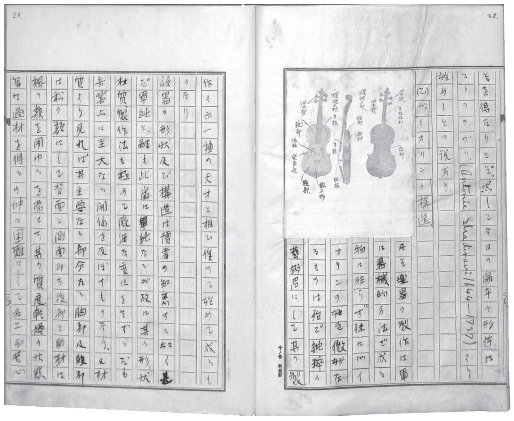


校訂にあたって、カタカナ書きの歌詞をひらがなにし、小節番号を加えました。付点の抜けや休符の省略など、明らかに拍子の揃わない箇所は整えています。また、歌詞に附されていた強弱記号は五線譜のうえに統一しました。第17小節の演奏記号が最後まで判じ辛かったのですが、Vivaceとしました。休符に附されているので、ある意味かなり哲学的ですが、「Allegroより早く」という速度記号の意味もあるようです。　（校訂・浄書　谷卓司 / T&T Design Lab.）

徳川頼貞自筆論稿 3 篇・目録
「樂器の研究」(1910)
「グリーグと其音樂」(1920)
「指揮者ヘンリー・ウッドに關して」(1920)

旧南葵音楽図書館蔵書中に徳川頼貞の論稿 3 篇が残されている。1910（明治 43）年に執筆されたものが 1 篇、ほかの 2 篇は大正 9（1920）年夏に執筆された。いずれも未発表と思われる原稿だが製本され保存されてきた。しかし、1929（昭和 4）年に刊行された南葵音楽図書館の音楽書目録に収録されているものは、最初の「楽器の研究」のみで、その後に書かれた 2 篇は未整理のまま伝えられてきた。

頼貞の著作は『薈庭樂話』をはじめとしてエッセイ類が多く、論稿を見かけることは少ない。徳川頼貞の研究的な側面を示すものとして、この機会に紹介しておきたい。

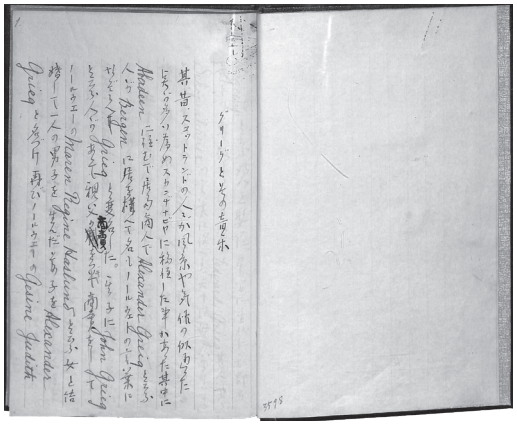


(pp. 29-30)

「樂器の研究」
徳川頼貞自筆原稿
400 字詰原稿用紙（美濃屋製、松屋製）61 枚（[6], 117 p.）　図 2（貼付）　製本 26.5 × 17.8㎝
ペン書
書名「樂器の研究／（明治四十二年十月稿）／薈庭しるす」（p.[1]）
製本背表紙の書名「樂器研究論」
末尾の日付「明治四十三年二月」
書入れ（朱筆傍線）
南葵文庫蔵書印
「Gazenbocho ／ Tokugawa」印（見返し）
内容　概論　總論（1. 樂器の種類 2. 絃樂器と管樂器の関係 3. 東西絃樂器の比較 4. 樂器の来歴）各樂器の研究に就て―ヴァイオリンの研究（1. ヴァイオリン 2. ビオラ 3. ビオロンセロ 4. ダブルベース 5. 結論）― リュート系の研究（總論　2. ハープ 3. ギター及びマンドリン）―木製管樂器の研究（總論　1. フリュウト 2. オーボー 3. クラリオ子ット）― 金製管樂器の研究（總論　1. トロムペット 2. ホルン 3. コル子ット 4. トロンボーン 5. バステゥバ 6. バリトン、アルト及ビベース 結論）― 打樂器の研究（總論　1. 太皷　2. シンバル 3. トライアングル）― 洋琴樂の研究（總論　1. 洋琴　2. クラヰゴォド　3. ハァピスゴォド　4. 洋琴と両樂器との比較　5. 洋琴の価値　結論）― 風琴樂の研究（總論　1. 手風琴　2. 風琴）本編結論

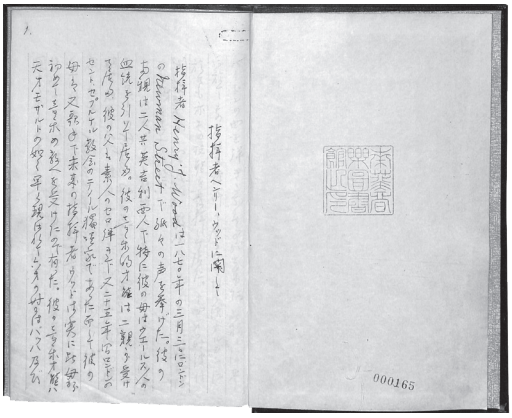
【解説】
頼貞 17 歳、学習院中等学科在学中に執筆された。執筆の経緯は不明である。中等学科の課題でもあったろうか。この頃から雅号「薈庭」を用い始めたものとみえる。時代性を反映しつつも調査の行き届いた論稿で、論文としての体裁も内容も整っており（「参考文献」の記述はないが）、南葵文庫音楽部時代からその蔵書目録に収録されているところをみると、本人にとっても自信作であったと思われる。1909 年 10 月より書き始め、翌年 2 月脱稿。机に向かう若き日の頼貞を彷彿とさせる。

（請求記号　763 ／ガツ／南葵）



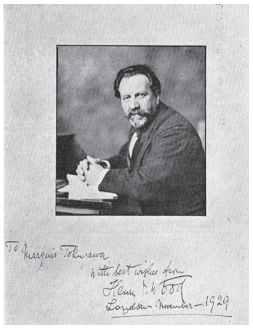
「グリーグと其音樂」
徳川頼貞自筆原稿
罫線入縦書用箋（21.0×13.0㎝）80枚（79 p.）　製本　29.5 × 14.4㎝
ペン書き
題簽「グリーグと其音樂」（自筆）
日付「一九二〇年八月十九日　軽井沢ニテ［稿］す」（末尾）
南葵音楽図書館蔵書印
シール「14y」（裏表紙見返しに貼付）

【解説】
1920（大正 9）年 8 月、軽井沢の別荘にて執筆。この年は 1 月にカミングス・コレクション、7 月にアボット＆スミス社からパイプオルガンが到着し、頼貞にとって年来の計画が次々に実現した年である。11 月 21、22 日に予定されていたパイプオルガン披露音楽会で、グリーグ《ヴァイオリン・ソナタ第 2 番》が演奏されることもあって執筆されたものであろうか。原稿末尾の註に「大体フィンク著『グリーグ及其音楽』に依る」とある通り、文庫蔵書中の Henry T. Finck. *Grieg and His Music*（New York, J. Lane, c1909.　請求記号 762.3/GR）にアンダーラインの書入れが多数見られる。本稿は、わが国最初のグリーグ研究書、小泉洽『グリーグとその音樂』（白眉出版、1925 年 6 月）に先立って執筆された。なお、同書については南葵蔵書中に著者小泉洽からの献本がある（762.3/ グリ）。
（請求記号 762.389/ グリ）



「指揮者ヘンリー・ウッドに關して」
徳川頼貞自筆原稿
罫線入縦書用箋（21.0×13.0㎝）45枚（45 p.）　製本　29.5 × 14.4㎝
ペン書き
題簽「ヘンリー／ウッドに／關して」（自筆）
日付「一九二〇年九月十七日　芝三光町にて」（末尾）
南葵音楽図書館蔵書印
シール「161y」（裏表紙見返しに貼付）

【解説】
「グリーグと其音楽」の 1 か月後に東京の自宅で執筆。BBC プロムナード・コンサートの創始者でも知られる英国の名指揮者ヘンリー・ウッドの紹介原稿。頼貞は留学中にしばしば彼の演奏会を聴きに出かけている。1921 年春、再びロンドンに赴いた折には自宅を訪れ、オルガンのピッチや楽堂に備えつけるべき楽器の相談などをして親しく交遊した。執筆の際に参考とした文献は、J. Lane 社 “Living Masters of Music” の第 1 巻 *Henry J. Wood*（c1904）と推測される。（762.8/LI/1）
（請求記号 762.33/ ウツ）



ポートレートは 1929 年にウッドより頼貞に贈られたもの。
（林淑姫）

関連歴史資料

「冬の瑞西」──徳川頼貞のスイス紀行──

冬の瑞西

在英劔橋　徳川頼貞

大正三年一月二日晴　倫敦出發

かねがね瑞西の冬を見たいと思つて居た矢先に丁度瑞西に小巴里とまで稱せられて居る、ロザンヌに居る友人から、此冬是非來て呉れと云ふ招きを受けたのを幸に、上田［貞次郎］教授と二人同道して、行くことにした。正月の二日と云へば、日本ではやれ屠蘇だの、雑煮だのと云つて盛んに浮かれ居る頃だのに、流石に英國は、生存競走（ママ）の烈しいビジネス國だけあつて、何處に新玉（あらたま）の年の始が來たのか、さつぱり分らず市中は平常と少しも變らない。其中をタクシーを飛して、ヴヰクトリヤ停車場に着いたのが丁度一時四十分、汽車の發車時刻までには、未だ二十分餘りあるを幸に、人混みの中をぶらぶら歩いて、景氣を見て居ると、上田教授が重さうに、スートケースを持つて入口の方から來られた。そこで二人して荷物の始末をして居ると、處もあらうに彼方から、此混雑の中を二三歩しては止り、止つては又歩きだし、左右を珍しさうに見て居る、二人の支那人が居る。流石は支那人だけあつて、所謂「悠揚不迫」だわいと、思つてそれを見ると、之はしたり、此二人は日本人であつた。而も橘井［清五郎］、山東［誠三郎］、両氏であつたのには、聊か驚かざるを得なかった。──人間と云ふものは気儘なもので、自分の様子は棚に挙げて、人のことばかり云つて居る、── 発車の時も近づいたので、吾々はプラットホームへ這入ると意外にも佛蘭西から米國に行かれる途中、二三週間ロンドンに來られた慶應の田中一貞君の御多忙の處を、態々見送りに來られたのに會した。それを幸に田中さんに色々瑞西のことや、佛蘭西のことの御話しを伺つて、時間のたつのも知らなかつた。車掌に注意されて、列車に乗るや否や進行を始めた。汽笛一聲早や吾が汽車は離れたりと、云ひたいが實はすつともちんとも云はずだんまりで、發車の時刻だに來れば出るのだから、實にあつけない。天気は上吉、春の日が麗らかに窓から入つて心地のよいこと、それに始めて大陸の地を踏むのであるし、又行く先が自分の常に行つて見たいと思つてた美くしい湖水、萬年の雪に覆はれて居るアルプスの山々のある所、自分が嘗て夢見て居た所、彼の絶勝奇観を心行くばかり、賞する事が出來るかと思ふと、心は早やスヰツルに有る。汽車がフォークストン "Folk[e]stone" に着いたのは、三時少し廻つた頃であつた。此處で愈々汽車を捨てゝ自分達の恐れをいだいて居る、渡船の段となつた。海上も穏かで案じるより生むが易く、自分達が（ママ）ブローニユ Boulogne に餘定より十五分程早く著いた程であつた。先づ無事であつたことを御互に祝しあつて居ると、ポーターが來た。勿論我々は英語も不束な處へ佛語と來ては、チンプンカン、ポーター先生盛んにパッパパッパ云つて、丸で齒の抜けた人見たいな事を云つて居るが、二人とも分らない。仍て一案を考へ、ポッケット辭書を攫みだして一生懸命首引き、辛うじて先づその場を斬りぬけて、列車に乗り得たのは、幸であつたが此度は車掌らしい男が入つて來て、又仏蘭西語でスッパスッパぬかす。未だ巴里にも行かないで、すつかり佛語に閉口する始末、散々聞返した後で、「レ、ビーヱー、ムシュー、シル、ブ、プレー」"Les billets, Monsieur, s'il vous plait" と聞いたが、さてビーヱーとは何んのことやら少しく解らないが、多分英語のビル（支拂）のことに違ひないと云ふことを考へだしたが、自分は今まで、そんな支拂ひなどしたことはないがと思つて、其男の顔を見て居ると先生堪へ切れなくなつたと見えてぷりぷりしながら「エッチケットプリース」"Eh Tickets please" と立派な英語で云つたので、始めて解つた

が、其様なことなら始めから英語で云つて呉れゝば、此様に汗をかゝずに済んだものを……。此様なことをやつて居る内に、汽車は何時の間にか動き出したと見えて、自分達が漸く、我に返つた時には、全速力で巴里に向つて、暗中を南へ南へと走つて居た、花の都、巴里のガールドノール "Gare de[du] Nord" に著いた時は午後十時であつた。此處の乘換へも無事に済んで、十時五十分汽車は花の巴里を後にロザンヌを指して再び走りだした。雨が降り出したと見えて窓硝子に雨の當る音を聞きながら夢路を辿つた。

一月三日　晴　　ロザンヌ著

目を覺して見たら、夜來の雨は何時の間にか雪に變じたと見えて、見渡す限り野も山も、眞白になつて居る中を、汽車は眞一文字に走つて居た。暫らくして停車したので、プラットホームへ降りて見ると、雪は五六寸以上積つて歩行が困難な程になつて居た、其上に北風が加つて、寒氣が皮膚を刺すことが甚だしい、車掌に停車場の名を聞くと「セットン、バロルブ」"C'est un Valorb" と云ふ。大變長い名だと思つて上田教授に尋ねて見ると、何に it is Valorb と云ふことであつた。バロルブは佛國と瑞西とのフロンチヱールである。カストムハウス税關の檢査も先づ無事に濟んで、三十分の後には我々は瑞西の地に入って居た。嗚呼瑞西瑞西昨夜まで夢に許り見て居た、懐かしい土地が今は自分の目の前にあると思ふと、車窓を掠めて去る、彼方の森、北方の小川も、何となく可懐(なつか)しい様な氣がして宛(さなが)ら故郷へ歸つた時の氣分になつた。

ロザンヌロザンヌと呼ぶ駅夫の聲に驚いて四邊を見ると、列車は既に大停車場に著いて居た。時に午前九時三十二分、急いでプラットホームへ降ると、其處には早朝から友人、MM 君が迎ひに來て呉れて居た。MM 氏は佛國の貴族で、父君は外交官をして長い間、英國に居られたが、數年前病を得て歿せられたので、其後は母君と一人の弟と共に世界漫遊を企て、一昨年日本にも來られて、一ケ年程滞在せられた時に、知り合つた人である。彼等が日本を去つて一年有餘にして、再び會するなんと云ふことは意外であつた。堅い握手を交換して連れ立って停車場を出ると其處は廣い廣いコートヤードになつて居て、右方にタクシーが日本の人力車の様に列を爲して居るし、左方にはホテルの番頭が並んで居るなんどは、江の島鎌倉の宿引きを思ひ出させる。我々は自働車で程遠からぬホテル、メンセデーと云ふ旅館に落着いた。ホテル(ママ)と云ふ上、實はパンションで山の手とても云ふ様な閑静な所に建られて友の家のすぐ隣りであつた。自分の室と定められた房は二階で眼の前には青々とした嶼(しま)に湖（一名セネバ湖）を隔てゝアルプスの山々が手に取る様に見える。此景色此景色僕が嘗て夢に見(ママ)、本でみて、見たいと思つたのも、今は畫中にあるのだと思ふと、何んだか叉夢の様な氣もする。午食を知らせる（銅鑼）が鳴り渡つたので、食堂に行つて見ると、居る居る彼の隅に一群此の角に一塊と云つた風に、男女約二十名程ペチャペチャ雀か鴉でも啼いて居る様で、いやはや御話しにならない。導びいて呉れた席に著いてから、猶好くあたりを見渡すと、食堂は意外に小さいが、湖水に面して居るので、景色はすばらしいものであつた。自分達のテーブルの眞向ひには一人の老人と隻眼の中年の夫人とが居る。時々「イエース」「ノー」と云ふ返事が聞えるので、之れは英人か米人だと云ふことが分つた。我々と背中合せに、二人の若い令嬢が居た。其人達の衣服は所謂巴里最新とでも云ふのか宛ら獨樂に手足を着けた様な、美くしいと申し上げるより、

ローザンヌ駅前広場（1910 年代）

奇妙な風と云ふ言葉を差上げたい程な御様子で、而して豚の様に「ギイギイ」云ふ處から見ると、佛蘭西の御方であらう。我々の斜にはしなびきつた老婆が唯獨り居たが其先生柄に似ず食ふこと食ふこと大日本帝國の一青年の三倍以上も食ふに到つては沙汰の限りであつた。

午後二時に友人が再び來た、而して一緒に市中を見物しやうと云ふので、連れだつて出た。ホテルの前には丁度日本の外濠線のをもつと小さくした様な電車が通つて居る。之に乘つて先づ第一に訪ねたのはロザンヌ市の中央に巍然として立つて居る教會堂であつた。此建物は實に同市の美観を添へて居るものゝ一つである。それから次ぎ次ぎと市中を見物してホテルに歸ったのは夜の八時過ぎであつた。

一月四日　曇

曇りとして今にも雪が降出しさうな、天氣であつたが室内はスチームで温められて居たので、別に寒氣を感じなかつた。大陸的な朝食を濟せて友の來るのを待つて居たが午前中は見えなかつたから、午食後上田教授と二人でロザンヌ市から遠くない、サン、カトリンヌと云ふスケート場に行つて見様と云ふことになつて、ホテルの番頭に道を教つて、勇氣を振つてホテルを出た。先づ電車に乘つて市の片側にあるプラスドトンネル "Place de Tunnel" と云ふ、先づ浅草の様な處へ行つた。皆さんも御存知の通り、佛國は英國などと違つてクリスマスより正月が賑はしい時であるので、隨つて佛國に近い此瑞西の部分なども、地方から百姓が出て來る時だそふで、此日も此處は身動きも出來ない程な人出、奥山式の小屋が此方彼方に在つて、人を呼んで居るあたりいつもながら東西少しも變らない。我々は電車を乘り變へて此處を去つた。電車は市の裡山を迂ねり迂ねり登つて行くので登るにつれ處々に雪を見出したが、三十分も行つた頃には見渡す限り一面の銀世界となつた。目指すサン、カトリンヌに著したのは、其れから四十分の後であつた。此處はロザンヌ市より千五百尺程高い山と山の谷間の平地であつて、スケート場は、一寸と目黒の競馬場式の建物で、其一角から美しいワルツやマズルカの音樂が静かな空氣を伝へて人々の心を唆いて居た。見て居ると老若男女愉快さうに、手に手を取つて音樂に合せて、スースー雪の上を滑つて居る。自分達もつい出來ない癖にやつて見たくなり、借船の様に靴にはめる、スケート器を借す處で、各一對づゝ借りて、偖て遣つて見ると梃でも行かぬに、大きな形體をしながらドーンと臀餅を搗く。見物人が、山の様になつて來る程な勢ひ、之では駄目と絶念めて、すぐ電車に打乘つて、ホテルに歸つたのは夜の七時、丁度夕食の鐘が廣くない家中に轟き渡つて居た頃であつた。

一月五日　曇

瑞西に來てから、特に自分の氣になったのは、佛語でしなければならぬ會話であつた。英語なら未だ未だ少しは素養 ——、それとてもたかの知れたものではあるが、—— 佛語に慣れて置き度いと云ふ氣が頻りにする。併し元來日本語でさへも、餘り流暢には舌の廻らない自分は、況して慣れない英語や佛語は、一層不自由を感じる。日本で長い間、—— 十年に近く、—— 教へられる英語ですら、對手が調子に乘つて喋舌られると、最う自分は、氣ばかり焦せって來て、愈々吃りだす、而して自分の云ひ度いと思ふことが、半分も表情することが出來ないと云ふ齒痒さから、腹許り無暗に立つて來て、兎角怒鳴り付けたい乱暴な口調になる、それで對手に不快を與へる。己も不愉快である上に、自分が已を得ず、自國の日本語を遣はずに、對手の國語で喋舌つて居るにも拘らず、向ふは當然話すべきものと云ふ様な顔をして、平氣で居るのを見るのも不快であつた。此様な譯で上田教授と相談の結果、僅に一週間許りの滞在ではあるが、今日から毎朝二時間づゝロザンヌ市にあるベーリツ、スクールと云ふ外國語学校に通学して、佛語を學ぶことにした。そこで朝食が濟むと、そろそろ上田先生と

其學校へ出掛けて、十一時半に第一日の佛語の學習を終つて、友から聞いた音樂會へ行つた。音樂會は、ロザンヌ市に一つしかない、劇場で行はれた。其名をロザンヌ座と云つて、外から見ると石造で、中々立派であるが、いや中に這入ると丸でパノラマの様な一寸と押せば倒れさうだ。日本では有樂座は駄目だ駄目だと云ふが、此芝居と較ぶれば、どれだけましか分らない程である。音樂はベトーヴエンのエロイカ、シンフオニーを始めとして重(おも)にローマンチックのものが選ばれてあつた。十二時半に終つたので、そこそこにホテルに歸つて午食を取つた。丁度食事が終つた時に友が來て、實は今日晴天であつたらロザンヌ市の近傍の土地を、御案内致さうと思つたが、此様な天氣では何時雪が降りだすか、分らないから、其計画は叉として、君の乃父は日本に立派な圖書館を御持ちだから、―― 先年日本に來た時に數度訪れたので知つて居るのだ ―― 此小さいロザンヌ市の圖書館事業を御覧になるのも叉面白からふから、之から御案内をすると云ふので、賛成の意を表して、ホテルを出た。先づ第一に行ったのは、此町の自由圖書館であつた。實は圖書館と云ふより大計畫の貸本屋である。此處で自分は、所謂貸本屋と圖書館との差異が分らなくなつてしまつた。南葵文庫の方々などに御尋ねすれば一言の下に大差ありと、仰せらるゝかも知れないが結果の方から考へれば、同一の様なことになる、なんどと考へながら、此處を出で、次は市立圖書館に行つたが、不幸にして月曜日は公開しないとかで、内部を見ることが出來なかったのは殘念であつた。併し外部は好く見ることが出來た。此圖書館は博物館とともにロザンヌ大學の附属になつて居て、建て方は建築學に暗い自分には好く分らないが、所謂ルネッサンス式とヌーボー式とか云ふ形式を混ぜた様な建物で、全部石造の何處かに美くしいなと云ふ、感情を東洋人の我々にすら與へる處は、日本の多くの圖書館の非藝術的なのに比較して、喜しい感じがした。自分の友は母が是非御目に掛りたいから、茶時に來て呉れと云ふことだが、未だその時刻（五時）までに一時間の餘もあるが、見物と申しても既に大部分見終つた事だから、如何しやうと云ふので、丁度此圖書館まで來る間にちらと見た活動寫眞館に行くことにした。之は自分が十か十一の頃読んだ佛國の少年小説家で一寸と名高くなつて居るヴヰクトール［エクトール］マロー氏の「サンファミーユ」家なき児を脚本にして之を演じて居たからであつた。

見終はって寫眞館を出た時は、四時半であつたから、丁度之から行くと茶時になると云ふので、友の家を指して出掛けた。途中自分は土産物を取りにホテルへ歸つて、友と上田教授は一足先に行くことになつた。偖て自分丈けホテルに歸つて土産物を揃へて、いざ出掛やうとした時に、急に自分が常に使用して居る寫眞器を、例の活動寫眞館に置き忘れたことに氣がついたので、帳場へ駈け着けた。元來この家の主人は勿論佛人であるが佛語の外に獨語と可なりの英語とを話すが、女將ときたら自國語の外には、獨語を少しゝか話せないのである。自分はてつきり主が居るものと思つて、行った處が、主人は不在で、例のビール腹の女將が、帳場の全部を占めて居た。之は面倒だと思つたが、儘よと思つて出來ないなりにも、今朝外國語學校で習つたことをすぐ様應用して、「ジエーペルヂユー、モン、カメラ」J'ai perdu mon Camera—I have lost my Camera—とやつた所が先生自分の云ふことが分つたので、自分ながら驚いて了つた。そこで何處ですかと云はれてみると、さて込み入って來て中々説明が出來ない。先方では半分獨逸語を用ひだしたが、ますます分らなくなる許り、上田教授が居られゝば、獨語なら分るものを今更呼びに行くのも大變だしと思つて居ると、女將さん氣をきかしたつもりだろう、番頭を連れて來た。這奴も佛語と獨語しか出來ず、少しも用事が果取らない、其内に下女が四五人も來て、處々を尋ねて呉れる丈け益々お怖(じ)けて云へなくなる様な次第の處へ運好く主人が戻つたので、地獄に佛で

先づ用事を濟ませ、急いで友の家に出掛けて見る。友と上田教授とは餘りに自分の遲いのに心配して途中まで迎ひに來て呉れた處であつた。友の家は町離れの見晴しの好い小山の上に建てられて、小綺麗なちいさい家であつた。自分達は誘らるゝ儘に、其の客間に入つた。それは客間でもあり、叉應接室でもあるらしく見えた。竪型ピヤノが一隅に据ゑてあつて、（自分の友は此ピヤノで此頃少し歌を習ひだしたと云つて居た）其上に名の知らない、花を活けた丸い銀の花瓶や、日本で送つた自分の寫眞などが置いてあつた。自分は猶ほ室の四面の壁に懸けてある、日本から持ち歸つたらしい、浮世絵を見廻した。而して湖水に面した窓の下に折から夕日を浴びて居る、ソーファーに腰を下した。二人は少時らく無言の儘、ぢっと座つて居ると、其處へサツサツと音をさせながら、特に我々の爲めに日本服而も紋附に着變へた友の母 M 夫人と友とが入つて來た。M 夫人は微笑んで我々と握手をしながら、本当に夢の様で御座いますね、まだ僅か一年そこらで、御目に掛れるとは、と云ふのを始めに日本滞在の時の話などそれからそれからと出て、自分が此家を辞し去つた時は三日月が雲間を縫つて居た。（未完）

【解題】

徳川頼貞「冬の瑞西」は、『南葵育英會會報』第 7 号（大正 3 年 6 月）に掲載された。大正 3（1914）年 1 月 2 日から 5 日について日記風にしるされた紀行文である。

頼貞は留学 2 年目の 1 月 2 日から 11 日にかけて、ローザンヌに滞在していたフランス人の友人一家に招かれ、憧れの地スイスに赴いた。上田貞次郎が同行しており、彼の記録も参考にしながら記すと [1]、往路の旅程は 1 月 2 日午後 2 時にロンドンを発ち、フォークストーン港からドーバー海峡を渡り、ブローニュ・シュル・メール Boulogne sur Mer を経て同日夜 10 時にパリ北駅に到着。そのままローザンヌ行きの夜行列車に乗り換えて、3 日朝 11 時前にローザンヌに着いた。友が手配してくれたペンション風のホテル「メルセデー」“Hotel Merecedes”（ママ）（上田日記）に宿をとり、市内をはじめ近郊のモントルーやアヴァンを観光した。言葉の通じない土地での不自由な体験は、ごく短期間ながら語学学校でフランス語の勉強もさせたようである。映画館での忘れ物の顛末、初体験のスケート場でのエピソードや公共図書館と貸本屋のどこが違う？など率直な感想が述べられる。「南葵育英会」の身近な人々に書き送った原稿ということもあり、軽口で生き生きとした文章で綴られている。文末に「（未完）」とあるが続稿は見出せない。この旅行から戻ったあと、頼貞は 1 月 16 日にロンドンからケンブリッジに移り、大学での学業が開始される。

ローザンヌ（絵はがき）

憧れのスイス旅行は印象深いものであったようで、遺稿集『頼貞隨想』所収の「冬のスイス」（執筆年代不詳）でも語られている [2]。見聞した場所や音楽会で聴いた音楽などほぼ同じだが、『隨想』では、市内観光の翌日 1 月 8 日に訪れたモントルーのシヨン城 Château de Chillon 見学が加えられ、閉門後の入場が特に許されて、カンテラの灯のもと、月の光の射し込む大広間から眺めたレマン湖が回想される。「冬

(1)『上田貞次郎日記　明治三十八年―大正七年』上田貞次郎日記刊行会編 , 昭和 39 年 4 月 , p. 441.

(2)『頼貞隨想』徳川頼貞遺稿刊行会編 , 河出書房 , 昭和 31 年 6 月 , p.60-63.

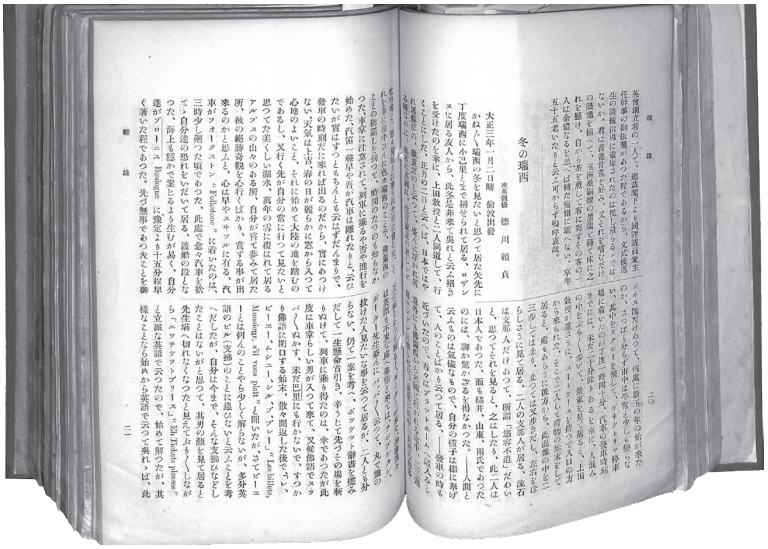
の瑞西」でローザンヌに招き、駅に迎えてくれた友人 MM 君とその母 M 夫人──フランスの外交官夫人──は、『随想』ではル・スウィール男爵夫人──ドイツ・バイエルン出身の外交官夫人──と記され、到着時に駅に出迎え、観光に付き添ったのは男爵夫人の一人娘 J.M 嬢である。上田貞次郎の 1 月 3 日付の日記には "Arrive Lausanne 10:48 a.m. Walk in town with Männlich" とあるから名は不明ながら男性であることは間違いないのだが。記憶が交叉しているのかもしれない。しかし頼貞が生涯で唯一残した小説「麗日記」（大正 10 年代執筆）(3) はこのスイスの思い出を題材としており、そこで描かれるのはプロイセン帝国の名門貴族を父にもつ美しい少女ルイズとの恋物語である。本稿のローザンヌ駅到着のシーンがルイズを相手に再現されて物語が始まる。『随想』の叙述も雰囲気も小説「麗日記」に近く、記憶違いと言い切るには疑問が残る。

作品「麗日記」と文集『えりざのまどゐ』については稿を改めたい。

なお、本稿が発表された『南葵育英會會報』7 号には前年に亡くなった弟 治（おさむ）（1896.10.25-1913.3.1）の一周忌を迎えて執筆された「弟へ」が掲載されており、遠い異国の地で亡き弟を想い、傷心の日々を送る頼貞の姿が映し出される。また随行者山東誠三郎によるモスクワからロンドンに至る旅行記「渡歐旅行記雜信」（前号より連載）、および DRSY 生（頼貞？）の戯文風「英国ひざくりげ」の寄稿もあり、興味深い。

原文は縦組み。仮名遣い、字体を含めて転記を原則としたが、明らかな誤植は訂正し、誤記は正しい形を補記した。かな 2 字以上を繰返す踊り字「くの字点」は文字を重ね、傍線は下線に改めた。また本文の句読点はほぼ全体に読点が用いられているが文末は句点に改め、当時の編集上の慣行である行末句読点の省略は必要に応じて加えた。難読の漢字には適宜ルビを振った。

（林淑姫）



冬の瑞西

『南葵育英會會報』7 号（大正 3 年 6 月）

(3)「麗日記」は、頼貞が周囲の青年たちとともに編んだ文集『えりざのまどゐ』第 1 輯（大正 12 年 8 月）、第 2 輯（大正 15 年 6 月）に連載された。400 字詰め原稿用紙にしてほぼ 50 枚の作品。

収蔵資料　目録と紹介

スナール室内楽シリーズ　目録と解題

本稿は、南葵音楽図書館所蔵の「スナール室内楽シリーズ」の目録と解題である。「スナール室内楽シリーズ」の概要については、本紀要第 1 号掲載の調査報告に詳しい。ここでは目録との関連で重要になることを中心にまとめるが、その際、上記調査報告の主に前半部分と内容の重複が生じることを、予めお断りしておく。

1. スナールについて

スナール Senart はフランスの音楽出版社である [1]。1908 年にモーリス・スナール Maurice Senart（1878 ～ 1962 年）とルダネ B. Roudanez により設立。当初は、主にヴァンサン・ダンディ ならびにスコラ・カントルムに拠る作曲家たちのオルガン曲 を出版していたが、1920 年代に入ると、同時代の若い作曲家たちの作品の刊行に力を注いだ。とりわけオネゲル Arthur Honegger（1892 ～ 1955 年） が同社から受けた恩恵は大きい [2]。

また、グディメル、ジャヌカン、ラッススをはじめとするルネサンス期の声楽曲の出版 (*Monuments de la Musique Française au Temps de la Renaissance* 1924–29, 10 volumes) も、同社の業績として特筆に値する。

1941 年にフランスの音楽出版社サラベール Salabert に売却。スナールから出ていた多くの楽譜は、現在、サラベールから出版されている。

2.「室内楽シリーズ」刊行の意図と形態

「室内楽シリーズ」La musique de chambre, revue semestrielle de musique ancienne et moderne の刊行意図は、同社の広告では以下のように説明されている。プロ、アマともに室内楽のニーズは拡大しているが、新作の楽譜は高価なため普及せず、レパートリーの固定化を招いている。状況を改善するには、多様な作品を収めた室内楽の楽譜の bibliothèque が必要である。この bibliothèque を定期刊行物の形で提供するのが「室内楽シリーズ」であり、シリーズを順次購入していけば、室内楽曲の楽譜の一大コレクションが出来上がる。

刊行の形態は以下のとおり。

a. 刊行は年 2 回 (11 月／5 月) 。予約制。配本は各号、大判で 550 ページ。

b. シリーズは、次の 5 つの部編を含む。①ピアノ作品 (連弾曲を含む)、②歌曲、③ヴァイオリン作品、④チェロ作品、⑤室内アンサンブル (弦楽四重奏曲やピアノ五重奏曲)。部編③、④、⑤の楽譜はスコアとパート譜を含む。

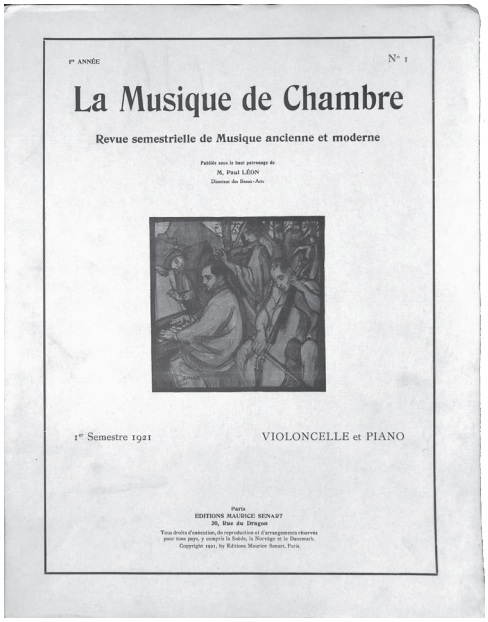
楽譜のサイズはすべて 35.3 × 27.0cm。一作品ごとに製本されているが、部編ごとに厚紙表紙 cartonnage にまとめられている。個々の部編のみの購入も可能。

c. それぞれの部編が、同時代の音楽 Musique moderne と、主として 18 世紀以前の音楽 Musique ancienne の双方を含む。両者はおおよそ 3:1 の割合。ただし、個々の作品の楽譜に Musique moderne と Musique ancienne を区別する印はない。

d. 毎号、付録論考 Supplément littéraire et critique と題された冊子が附き、その号に収録された作品とその作曲家についての解説のほか、演奏会評、

(1)Senart はしばしば Sénart とも表記され、これに対応して「セナール」の片仮名表記も用いられるが、ここでは『ニューグローヴ音楽大事典』に準拠して「スナール」と表記する。

(2) 本紀要の調査報告を参照。


1re ANNÉE N° 1

La Musique de Chambre

Revue semestrielle de Musique ancienne et moderne

Publiée sous le haut patronage de
M. Paul LÉON
Directeur des Beaux-Arts

1er Semestre 1921 VIOLONCELLE et PIANO

Paris
EDITIONS MAURICE SENART
20, Rue du Dragon

Tous droits d'exécution, de reproduction et d'arrangements réservés pour tous pays, y compris la Suède, la Norvège et le Danemark.
Copyright 1921, by Éditions Maurice Senart, Paris.

1921 年第 1 期・チェロ作品編の表紙

特定の作曲家についての論考が含まれる [後述]。このため「室内楽シリーズ」には音楽雑誌としての性格が備わることになる。

シリーズ全体の監修者はポール・レオン Paul Leon(1874 ～ 1962 年)。アカデミー会員で、ボザール (美術学校) の院長を務めた。専門は建築、特に歴史的建造物であるが、ガブリエル・フォーレの親しい友人であった。

3. シリーズの方向転換

「スナール室内楽シリーズ」は年に 2 回刊行されたが、1926 年度と 1927 年度に関しては、それぞれ 1 回分しか南葵音楽図書館には所蔵されていない。2 回分が何らかの理由で失われたのか、「室内楽シリーズ」自体が 1926 年度以降、年 1 回刊行になったのか、現時点では不明。

1926 年度までスナール社は自社の楽譜のみで「室内楽シリーズ」構成していたが、1927 年度になると、デュラン、ルアール・ルロル、エノック社の楽譜もシリーズに含めるようになった。同社広告 (『ルヴュ・ミュジカル』1927 年 10 月号掲載) によれば、より幅広い、バランスの取れたラインナップを提供することが、その目的である。

これら他社刊行の個々の楽譜は、そのままの形で (スナールの社名などは一切記されず) スナール社の楽譜とともに、同じ「室内楽シリーズ」の厚紙表紙の中に収められている。これらの楽譜に関しては、目録では「注記」にもともとの出版社名が記されている。

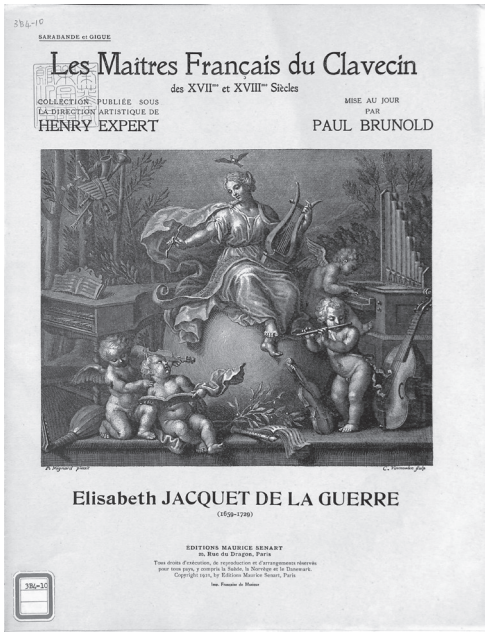
なお、南葵音楽図書館に収蔵されているのは、この 1927 年度刊行分までである。これがシリーズの最終巻だったのか、本国ではその後も継続して刊行されたのか、等についても現時点では不明であり、今後の調査が望まれる。

4. Musique ancienne 部門の多様性

他社の楽譜をシリーズに含めたのは 1927 年度のみだが、自社の他のシリーズに属する楽譜をまぜることは、Musique ancienne の部門では早くから行われていた。以下のようなシリーズ名を表紙に冠した楽譜が、「室内楽シリーズ」には多数含まれている。

・Edition nationale
・Les maîtres français du clavecin des XVIIeme et XVIIIeme siècles
・Chant de France et d'Italie ; musique dramatique
・Œuvre célèbres et transcriptions classiques
・Amusements des musiciens françcais du XVIIIme siècle

これらはシリーズごとに表紙のデザインが統一されており、作品の傾向も明確である。たとえば、Les maîtres français du clavecin des XVIIeme et XVIIIeme siècles (「17, 18 世紀フランスのクラヴサンの巨匠たち」) は、クープラン、ジャック・ド・ラ・ゲールなどの鍵盤楽器のための作品のピアノ用編曲のシリーズで、アンリ・エクスペールが



1921年第1期・ピアノ音楽編より、ジャック・ド・ラ・ゲール《サラバンドとジーグ》
「17、18世紀フランスのクラヴサンの巨匠たち」の一曲

監修している。

これらの楽譜に関しても、「室内楽シリーズ」に含めるにあたって表紙を付け直すなどの措置は取られなかったようである。目録では、上記のような他のシリーズ名が楽譜の表紙に記してある場合は、「注記」にそのシリーズ名を記載した。

5. 厚紙表紙

厚紙表紙は、「室内楽シリーズ」各巻の部編ごとに付いている。表紙のデザインは同一。シリーズ開始当初は、厚紙表紙に、その巻が何年の第何期なのかが明記されていたが、1924年の第1期以降は省かれている。

なお、南葵音楽図書館所蔵の「スナール室内楽シリーズ」のうち、以下の部編には厚紙表紙が欠けている。

・1922年第2期ピアノ音楽
・1923年第1期ピアノ音楽
・1924年第2期ピアノ音楽

6. 付録論考

付録論考は各号16ページ。サイズは35.3 × 27.0cmで楽譜と同じ。表紙はシリーズの厚紙表紙と基本的に同じデザイン。内容は号によって若干の違いはあるものの、次の3つが柱になっている。

①その巻が出る直前の演奏会シーズンについての批評。たとえば1924年第1期(同年11月刊行)の付録論考では、23年10月から24年4月までのフランスでの演奏会が対象とされている。扱われるのは、基本的には現役作曲家の新作の演奏である。いずれもロベール・デザルノーが担当。分量は2～3ページ。

②その巻に収められた作品と作曲家の解説。アンリ・コレが担当。解説は「室内楽シリーズ」の5つの部編ごとに書かれているが、musique moderneに重点があり、musique ancienneには軽く触れる程度。分量は4～5ページ。

③特定の作曲家を対象とした論考。執筆者は取り上げる作曲家に応じて変わる。ケクラン論はカルヴォコレッシ、オネゲル論はロラン・マニュエルが書いている。5～6ページ。分量的にも内容的にも読み応えがある。

1924年第2期・付録論考より、作品紹介のページ

(3) ケクラン論については『南葵音楽文庫紀要』第1号の、オネゲル論については本紀要の調査報告を参照。

なお、南葵音楽図書館所蔵の「室内楽シリーズ」付録論考には欠落がある。1921 ～ 22 年度分と 26 ～ 27 年度分は見当たらず、「南葵・図書原簿 (旧楽譜)」にも記載がない。所蔵が確認できたのは、1923 年第 1 期～ 25 年第 2 期、通し番号で no.5 ～ no.10 の計 6 冊である。

7. 楽譜の重複について

南葵音楽図書館所蔵の「スナール室内楽シリーズ」には、同じ楽譜が重複して所蔵されているケースが 2 つあった（リスト番号 63, 64 ならびに 66, 67）。いずれの場合も、同じ厚紙表紙の中に同一の楽譜が 2 部入っていた。この 2 曲に関しては、目録ではそれぞれ 1 件として扱い、リスト番号と請求記号を並記することで、同じ楽譜が 2 冊所蔵されていることを示している。

※本目録の作成と凡例の執筆に関しては、林淑姫氏の多大なご協力をいただきました。記して感謝します。

凡例

本リストは、南葵音楽図書館所蔵のスナール社室内楽シリーズ全 427 点（所蔵 429 冊）の一覧である。シリーズはピアノ作品 Piano、歌曲 Chant et piano、ヴァイオリン作品 Violon et piano、チェロ作品 Violoncelle et piano、室内アンサンブル Musique d' ensemble の 5 つの部編によって構成され、巻ごとに付録論考 Supplément littéraire et critique が付されている。配列はシリーズの刊行順とし、部編ごとに細分、その中は作曲者の アルファベット順とした。付録論考は別建てとし、末尾にまとめた。

リストの記述は、作曲者名（標目形）、資料表示（タイトル / 作曲者、編曲者、作詞者、校訂者等著作者）、刊年、シリーズ（部編、巻次）、編成、注記、楽譜プレート番号、資料記号（請求記号）より成る。作曲者名（標目形）は、アメリカ議会図書館 Library of Congress およびフランス国立図書館 Bibliothèque Nationale de France の著者名典拠レコードを参照した。資料表示、シリーズは転記を原則とし、シリーズ表示のないものは補記した。「編成」の楽器名略語は英語形で統一した『ニューグローヴ世界音楽大事典』*The New Grove Dictionary of Music and Musicians*（2001）に拠った。紙幅の都合上、楽譜種別（スコア、ピアノスコア、ピアノ・ヴォーカルスコア、パート譜等）の記載は割愛した。ヴァイオリン作品、チェロ作品、室内アンサンブルの楽譜はスコアとパート譜が揃いで刊行されている。

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
1	Bach, Carl Philipp Emanuel 1714-1788	XVIIe sonate pour piano / Ph.E. Bach ; recueillie et annotée par Emile Bosquet	c1921	Piano. 1er année, no.1	pf	"Edition nationale"	E.M.S.4391	760.8/Mu/1-1-1-7
2	Bazelaire, Paul 1886-1958	Portraits d'élèves : dix esquisses : pour le piano, op. 108 / Paul Bazelaire	c1921	Piano. 1er année, no.1	pf	"à Mademoiselle d'Estournelles de Constant" (cap.). Contents: Charme. Insouciance. Gravité. Simplicité. Gentillesse. Gaieté. Frivolité. Mélancolie. Sentimentalité. Elégance.	E.M.S.4389	760.8/Mu/1-1-1-4
3	Couperin, Armand-Louis 1727-1789	Les Cacqueteuses / Armand Louis Couperin ; mise au jour par Paul Brunold	c1921	Piano. 1er année, no.1	pf	"Les maîtres français du clavecin des XVIIeme et XVIIIeme siècles ; collection publiée sous la direction artistique de Henri Expert"	E.M.S.4581	760.8/Mu/1-1-1-9
4	Déré, Jean 1886-1970	Quatre petites pièces pour le piano / Jean Déré	c1921	Piano. 1er année, no.1	pf		E.M.S.4385	760.8/Mu/1-1-1-3
5	Fourdrain, Félix 1880-1923	Apparition : air de ballet : pour piano / Félix Fourdrain	c1921	Piano. 1er année, no.1	pf		E.M.S.4396	760.8/Mu/1-1-1-5
6	Jacquet de la Guerre, Élisabeth 1665-1729	Sarabande et gigue / Elisabeth Jacquet de La Guerre ; mise au jour par Paul Brunold	c1921	Piano. 1er année, no.1	pf	"Les maîtres français du clavecin des XVIIeme et XVIIIeme siècles ; collection publiée sous la direction artistique de Henri Expert"	E.M.S.4580	760.8/Mu/1-1-1-10
7	Kœchlin, Charles 1867-1950	Douze petites pièces pour le piano, op. 41bis no. 2 / Ch. Koechlin	c1921	Piano. 1er année, no.1	pf	"à la mémoire d'Yvonne H."	E.M.S.4345	760.8/Mu/1-1-1-1
8	Le Bègue de Presle, Achille Guillaume 1735-1807	Chacone grave / Le Bègue ; mise au jour par Paul Brunold	c1921	Piano. 1er année, no.1	pf	"Les maîtres français du clavecin des XVIIeme et XVIIIeme siècles ; collection publiée sous la direction artistique de Henri Expert"	E.M.S.4579	760.8/Mu/1-1-1-8
9	Mompou, Federico 1893-1987	Scènes d'enfants / Frederic Mompou	c1921	Piano. 1er année, no.1	pf	"a l'amic Manel Blancafort". Contents: Cris dans la rue. Jeux sur la plage. Jeu. Jeu. Jeunes filles au jardin.	E.M.S.4388	760.8/Mu/1-1-1-2
10	Ygouw, Opol 1871-1968	Tableaux du Caucase / Opol Ygouw	c1921	Piano. 1er année, no.1	pf	Contents: Danse du soir à Maghi-Dagha. Les bateliers du Térek. Lamento. Fête au camp tcherkesse.	E.M.S.4386	760.8/Mu/1-1-1-6
11	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	Maison à vendre : comédie mêlée de chants. Acte I. Scène IV. Air de Lise / Dalayrac ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1731	760.8/Mu/2-1-1-13
12	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	Gulistan ou le Hulla de Samarcande : opéra comique. Acte II (scène VIII). Virelai de Gulistan / Dalayrac ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1735	760.8/Mu/2-1-1-14
13	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	Raoul, sire de Créqui : comédie mêlée de chants. Acte II. Scène I. Romance de jeune Craon / Dalayrac ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1746	760.8/Mu/2-1-1-15
14	Delmas, Marc 1885-1931	Nuit blanche / Marc Delmas ; poésie de Albert Samain	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf		E.M.S.4549	760.8/Mu/2-1-1-11
15	Déré, Jean 1886-1970	Quatre chants arabes ; poèmes extraits du "Jardin des caresses" de Franz Toussaint / Jean Déré	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	Contents: Le flambeau. La mosquée. Le someil des colombes. Le chant des guerriers.	E.M.S.4541	760.8/Mu/2-1-1-2

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
16	Grandjany, Marcel 1891-1975	Parmi les marronniers / Marcel Grandjany, poésie de Jean Moréas	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"à Monsieur et Madame Panzera Baillot" (cap.)	E.M.S.4188	760.8/Mu/ 2-1-1-3
17	Grandjany, Marcel 1891-1975	Berceuse : extraite de "Livre de la jungle" : pour chant et piano / Marcel Grandjany, traduction de Robert d'Humière	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"à Monsieur Albert Neuberger" (cap.)	E.M.S.4187	760.8/Mu/ 2-1-1-4
18	Ollone, Max d' 1875-1959	Solitude / Max d'Ollone ; poésie de Sainte-Beuve	c1921	Chant et Piano. 1er année	v, pf	"à Madame Croiza" (cap.)	E.M.S.4544	760.8/Mu/ 2-1-1-1
19	Philidor, François-André 1726-1795	Tom Jones : comédie lyrique. Acte I. Scène I. Ariette d'Honora / Philidor ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1816	760.8/Mu/ 2-1-1-16
20	Philidor, François-André 1726-1795	Tom Jones : comédie lyrique. Acte I. Scène III. Ariette de Western. Récit de chasse. première partie / Philidor ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1817	760.8/Mu/ 2-1-1-17
21	Philidor, François-André 1726-1795	Tom Jones : comédie lyrique. Acte II. Scène III. Ariette de Jones / Philidor ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1818	760.8/Mu/ 2-1-1-18
22	Pillois, Jacques 1877-1935	Quatre mélodies. My Fire = Mon feu / Jacques Pillois ; poëm by Ch. Ellacott, translated by Jacques Pillois	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"to Paul-James Breedy" (cap.)	E.M.S.4542a	760.8/Mu/ 2-1-1-5
23	Pillois, Jacques 1877-1935	Quatre mélodies. Quatrain / Jacques Pillois ; poésie de Jean Bach Sisley	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"à Madame Marie-Louise Rollan-Mauger" (cap.)	E.M.S.4542b	760.8/Mu/ 2-1-1-6
24	Pillois, Jacques 1877-1935	Quatre mélodies. Tous ces pauvres enfants / Jacques Pillois ; poésie de André Germain	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"à Mademoiselle Manon Cougnard" (cap.)	E.M.S.4542c	760.8/Mu/ 2-1-1-7
25	Pillois, Jacques 1877-1935	Quatre mélodies. Rondel brisé / Jacques Pillois ; poésie de Jean Bach Sisley	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"à Madame Marie-Louise Rollan-Mauger" (cap.)	E.M.S.4542d	760.8/Mu/ 2-1-1-8
26	Sauvrezis, Alice 1866-1946	Calme des jardins : Sérénade extraite de la saynète-pastrale "L'indifférent" / A. Sauvrezis ; poésie de L. Arnould-Gremilly	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"à Jane Goupil" (cap.)	E.M.S.4585	760.8/Mu/ 2-1-1-9
27	Trémois, Marcel 1891-1974	Mélodies. Premier recueil / Marcel Trémois	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	Contents: Le voyage. Madrigal de Calderon. Le Colimaçon. La mort et le bûcheron. Fantoche.	E.M.S.4543a	760.8/Mu/ 2-1-1-12
28	Versepuy, Mario 1882-1972	Le renard et les raisins : fable de La Fontaine / Mario Versepuy	c1921	Chant et Piano. 1er année, no.1	v, pf	"à Marthe Fouillié" (cap.)	E.M.S.4548	760.8/Mu/ 2-1-1-10
29	Geminiani, Francesco 1687-1762	Concerto I pour violon et piano / Geminiani ; réduction de la partition et réalisation de la basse chiffrée par Eugène Borrel	c1921	Violon. 1er année, no.1	vn, pf	"Edition nationale"	E.M.S.4532	760.8/Mu/ 3-1-1-2
30	Vivaldi, Antonio 1678-1741	12e concerto pour violon et piano / Vivaldi ; réduction de la partition et réalisation de la basse chiffrée par Eugène Borrel	c1921	Violon. 1er année, no.1	vn, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5319	760.8/Mu/ 3-1-1-1
31	Sammartini, Giovanni Battista 1700?-1775	Sonate en sol majeur pour violoncelle et piano / San Martin ; recueillie et annotée par E. de Bruyn	c1921	Violoncelle. 1er année, no.1	vc, pf	"Edition nationale"	E.M.S.4593	760.8/Mu/ 4-1-1-3
32	Cellier, Alexandre 1883-1968	Sonate pour violoncelle et piano / Alex. Cellier	c1921	Violoncelle. 1er année, no.1	vc, pf	"à Gérard Hekking" (cap.)	E.M.S.4329	760.8/Mu/ 4-1-1-2
33	Emmanuel, Maurice 1862-1938	Sonate pour violoncelle et piano / Maurice Emmanuel	c1921	Violoncelle. 1er année, no.1	vc, pf	"à Paul Bazelaire" (cap.)	E.M.S.4533	760.8/Mu/ 4-1-1-1
34	Baillot, Pierre 1771-1842	Air varié : pour violon solo avec acct de second violon et violoncelle / Baillot ; recueilli par Henry Expert	c1921	Ensemble. 1er année, no.1	vn, acc. vn, vc	"Edition nationale"	E.M.S.4582	760.8/Mu/ 5-1-1-8
35	Bousquet, Francis 1890-1942	Poème pour quatuor à cordes et piano / F. Bousquet	c1921	Ensemble. 1er année, no.1	pf qnt	"à Roger Debonnet" (cap.)	E.M.S.4553	760.8/Mu/ 5-1-1-4
36	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	Quatuor no. 3 pour 2 violons, alto et violoncelle / Dalayrac ; recueilli par Lionel de La Laurencie	c1921	Ensemble. 1er année, no.1	str qt	"Edition nationale"	E.M.S.4572	760.8/Mu/ 5-1-1-6

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
37	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	Quatuor no. 5 pour 2 violons, alto et violoncelle / Dalayrac ; recueilli par Lionel de La Laurencie	c1921	Ensemble. 1er année, no.1	str qt	"Edition nationale"	E.M.S.4573	760.8/Mu/ 5-1-1-7
38	Gerhard, Roberto 1896-1970	Trio pour violon, violoncelle et piano / Roberto Gerhard	c1921	Ensemble. 1er année, no.1	pf trio	"al meu carissim mestre Felip Pedrell" (cap.)	E.M.S.4595	760.8/Mu/ 5-1-1-5
39	Huré, Jean 1877-1930	2me quatuor à cordes / Jean Huré	c1921	Ensemble. 1er année, no.1	str qt	"à Diran Alexanian" (cap.)	E.M.S.4592	760.8/Mu/ 5-1-1-2
40	Kœchlin, Charles 1867-1950	1er quatuor à cordes en ré / Ch. Koechlin	c1921	Ensemble. 1er année, no.1	str qt	"à mon maître André Gédalge" (cap.)	E.M.S.4551	760.8/Mu/ 5-1-1-1
41	Migot, Georges 1891-1976	Cinq mouvements d'eau : pour quatuor à cordes / Georges Migot	c1921	Ensemble. 1er année, no.1	str qt	"à Albert Neuburger" (cap.). Contents: Calme, l'onde qui fuit sans cesse. Légère, l'onde qui fuit sans cesse. Lente, l'onde qui fuit sans cesse. Triste, l'onde qui fuit sans cesse. L'onde qui fuit sans cesse égare mes pensées.	E.M.S.4574	760.8/Mu/ 5-1-1-3
42	Cras, Jean 1879-1932	Âmes d'enfants : pour piano à 4 mains / Jean Cras	c1922	Piano. 1er année, no.2	pf 4 hands	"à mes filles Isaure, Colette et Monique" (cap.). Contents: 1. Pures. 2. Naïves. 3. Mystérieuses.	E.M.S.4772	760.8/Mu/ 1-1-2-6
43	Gunst, Evgenij Ottovič 1877-1938	Prélude pour piano, op. 17 no. 1/ Eugène Gunst	c1922	Piano. 1er année, no.2	pf		E.M.S.4730	760.8/Mu/ 1-1-2-5
44	Kœchlin, Charles 1867-1950	Douze esquisses : pour piano : 1re série, op. 4 no. 1/ Ch. Koechlin	c1922	Piano. 1er année, no.2	pf	"à Fred Barlow" (cap.)	E.M.S.4704	760.8/Mu/ 1-1-2-2
45	Labey, Marcel 1875-1968	Six pièces pour piano / Marcel Labey	c1922	Piano. 1er année, no.2	pf	"pour Yves Labey" (cap.)	E.M.S.4738	760.8/Mu/ 1-1-2-1
46	Le Roux, Gaspard 16..-1707	Quatre pièces / Gaspard Le Roux ; mise au jour par Paul Brunold	c1922	Piano. 1er année, no.2	pf	"Les maîtres français du clavecin des XVIIeme et XVIIIeme siècles ; collection publiée sous la direction artistique de Henri Expert"	E.M.S.4759-13267	760.8/Mu/ 1-1-2-7
47	Migot, Georges 1891-1976	Trois épigrammes / G. Migot	c1922	Piano. 1er année, no.2	pf	"à Henry Prunières". "pour Paul Marchal" (cap.)	E.M.S.4757	760.8/Mu/ 1-1-2-3
48	Rossi, Lorenzo de 1720-1794	Allegro de la sonate I. 2e partie / Abbate de Rossi Romano ; recueilli et annoté par Emile Bosquet	c1922	Piano. 1er année, no.2	pf	"Edition classique"	E.M.S.4731-396	760.8/Mu/ 1-1-2-8
49	Rossi, Lorenzo de 1720-1794	Andante de la sonate IV / Abbate de Rossi Romano ; recueilli et annoté par Emile Bosquet	c1922	Piano. 1er année, no.2	pf	"Edition classique"	E.M.S.4731-397	760.8/Mu/ 1-1-2-9
50	Royer, Étienne 1882-1928	Quatorze préludes : variations en ordre diatonique : pour le piano / Etienne Royer	c1922	Piano. 1er année, no.2	pf	"à Madame Schultz-Gaugain" (cap.)	E.M.S.4729a	760.8/Mu/ 1-1-2-4
51	Sweelinck, Jan Pieterszoon 1562-1621	6 variations : ma jeunesse a une fin ! = Mein junges Leben hat ein End /J. P. Sweelinck ; recueilli et annoté par Émile Bosquet	c1922	Piano. 1er année, no.2	pf	"Edition nationale"	E.M.S.4732-5358	760.8/Mu/ 1-1-2-10
52	Bret, Gustave 1875-1969	Vers l'absent / Gustave Bret ; poésie de Simone Jourdan	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"à Madame Cecil Gilly" (cap.)	E.M.S.4751	760.8/Mu/ 2-1-2-4
53	Englebert, Yvan O. 18..-19..	Viens lentement t'asseoir ... / Y.O. Englebert ; [paroles de] E. Verhaeran	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"à J. E. B. " (cap.)	E.M.S.4717	760.8/Mu/ 2-1-2-8
54	Honegger, Arthur 1892-1955	Trois poèmes : extraits des "Complaintes et dits" de Paul Fort / A. Honegger	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"à Mademoiselle Madeleine Bonnard" (cap.). Contents: Le chasseur perdu en forêt. Cloche du soir. Chanson de fol.	E.M.S.4752	760.8/Mu/ 2-1-2-1
55	Méhul, Étienne-Nicolas 1763-1817	Ariodant : drame mêlé de musique. Act II. Scène I. Romance du barde / Méhul ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1845	760.8/Mu/ 2-1-2-9

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ、部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
56	Méhul, Étienne-Nicolas 1763-1817	Ariodant : drame mêlé de musique. Act I. Scène II. Air de Dalinde / Méhul ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard Méhul	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1847	760.8/Mu/ 2-1-2-10
57	Méhul, Étienne-Nicolas 1763-1817	Ariodant : drame mêlé de musique. Act II. Scène X. Romance d'Ariodant / Méhul ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1846	760.8/Mu/ 2-1-2-11
58	Monsigny, Pierre Alexandre 1729-1817	Le déserteur : drame mêlé d'ariettes. Act I. Scène III. Ariette de Jannette / Monsigny ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1774	760.8/Mu/ 2-1-2-12
59	Moreau-Febvre, Henri	J'ai vu mon aimée ... / Henri Moreau-Febvre ; poésie de Tchobanian	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"à Maurice Senart" (cap.)	E.M.S.4726	760.8/Mu/ 2-1-2-5
60	Moreau-Febvre, Henri	Les vierges au crépuscule / H. Moreau-Febvre ; poème de Albert Samain	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"à Madame Charlotte Chailley" (cap.)	E.M.S.4727	760.8/Mu/ 2-1-2-6
61	Moreau-Febvre, Henri	Arpège / H. Moreau-Febvre; poésie de Albert Samain	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"à Madame Jane Berengère" (cap.)	E.M.S.4741	760.8/Mu/ 2-1-2-7
62	Ollone, Max d' 1875-1959	Dites-moi quel est mon pays ... / Max d'Ollone ; [poésie de] A. Métérié	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"à Madame Edmont Epardaud" (cap.)	E.M.S.4750	760.8/Mu/ 2-1-2-3
63, 64	Philidor, François-André 1726-1795	Tom Jones : comédie lyrique. Act I. Scène III. Ariette de Western / Philidor ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1822	760.8/Mu/ 2-1-2-13, 760.8/Mu/ 2-1-2-14
65	Trepard, Émile 1870-1952	L'intermezzo : fragments de Henri Heine / Emile Trépard ; traduction de Gérard Nerval	c1922	Chant et Piano. 1er année, no.2	v, pf		E.M.S.4745	760.8/Mu/ 2-1-2-2
66, 67	Déré, Jean 1886-1970	Première sonate pour violon et piano / Jean Déré	c1922	Violon. 1er année, no.2	vn, pf		E.M.S.4760	760.8/Mu/ 3-1-2-1, -2
68	Gaviniés, Pierre 1728 1800	Six sonates pour violon et piano. livre I (1-2-3) / Gaviniès ; révision de la partie de violon par Y.O. Englebert ; réalisation de la basse chiffrée par Jean Gallon	c1922	Violon. 1er année, no.2	vn, pf	"Edition nationale"	E.M.S.4754-5345	760.8/Mu/ 3-1-2-4
69	Sohy, Charlotte 1887-1955	Thème varié pour violon et piano / Ch. Sohy	c1922	Violon. 1er année, no.2	vn, pf	"à Nadia Boulanger" (cap.)	E.M.S.4753	760.8/Mu/ 3-1-2-3
70	Delune, Louis 1876-1940	Trois ballades pour violoncelle avec accompagnement de piano / Louis Delune	c1922	Violoncelle. 1er année, no.2	vc, pf	"à André-Levy" (cap.)	E.M.S.4770	760.8/Mu/ 4-1-2-3
71	Dresden, Sem 1881-1957	Sonate pour violoncelle et piano / Sem Dresden	c1922	Violoncelle. 1er année, no.2	vc, pf		E.M.S.4746	760.8/Mu/ 4-1-2-1
72	Duport, Jean-Louis 1749-1819	Sonate en la mineur pour violoncelle et piano / J.B.[i.e. P.] Duport ; transcrite et harmonisée par Paul Bazelaire	c1922	Violoncelle. 1er année, no.2	vc, pf	"Edition nationale"	E.M.S.4773-5353	760.8/Mu/ 4-1-2-5
73	Hussonmorel, Valéry 1851-1937	Farfadets : scherzo pour violoncelle et piano / V. Hussonmorel	c1922	Violoncelle. 1er année, no.2	vc, pf/harp	"à, et pour J. L. A. Lemaire, professeur au conservatoire de Boulogne" (cap.)	E.M.S.4791	760.8/Mu/ 4-1-2-4
74	Marais, Marin 1656-1728	Suite en la pour violoncelle et piano / Marais (Marin) ; recueilli et annoté par E. de Bruyn	c1922	Violoncelle. 1er année, no.2	vc, pf	"Edition nationale"	E.M.S.4758-5359	760.8/Mu/ 4-1-2-6
75	Pillois, Jacques 1877-1935	Chanson triste : pour violoncelle et piano, violon et piano, cor anglais et piano / Jacques Pillois	c1922	Violoncelle. 1er année, no.2	vc/vn/eng hn, pf	"à Louis Feuillard" (cap.)	E.M.S.4771	760.8/Mu/ 4-1-2-2
76	Bach, Johann Christoph Friedrich 1732-1795	Six quatuors pour 2 violons, alto et violoncelle. Livre I (nos. 1-2-3) / J. Ch. Fr. Bach ; recueillis et annotés par Louis Duttenhofer	c1922	Ensemble. 1er année, no.2	str qt	"Edition nationale"	E.M.S.4776-5355	760.8/Mu/ 5-1-2-5
77	Dedieu-Peters, Madeleine 1889-1947	3 pièces pour quatuor à cordes / Madeleine Dedieu-Peters	c1922	Ensemble. 1er année, no.2	str qt	"à mon maître Georges Caussade" (cap.). Contents: Aux étoiles. Aux rêves. A l'aurore.	E.M.S.4766	760.8/Mu/ 5-1-2-4

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
78	Haydn, Michael 1737-1806	Quintette en sol majeur pour 2 violons, 2 altos 1 violoncelle / Michel Haydn ; recueilli par G. de Saint-Foix	c1922	Ensemble. 1er année, no.2	2vn, 2va 1vc	"Edition nationale"	E.M.S.4775-5354	760.8/Mu/5-1-2-6
79	Manziarly, Marcelle de 1899-1989	Trio pour violon, violoncelle et piano / Marcelle de Manziarly	c1922	Ensemble. 1er année, no.2	pf trio		E.M.S.4792	760.8/Mu/5-1-2-1
80	Milhaud, Darius 1892-1974	Quatrième quatuor à cordes / Darius Milhaud	c1922	Ensemble. 1er année, no.2	str qt	"à Félix Delgrange" (cap.)	E.M.S.4804	760.8/Mu/5-1-2-3
81	Roland-Manuel 1891-1966	Trio pour violon, alto et violoncelle / Roland-Manuel	c1922	Ensemble. 1er année, no.2	str trio	"à Maurice Ravel" (cap.)	E.M.S.4768	760.8/Mu/5-1-2-2
82	Dedieu Peters, Madeleine 1889-1947	Trois petits préludes pour orchestre / M. Dedieu-Peters ; réduction pour piano à 4 mains par l'auteur	c1922	Piano. 2e année, no.1	pf 4 hands	"à Mademoiselle J. Weill" (cap.)	E.M.S.4831	760.8/Mu/1-2-1-8
83	Dillard, Michel 18..?-1966	Lutrin breton : extrait des Quatre petits chants monotones : pour le piano / Michel Dillard	c1922	Piano. 2e année, no.1	pf	"à Madame Hilda Roosevelt" (cap.)	E.M.S.4801	760.8/Mu/1-2-1-6
84	Dumas, Louis 1877-1952	Nocturne pour piano, op. 33 / Louis Dumas	c1922	Piano. 2e année, no.1	pf	"à mon fils René Dumas" (cap.)	E.M.S.4734	760.8/Mu/1-2-1-5
85	Imbert, Maurice 1893-1981	Une âme vibre au crépuscule : pièce pour piano / Maurice Imbert	c1922	Piano. 2e année, no.1	pf	"pour Gontran Alcouët"	E.M.S.4830	760.8/Mu/1-2-1-7
86	Le Roux, Gaspard, 16..-1707	Sarabande / Gaspard Le Roux ; mise au jour par Paul Brunold	c1922	Piano. 2e année, no.1	pf	"Les maîtres français du clavecin des XVIIeme et XVIIIeme siècles ; collection publiée sous la direction artistique de Henri Expert"	E.M.S.13268	760.8/Mu/1-2-1-1
87	Mompou, Federico 1893-1987	Suburbis / Frederic Mompou	c1922	Piano. 2e année, no.1	pf	"à ma mère" (cap.)	E.M.S.4707	760.8/Mu/1-2-1-3
88	Woollett, Henry 1864-1936	Préludes et valses / H. Woollett	c1922	Piano. 2e année, no.1	pf	"à David Blitz" (cap.). Contents: Prélude japonais. Valse-Berceuse. Prélude pastoral. Valse.	E.M.S.4828	760.8/Mu/1-2-1-2
89	Ygouw, Opol 1871-1968	3 pièces impressives pour piano, op. 33 / O. Ygouw	c1922	Piano. 2e année, no.1	pf		E.M.S.4733	760.8/Mu/1-2-1-4
90	Bracquemond, Marthe 1898-1973	Trois mélodies / M. Angot-Bracquemond ; paroles de Judith Gauthier	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.1	v, pf	"à Monsieur Louis Vierne" (cap.). Contents: Le Cormoran. Au bord du petit lac. Le gros rat.	E.M.S.4833	760.8/Mu/2-2-1-3
91	Collet, Henri 1885-1951	Quatre paysages, op. 56 à 59 / Henri Collet ; poème de Stéphane Austin	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.1	v, pf		E.M.S.4843	760.8/Mu/2-2-1-5
92	Gunst, Evgenij Ottovič 1877-1938	Chants sacrificatoires de Rabindranath Tagore, op. 12 / E. Gunst ; version française de H. Kalinensky	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.1	v, pf	Contents: I. Le jour meurt. Le dit de l'indifférent. II. Au coeur du crépuscule.	E.M.S.4844	760.8/Mu/2-2-1-7
93	Méhul, Étienne-Nicolas 1763-1817	Ariodant : drame mêlé de musique. Act II. Scène 6. Mélodrame, récitatif et Air d'Ina / Méhul ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1849	760.8/Mu/2-2-1-8
94	Messager, André 1853-1929	Va chercher quelques fleurs ... : pour chant et piano / André Messager	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.1	v, pf	"à Andrée Vally" (cap.)	E.M.S.4866	760.8/Mu/2-2-1-1
95	Messager, André 1853-1929	La paix de blanc vêtue / André Messager ; paroles de L. Lahovary	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.1	v, pf	"à Madame R. de St. Marceaux" (cap.)	E.M.S.4867	760.8/Mu/2-2-1-2
96	Philidor, François-André 1726-1795	Le sorcier : comédie lyrique mêlé d'ariettes. Acte I. Scène 7. Ariette de Julien : La tempête / Philidor ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1824	760.8/Mu/2-2-1-9
97	Philidor, François-André 1726-1795	Le sorcier : comédie lyrique mêlé d'ariettes. Acte II. Scène 2. Chanson de Justine / Philidor ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano par d'après la partition d'orchestre originale Alb. Pillard	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1827	760.8/Mu/2-2-1-10

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
98	Philidor, François-André 1726-1795	Le sorcier : comédie lyrique mêlé d'ariettes. Acte I. Scène6. Romance de Bastien / Philidor ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1827	760.8/Mu/2-2-1-11
99	Smith, Melville M.	Trois dits pour chant et piano / Melville M. Smith ; paroles de Jacques Bonjean	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.1	v, pf	Contents: Le dit de celui qui se résigne. Le dit de l'indifférent. Le dit de celui qui doit partir.	E.M.S.4832	760.8/Mu/2-2-1-4
100	Trepard, Émile 1870-1952	Complainte de cette bonne lune : dialogue entre la lune et les étoiles / Emile Trépard ; [poésie de] Jules Laforgue	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.1	v, pf		E.M.S.4740	760.8/Mu/2-2-1-6
101	Gaviniés, Pierre 1728-1800	Six sonates pour violon et piano. 2e livre : 4 à 6 / Pierre Gaviniès ; révision de la partie de violon par Y.O. Englebert ; réalisation de la basse chiffrée par Jean Gallon	c1922	Violon. 2e année, no.1	vn, pf	"Edition nationale"	E.M.S.4853-5345b	760.8/Mu/3-2-1-3
102	Kœchlin, Charles 1867-1950	Sonate pour violon et piano, op. 64 / Ch. Koechlin	c1922	Violon. 2e année, no.1	vn, pf	"à Gabriel Fauré"	E.M.S.4706	760.8/Mu/3-2-1-1
103	Piriou, Adolphe 1878-1964	Sur quelques notes : petite suite cyclique en six pièces pour violon et piano, op. 15 / Ad. Piriou	c1922	Violon. 2e année, no.1	vn, pf		E.M.S.4835	760.8/Mu/3-2-1-2
104	Bach, Johann Sebastian 1685-1750	Musette pour violoncelle et orchestre à cordes ou piano / J. S. Bach ; révision de Fernand Pollain	c1922	Violoncelle. 2e année, no.1	vc, pf	"Edition nationale"	E.M.S.4869-5360	760.8/Mu/4-2-1-5
105	Boccherini, Luigi 1743-1805	2e concerto en ré majeur pour violoncelle et orchestre / L. Boccherini ; révision et cadences de Fernand Pollain ; orchestration de Michel Brusselmans	c1922	Violoncelle. 2e année, no.1	vc, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5362-4881	760.8/Mu/4-2-1-3
106	Déré, Jean 1891-2976	Chant héroïque pour violoncelle et piano / Jean Déré	c1922	Violoncelle. 2e année, no.1	vc, pf	"à Louis Fournier" (cap.)	E.M.S.4836	760.8/Mu/4-2-1-2
107	Haydn, Joseph 1732-1809	Adagio pour violoncelle et piano / Joseph Haydn ; transcription de Paul Bazelaire	c1922	Violoncelle. 2e année, no.1	vc, pf	"Edition nationale"	E.M.S.4876-1574	760.8/Mu/4-2-1-4
108	Migot, Georges 1891-1976	Dialogue en IV parties : pour violoncelle et piano / Georges Migot	c1922	Violoncelle. 2e année, no.1	vc, pf	"à Madame A. Neuburger" (cap.)	E.M.S.4875	760.8/Mu/4-2-1-1
109	Ygouw, Opol 1871-1968	Sonate pour violoncelle et piano / O. Ygouw	c1922	Violoncelle. 2e année, no.1	vc, pf		E.M.S.4850	760.8/Mu/4-2-1-6
110	Bach, Johann Christoph Friedrich 1732-1795	Six quatuors pour 2 violons, alto et violoncelle. Livre II : nos. 4-5-6 / J. Ch. Fr. Bach ; recueillis et annotés par Louis Duttenhofer	c1922	Ensemble. 2e année, no.1	str qt	"Edition nationale"	E.M.S.5356	760.8/Mu/5-2-1-4
111	Bracquemond, Marthe 1898-1973	Trois pièces pour quatuor à cordes / M. Angot-Bracquemond	c1922	Ensemble. 2e année, no.1	str qt	"à Mademoiselle Nadia Boulanger" (cap.)	E.M.S.4837	760.8/Mu/5-2-1-2
112	Cellier, Alexandre 1883-1968	2me quintette / Alexandre Cellier	c1922	Ensemble. 2e année, no.1	str qt		E.M.S.4839	760.8/Mu/5-2-1-3
113	Niverd, Lucien 1879-1967	Quatuor à cordes / Lucien Niverd	c1922	Ensemble. 2e année, no.1	str qt	"à mon cher père" (cap.)	E.M.S.4841	760.8/Mu/5-2-1-1
114	Attaingnant, Pierre 1494?-1552?	Suite de branles pour piano / Attaingnant ; recueillie et annotée par Emile Bosquet	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf	"Œuvre célèbres et transcriptions classiques"	E.M.S.1897	760.8/Mu/1-2-2-10
115	Bach, Carl Philipp Emanuel 1714-1788	11e sonate en sol mineur pour piano / Ph. Em. Bach ; recueillie et annotée par Emile Bosquet	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf	"Edition nationale"	E.M.S.5369	760.8/Mu/1-2-2-9
116	Copland, Aaron 1900-1990	Passacaglia pour piano / Aaron Copland	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf	"à Mademoiselle Nadia Boulanger" (cap.)	E.M.S.4985	760.8/Mu/1-2-2-7
117	Dieudonné, Annette 1896-1990	Douze images en courts préludes pour piano / Annette Dieudonné	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf		E.M.S.4945	760.8/Mu/1-2-2-6
118	Krebs, Johann Gottfried 1741 1814	Allegro de la sonate IV pour piano / Joh. God. Krebs ; recueilli et annoté par Emile Bosquet	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf	"Œuvre célèbres et transcriptions classiques"	E.M.S.1899	760.8/Mu/1-2-2-11
119	Lévy, Michel-Maurice 1883-1965	2 pièces humoristiques pour le piano / Michel-Maurice Lévy	c1921	Piano. 2e année, no.2	pf	"à Marcelle Dubois" (cap.). Contents: Le feu de bois qui s'eteint.... Ma concierge est bavarde....	E.M.S.4575	760.8/Mu/1-2-2-13

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者. 編曲者. 校訂者. 作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記 (Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
120	Malipiero, Gian Francesco 1882-1973	Il tarlo : pour piano / G. Francesco Malipiero	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf		E.M.S.4944	760.8/Mu/ 1-2-2-2
121	Manziarly, Marcelle de 1899-1989	Impressions de mer : pour piano / Marcelle de Manziarly	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf	"à Lucien Lambotte" (cap.)	E.M.S.4946	760.8/Mu/ 1-2-2-3
122	Müthel, Johann Gottfried 1728-1788	3 sonates pour le clavecin, Riga 1756. Sonate I. Presto / Johann Gottfried Müthel ; recueilli et annoté par Emile Bosquet	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf	"Œuvre célèbres et transcriptions classiques"	E.M.S.1898	760.8/Mu/ 1-2-2-12
123	Piriou, Adolphe 1878-1964	Jeux d'enfants, petits et grands : pour piano / Ad. Piriou	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf	op. 14. "à Mademoiselles Germaine et Léonie Compagnion" (cap.)	E.M.S.4829	760.8/Mu/ 1-2-2-8
124	Seroux, Maurice de	Danses pour piano / Maurice de Seroux	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf	"à mademoiselle Marguerite Maire de Fraguier" (cap.)	E.M.S.4986	760.8/Mu/ 1-2-2-4
125	Seroux, Maurice de	Rondes pour piano / Maurice de Seroux	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf	"à Nadia Boulanger" (cap.)	E.M.S.4987	760.8/Mu/ 1-2-2-5
126	Wolff, Albert 1884-1970	Trois pièces marocaines : pour piano / Albert Wolff	c1922	Piano. 2e année, no.2	pf	"au Maréchal Lyautey en témoignage de très respectueuse admiration" (cap.)	E.M.S.4943	760.8/Mu/ 1-2-2-1
127	Bertrand, Marcel 1883-1945	La veillée pour chant et piano / Marcel-Bertrand ; poésie de Hugues Lapaire	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.2	v, pf	"à mademoiselle Yvonne Brothier" (cap.).	E.M.S.4939	760.8/Mu/ 2-2-2-8
128	Bertrand, Marcel 1883-1945	Dernier sommeil pour chant et piano / Marcel-Bertrand	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.2	v, pf	"à mademoiselle Gabrielle Dauly" (cap.)	E.M.S.4940	760.8/Mu/ 2-2-2-9
129	Cras, Jean 1879-1932	Polyphème : drame lyrique en quatre actes et cinq tableaux de Albert Samain. Acte III, scène I / Jean Cras	c1921	Chant et Piano. 2e année, no.2	v, pf		E.M.S.6005	760.8/Mu/ 2-2-2-2
130	Cras, Jean 1879-1932	Polyphème : drame lyrique en quatre actes et cinq tableaux de Albert Samain. Acte IV, scène V / Jean Cras	c1921	Chant et Piano. 2e année, no.2	v, pf		E.M.S.6006	760.8/Mu/ 2-2-2-3
131	Le Guillard, Albert 1887-1958	Quatre mélodies / A. Le Guillard	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.2	v, pf	Contents: La mort des amants / Charles Baudelaire. Pantoum négligé / Paul Verlaine). Crépuscule pluvieux / E. Mikhael. Chanson / André Spire.	E.M.S.4957	760.8/Mu/ 2-2-2-5
132	Moulaert, Raymond 1875-1962	Quatre poèmes chinois : extraits de La flûte de jade de Franz Toussaint / Raymond Moulaert	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.2	v, pf	"à Lina Pollard" (cap.). Contents: Notre bateau glisse.... L'orage favorable. Souvenirs. Les jeunes filles deYuen.	E.M.S.4958	760.8/Mu/ 2-2-2-7
133	Mozart, Wolfgang Amadeus 1756-1791	VI Lieder pour chant et piano / W. A. Mozart	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.2	v, pf	"Textes français et allmand d'apès une édition de édition bonn de la fin du XVIIIe siècle"	E.M.S.5366	760.8/Mu/ 2-2-2-10
134	Petrides, Petros 1892-1978	Quatre mélodies grecques pour chant et piano / Petro J. Petridis ; poésies de Ar. Valaoritis	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.2	v, pf		E.M.S.4955	760.8/Mu/ 2-2-2-4
135	Sauvrezis, Alice 1866-1946	Neiges sur la montagne : pour chant et piano (violon et violoncelle ad libitum) / A. Sauvrezis ; poésie de Arnould Gremilly	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.2	v, pf, vn ad lib, vc ad lib	"à Rode Armandie"	E.M.S.4956	760.8/Mu/ 2-2-2-6
136	松山芳野里 1894-1974	Cinq chansons caractéristiques japonaises / Yoshinori Matsuyama	c1922	Chant et Piano. 2e année, no.2	v, pf		E.M.S.4976	760.8/Mu/ 2-2-2-1
137	Aubert, Jacques 1689-1753	Concerto III pour violon et piano / Jacques Aubert ; réduction de la partie d'orchestre et réalisation de la basse chiffrée par Eugène Borrel	c1922	Violon. 2e année, no.2	vn, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5363	760.8/Mu/ 3-2-2-3
138	Dupuis, Albert 1877-1967	Sonate pour violon et piano / Albert Dupuis	c1922	Violon. 2e année, no.2	vn, pf	"à ma femme" (cap.)	E.M.S.4952	760.8/Mu/ 3-2-2-1
139	Orban, Marcel 1884-1958	Sonate pour violon et piano / Marcel Orban	c1922	Violon. 2e année, no.2	vn, pf	"à Gaston Le Fleuve" (cap.)	E.M.S.4984	760.8/Mu/ 3-2-2-2
140	Bach, Johann Sebastian 1685-1750	Deux chorals pour violoncelle et piano / J.S. Bach ; transcrits par V. Hussonmorel	c1922	Violoncelle. 2e année, no.2	vc, pf	"Œuvre célèbres et transcriptions classiques"	E.M.S.1575	760.8/Mu/ 4-2-2-4
141	Boulnois, Joseph 1884-1918	Sonate pour violoncelle et piano / Joseph Boulnois	c1922	Violoncelle. 2e année, no.2	vc, pf	"à Gérard Hekking" (cap.)	E.M.S.4954	760.8/Mu/ 4-2-2-1

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ、部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
142	Flament, Édouard 1880-1958	2me Sonate pour violoncelle et piano / Edouard Flament	c1922	Violoncelle. 2e année, no.2	vc, pf	"à Mathieu Barraine" (cap.)	E.M.S.4953	760.8/Mu/4-2-2-2
143	Marcello, Benedetto 1686-1739	Sonate en la majeur pour violoncelle avec acct. de piano / Benedetto Marcello ; révision par Fernand Pollain	c1922	Violoncelle. 2e année, no.2	vc, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5370	760.8/Mu/4-2-2-3
144	Boulnois, Joseph 1884-1918	Trio pour piano, violon et violoncelle / Joseph Boulnois	c1922	Ensemble. 2e année, no.2	pf trio	"à monsieur Ch. Belley" (cap.)	E.M.S.4988	760.8/Mu/5-2-2-1
145	Homberg, Jeanne Octave 1884-1946	Trio pour violon, violoncelle et piano / J. Homberg	c1922	Ensemble. 2e année, no.2	pf trio	"à mon cher maître Eugène Gigout" (cap.)	E.M.S.4951	760.8/Mu/5-2-2-2
146	Leclair, Jean-Marie 1703-1777	6me sonate pour 2 violons / Leclair (le Cadet) ; recueillie par Leon Vallas ; [révision et annotation de Fernande Capelle (cap.)]	c1922	Ensemble. 2e année, no.2	2vn	"Edition nationale"	E.M.S.5361	760.8/Mu/5-2-2-6
147	Migot, Georges 1891-1976	Le paravent de laque aux V images / Georges Migot	c1921	Ensemble. 2e année, no.2	str qt	"à Maurice Senart" (cap.)	E.M.S.3746	760.8/Mu/5-2-2-3
148	Milhaud, Darius 1892-1974	Cinquième quatuor à cordes / Darius Milhaud	c1922	Ensemble. 2e année, no.2	2vn, vc	"à Arnold Schönberg" (cap.)	E.M.S.4950	760.8/Mu/5-2-2-4
149	Oliver Astorga, Juan 1733-1830	Trio pour 2 violons et violoncelle / D. Oliver Astorga ; annotations de Y.O. Englebert	c1922	Ensemble. 2e année, no.2	vc, str	"Edition nationale"	E.M.S.5368	760.8/Mu/5-2-2-5
150	Vivaldi, Antonio 1678-1741	Sonates en concert. Sonate V / Antonio Vivaldi ; réalisation en concert de la basse continue par Vincent d'Indy	c1922	Ensemble. 2e année, no.2		"Edition nationale"	E.M.S.5367	760.8/Mu/5-2-2-7
151	Cras, Jean 1879-1932	Polyphème : drame lyrique en quatre actes et cinq tableaux de Albert Samain. Interlude du 1er acte : Le Sommeil de Galaté / Jean Cras	c1922	Piano. 3e année, no.1	pf		E.M.S.6138	760.8/Mu/1-3-1-10
152	Kullmann, Alfred	Effluves pour piano / Alfred Kullmann	c1923	Piano. 3e année, no.1	pf		E.M.S.6119	760.8/Mu/1-3-1-4
153	Kullmann, Alfred	Barcarolle pour piano / Alfred Kullmann	c1923	Piano. 3e année, no.1	pf		E.M.S.6096	760.8/Mu/1-3-1-5
154	Lazarus, Daniel 1898-1964	Six Pièces pour piano / Daniel Lazarus	c1923	Piano. 3e année, no.1	pf	"à la mémoire de Franz Schubert" (cap.)	E.M.S.6093	760.8/Mu/1-3-1-7
155	Le Borne, Fernand 1862-1929	Suite pour piano en sol mineur / Fernand Le Borne	c1923	Piano. 3e année, no.1	pf	op. 71. "à Mademoiselle Mary Weingaertner" (cap.)	E.M.S.6094	760.8/Mu/1-3-1-8
156	Malipiero, Gian Francesco 1882-1973	Cavalcate pour piano / G. Francesco Malipiero	c1923	Piano. 3e année, no.1	pf	"al maestro G. Zuelli"	E.M.S.6095	760.8/Mu/1-3-1-9
157	Mozart, Wolfgang Amadeus 1756-1791	6 danses viennoises pour piano / W. A. Mozart ; réduction d'orchestre [pour piano] par G. de Saint-Foix	c1923	Piano. 3e année, no.1	pf	"Edition nationale"	E.M.S.5374	760.8/Mu/1-3-1-1
158	Sammartini, Giovanni Battista 1700?-1775	Sonate II pour piano / J. B. Sammartini ; recueillie par G. de Saint-Foix	c1923	Piano. 3e année, no.1	pf	"Edition nationale"	E.M.S.5376	760.8/Mu/1-3-1-2
159	Schobert, Johann 1735?-1767	Sonate pour clavecin, op. 8 / J. Schobert ; recueillie par G. de Saint-Foix	c1923	Piano. 3e année, no.1	pf	"Edition nationale"	E.M.S.5375	760.8/Mu/1-3-1-3
160	Sequeira, D	L'oiseau du Caribe : pour le piano / D. Sequeira	c1923	Piano. 3e année, no.1	pf	op. 30	E.M.S.6014	760.8/Mu/1-3-1-6
161	Cras, Jean 1879-1932	Image : pour chant et piano / Jean Cras ; paroles de Edouard Schneider	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf	"à madame Gabrielle Gills" (cap.)	E.M.S.6123	760.8/Mu/2-3-1-1
162	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	Gulnare, ou, L'Esclave persane : comédie mêlée d'ariettes. Scène 4. Romance d'Osmin / Dalayrac ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1757	760.8/Mu/2-3-1-10
163	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	Gulnare, ou, L'Esclave persane : comédie mêlée d'ariettes. Scène 1. Romance de Gulnare / Dalayrac ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1758	760.8/Mu/2-3-1-11

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
164	Herscher-Clément, Jeanne 1878-1941	Trois images d'Asie / J. Herscher-Clément ; texte de Renée Frachon	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf	Contents: I. La jonchée merveilleuse. II. Anuradhapura. III. L'île trop belle.	E.M.S.6092	760.8/Mu/ 2-3-1-6
165	Lamy, Fernand 1881-1966	Trois poèmes pour chant et piano / Fernand Lamy ; paroles de Paul Fort	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf	Contents: L'heure mystique. Par les dunes. Le rouge-gorge.	E.M.S.4834	760.8/Mu/ 2-3-1-7
166	Manziarly, Marcelle de 1899-1989	Six chants / Marcelle de Manziarly ; paroles de Marcelle de Manziarly	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf		E.M.S.6124	760.8/Mu/ 2-3-1-3
167	Méhul, Étienne-Nicolas 1763-1817	L'Irato, ou, L'Emporté : opéra bouffon. Scène 10. Rondeau d'Isabelle / Méhul ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1853	760.8/Mu/ 2-3-1-12
168	Philidor, François-André 1726-1795	Ernelinde : tragédie lyrique. Act I. Ballet, air de soprano / Philidor ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1830	760.8/Mu/ 2-3-1-9
169	Pillois, Jacques 1877-1935	Le jugement : chant et piano / Jacques Pillois ; poésie de Fernand Mazade	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf	"à Charles Panzéra" (cap.)	E.M.S.6058	760.8/Mu/ 2-3-1-2
170	Ranse, Marc de 1881-1951	Triptyque / Marc de Ranse ; sur des vers de Francis Jammes	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf		E.M.S.6117	760.8/Mu/ 2-3-1-4
171	Ranse, Marc de 1881-1951	Je dédie à tes pleurs ... : pour chant et piano / Marc de Ranse ; paroles de E. Verhaeren	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf	"à ma femme" (cap.)	E.M.S.6116	760.8/Mu/ 2-3-1-5
172	Servantzdiantz, V.	Mélodies arméniennes / V. Servantsdiantz ; traduction française de A. Tchobanian	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.1	v, pf		E.M.S.6091	760.8/Mu/ 2-3-1-8
173	Bonis, Mel 1858-1937	Sonate pour violon et piano / Mel Bonis	c1923	Violon. 3e année, no.1	vn, pf	"pour Madeleine et Simone Filon"	E.M.S.6089	760.8/Mu/ 3-3-1-2
174	Guillemain, Louis-Gabriel 1705-1770	Allegro / G. Guillemain ; recueilli par Marc Pincherle	c1923	Violon. 3e année, no.1	vn, pf	"Edition nationale de musique classique"	E.M.S.5378	760.8/Mu/ 3-3-1-5
175	Lauweryns, Georges 1884-1960	Sonate pour violon et piano / G. Lauweryns	c1923	Violon. 3e année, no.1	vn, pf	"à Eugène Ysaye"	E.M.S.6088	760.8/Mu/ 3-3-1-1
176	Migot, Georges 1891-1976	Dialogue en IV parties : pour violon et piano / Georges Migot	c1923	Violon. 3e année, no.1	vn, pf	"à Michel Moreau - Febvre"	E.M.S.6054	760.8/Mu/ 3-3-1-3
177	Torelli, Giuseppe 1658-1709	Concerto pour violon et piano / Torelli ; réduction de l'orchestre et réalisation de la basse par Marc Pincherle	c1923	Violon. 3e année, no.1	vn, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5377	760.8/Mu/ 3-3-1-4
178	Kœchlin, Charles 1867-1950	Sonate pour violoncelle et piano, op. 64 / Ch. Koechlin	c1923	Violoncelle. 3e année, no.1	vc, pf	"à Ch.van Isterdaël"	E.M.S.6122	760.8/Mu/ 4-3-1-1
179	Martin, François 1727-1757	Sonate en mi mineur [pour] violoncelle et piano / Fr. Martin ; réalisée par Jean Strauwen	c1923	Violoncelle. 3e année, no.1	vc, pf	"à Georges Pitcsh, professeur au conservatoire de Brusselles" (cap.). "Edition nationale"	E.M.S.5373	760.8/Mu/ 4-3-1-3
180	Rasse, François 1873-1955	Sonate pathétique pour violoncelle et piano / François Rasse	c1923	Violoncelle. 3e année, no.1	vc, pf	"à monsieur Charles Van Isterdaël" (cap.)	E.M.S.6114	760.8/Mu/ 4-3-1-2
181	Boïeldieu, François-Adrien 1775-1834	Trio pour piano, violon et violoncelle, op. 5 / Boieldieu ; recueilli par G. de Saint-Foix	c1923	Ensemble. 3e année, no.1	pf trio	"dédiée à mademoiselle La Roche de Rouen" (cap.). "Edition nationale"	E.M.S.5379	760.8/Mu/ 5-3-1-5
182	Cras, Jean 1879-1932	Quintette pour 2 violons, alto, violoncelle et piano / Jean Cras	c1923	Ensemble. 3e année, no.1	pf qnt	"à ma mère" (cap.)	E.M.S.6109	760.8/Mu/ 5-3-1-1
183	Hoérée, Arthur 1897-1986	Pastorale et danse : 2 pièces pour quatuor à cordes / Arthur Hoerée	c1925	Ensemble. 3e année, no.1	str qt	"au quatuor Poulet" (cap.). "Prix Lepaul 1923"	E.M.S.6844	760.8/Mu/ 5-3-1-2
184	Honegger, Arthur 1892-1955.	Rapsodie pour deux flûtes, clarinette et piano ou 2 violons, alto et piano / A. Honegger	c1923	Ensemble. 3e année, no.1	2fl, cl, pf/2vn, va, pf	"à m. Ch. M. Widor" (cap.)	E.M.S.6131	760.8/Mu/ 5-3-1-4
185	Siohan, Robert 1894-1985	Premier quatuor à cordes / Robert Siohan	c1923	Ensemble. 3e année, no.1	str qt	"Prix Halphen 1922"	E.M.S.6120	760.8/Mu/ 5-3-1-3

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者. 編曲者. 校訂者. 作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
186	Aubert, Jacques 1689-1753	Les amusettes. no. 4 / Jacques Aubert ; collection publiée sous la direction artistique de Henry Expert ; révision et annotations de Paul Brunold	[n.d.]	Piano. 3e année, no.2	pf	"Amusements des musiciens françcais du XVIIIme siècle"	E.M.S.3.266	760.8/Mu/ 1-3-2-11
187	Chédeville, Nicolas 1705-1782	Les amusements champêtres / Nicolas Chédeville ; collection publiée sous la direction artistique de Henry Expert ; révision et annotations de Paul Brunold	[n.d.]	Piano. 3e année, no.2	pf	"Amusements des musiciens françcais du XVIIIme siècle"	E.M.S.3.264	760.8/Mu/ 1-3-2-10
188	Françaix, Alfred 1880?-1970	Soir de Toussaint en Cambresis : pour piano, op. 23 / Alfred Françaix	c1923	Piano. 3e année, no.2	pf	"à Léon Kartun" (cap.)	E.M.S.6246	760.8/Mu/ 1-3-2-6
189	Françaix, Alfred 1880?-1970	Carillon de Flandre : pour piano / Alfred Françaix	c1923	Piano. 3e année, no.2	pf	op. 16. "à Eugène Reuchsel" (cap.)	E.M.S.6247	760.8/Mu/ 1-3-2-7
190	Françaix, Jean 1912-1997	Pour Jacqueline : pour piano / Jean Françaix	c1923	Piano. 3e année, no.2	pf	Contents: L'été aux Perrières. On berce Linette. Les petits pas de Linette. Sous les ombrages. La danse des ours.	E.M.S.6245	760.8/Mu/ 1-3-2-8
191	Honegger, Arthur 1892-1955	Le Cahier Romand : 5 pièces pour piano / A. Honegger	c1923	Piano. 3e année, no.2	pf		E.M.S.6250	760.8/Mu/ 1-3-2-1
192	Kœchlin, Charles 1867-1950	Pastorales : 12 pièces pour piano / Ch. Koechlin	c1923	Piano. 3e année, no.2	pf	"à monsieur Louis Aguettant" (cap.)	E.M.S.6249	760.8/Mu/ 1-3-2-2
193	Lully, Jean-Baptiste 1632-1687	Passacaille pour piano / J. B. Lulli ; transcription de Gil-Marchex	[n.d.]	Piano. 3e année, no.2	pf	"pour Venus venant avec l'Hymen et l'Amour célébrer les noces de Persée et d'Andromède" (cap.). "Edition nationale"	E.M.S.5384	760.8/Mu/ 1-3-2-12
194	Migot, Georges 1891-1976	Le tombeau de du Fault joueur de luth / Georges Migot	c1923	Piano. 3e année, no.2	pf		E.M.S.6241	760.8/Mu/ 1-3-2-3
195	Rohozinski, Ladislas 1886-1938	Huit petites pièces pour piano / L. Rohozinski	c1923	Piano. 3e année, no.2	pf	"à Wladzio, Lili, Mihrï et Jean" (cap.)	E.M.S.6243	760.8/Mu/ 1-3-2-4
196	Sigtenhorst Meyer, Bernhard van den 1888-1953	Prélude pour piano / B. van den Sigtenhorst-Meyer	c1923	Piano. 3e année, no.2	pf	op. 16	E.M.S.6248	760.8/Mu/ 1-3-2-9
197	Vierne, Louis 1870-1937	Trois nocturnes pour piano, op. 35 / Louis Vierne	c1923	Piano. 3e année, no.2	pf	"à mademoiselle Madeleine Richepin"	E.M.S.6244	760.8/Mu/ 1-3-2-13
198	Ygouw, Opol 1871-1968	Nouveaux tableaux du Caucase / Opol Ygouw ; épigraphes de Pierre Lestringuez	c1923	Piano. 3e année, no.2	pf	Contents: Danses des bergers. Sorcier montreur d'ours. Procession des Icônes. Cosaques du Kouban.	E.M.S.6242	760.8/Mu/ 1-3-2-5
199	Copland, Aaron 1900-1990	Old poem / Aaron Copland ; words from the Chinese by Arthur Waley ; traduction française de Jules Casadesus	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf		E.M.S.6198	760.8/Mu/ 2-3-2-7
200	Cras, Jean 1879-1932	Fontaines / Jean Cras ; poèms de Lucien Jacques	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	"à monsieur Vanni-Marcoux"(cap.). Contents: Hommage à la fontaine. De bon matin. Offrande. Reste. L'antique fontaine.	E.M.S.6254	760.8/Mu/ 2-3-2-1
201	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	La jeune prude, ou, Les femmes entre elles :comédie en un acte mêlée de chants. Scène 6. Couplet de Mme de St Elme : Un coeur encor adolescent / Dalayrac ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	[n.d.]	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1760	760.8/Mu/ 2-3-2-9
202	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	La jeune prude, ou, Les femmes entre elles : comédie en un acte mêlée de chants. Scène 15. Romance de Lindor : Jusqu'à quinze ans / Dalayrac ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	[n.d.]	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1762	760.8/Mu/ 2-3-2-10

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示(作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ、部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
203	La Casinière, Yves de 1897-1971	Le cheval : chant et piano / Yves de la Casinière ; paroles de Maurice Rostand	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	"à mademoiselle Nadia Boulanger. à monsieur Max d'Ollone" (cap.)	E.M.S.6253	760.8/Mu/2-3-2-5
204	La Casinière, Yves de 1897-1971	Au clair de la lune / Yves de la Casinière ; paroles de Aïda de Romain	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	"à monsieur Gabriel Poulet" (cap.)	E.M.S.6252	760.8/Mu/2-3-2-6
205	Méhul, Étienne-Nicolas 1763-1817	Les deux aveugles de Tolède : opéra comique en un acte. Acte I. Scène 4. Récitatif et air de Mendoce : Avec ordre il faut donc ranger cette musique / Méhul ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	[n.d.]	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1864	760.8/Mu/2-3-2-13
206	Migot, Georges 1891-1976	3 chants sur 3 poèmes de Tristan Derême / Georges Migot	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	"pour madame Paule de Lestang" (cap.)	E.M.S.6066	760.8/Mu/2-3-2-3
207	Monsigny, Pierre-Alexandre 1729-1817	Rose et Colas : comédie en un acte mêlée de chants. Scène 13. Vaudeville de Rose : Il etait un oiseau gris / Monsigny ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	[n.d.]	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1802	760.8/Mu/2-3-2-11
208	Monsigny, Pierre-Alexandre 1729-1817	Félix, ou, L'enfant trouvé : opéra comique en trois actes. Acte III. Scène 3. Ariette de Manon : Ah! qu'une jeune fille est à plaindre / Monsigny ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	[n.d.]	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1793	760.8/Mu/2-3-2-12
209	Pedrell, Carlos 1878-1941	Cinq poèmes vocaux / Carlos Pedrell ; [poèmes de] Antonio Machado ; avec traduction française de M. J. G. Aubry	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	Contents: Campo. Al borde del sendero un díia nos sentamos. Las ascuas de un crepúsculo morado. El cadalso. Verdes jardinillos.	E.M.S.6251	760.8/Mu/2-3-2-2
210	Philidor, François-André 1726-1795	Ernelinde : tragédie lyrique en trois actes. Acte II. Scène 8. Air de Rodoald : Vois nos fertiles champs transformés en désert / Philidor ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	[n.d.]	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1832	760.8/Mu/2-3-2-8
211	Saminsky, Lazare 1882-1959	Un grand sommeil noir ... : du "Cycle Verlaine", op. 5 no. 2 / Lazare Saminsky ; [poème de Paul Verlaine]	c1923	Chant et Piano. 3e année, no.2	v, pf	"à la mémoire de Mme N. Zabiélla Vroubel" (cap.)	E.M.S.6294	760.8/Mu/2-3-2-4
212	Delvincourt, Claude 1888-1954	Sonate pour violon et piano / Claude Delvincourt	c1923	Violon. 3e année, no.2	vn, pf	"à Jeanne Zimmermann" (cap.)	E.M.S.6274	760.8/Mu/3-3-2-2
213	Klingsor, Tristan 1874-1966	Berceuse de Sylvie / Tristan Klingsor	c1923	Violon. 3e année, no.2	vn, pf	"à madame Denise Rey" (cap.)	E.M.S.6298	760.8/Mu/3-3-2-3
214	Leclair, Jean-Marie 1697-1764	Concerto VI / Leclair l'aîné ; réduction de la partition d'orchestre et réalisation de la basse chiffrée par M. et Mme E. Borrel	c1923	Violon. 3e année, no.2	vn, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5381	760.8/Mu/3-3-2-4
215	Lefèvre, Jeanne	Sonate en sol pour piano et violon / Jeanne Lefèvre	c1923	Violon. 3e année, no.2	vn, pf	"à mon maître Vincent d'Indy" (cap.)	E.M.S.6255	760.8/Mu/3-3-2-1
216	Barrière, J.	Sonate IX : extraite des 12 sonates pour violoncelle et piano / J. Barrière ; recueillie et annotée par Marguerite Chaigneau ; réalisation de la basse chiffrée par W. Morse Rummel	c1923	Violoncelle. 3e année, no.2	vc, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5380	760.8/Mu/4-3-2-5
217	Kullmann, Alfred	Nocturne pour violoncelle et piano / A. Kullmann	c1923	Violoncelle. 3e année, no.2	vc, pf		E.M.S.6256	760.8/Mu/4-3-2-3
218	Kullmann, Alfred	Bagatelles. Rondeau pour violoncelle et piano / Alfred Kullmann	c1923	Violoncelle. 3e année, no.2	vc, pf		E.M.S.6257	760.8/Mu/4-3-2-4
219	Trépard, Émile 1870-1952	Sonate : pour violoncelle et piano / Emile Trépard	c1923	Violoncelle. 3e année, no.2	vc, pf		E.M.S.6205	760.8/Mu/4-3-2-2
220	Vreuls, Victor 1876-1944	Sonate pour violoncello et piano / Victor Vreuls	c1923	Violoncelle. 3e année, no.2	vc, pf		E.M.S.6214	760.8/Mu/4-3-2-1

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
221	Buxtehude, Dietrich 1637?-1707	1re sonate en fa majeur pour violon et violoncelle avec acct. de piano / Buxtehude ; révision de la basse chiffrée et révision par J. Peyrot et J. Rebufat	[n.d.]	Ensemble. 3e année, no.2	pf trio	"Edition nationale de musique classique"	E.M.S.2721	760.8/Mu/ 5-3-2-5
222	Jongen, Joseph 1873-1953	Quatuor 2 violons, alto, violoncelle, op. 67 / Joseph Jongen	c1923	Ensemble. 3e année, no.2	str qt	"à Florent Schmitt"	E.M.S.6260	760.8/Mu/ 5-3-2-3
223	Labey, Marcel 1875-1968	Trio pour piano, violon et violoncelle / Marcel Labey	c1923	Ensemble. 3e année, no.2	pf trio	op. 22. "à G. M. Witkowski" (cap.)	E.M.S.6261	760.8/Mu/ 5-3-2-2
224	Sammartini, Giuseppe 1695-1750	1er concerto : extrait des 6 grands concertos pour deux violons, alto, violoncelle / G. San Martini ; mis au jour par Henry Prunières	[n.d.]	Ensemble. 3e année, no.2	str qt	"Edition nationale de musique classique"	E.M.S.5385	760.8/Mu/ 5-3-2-4
225	Whithorne, Emerson, 1884-1958	Greek impressions : quartet for strings = quatuor à cordes / E. Whithorne	c1923	Ensemble. 3e année, no.2	str qt	op. 19	E.M.S.6090	760.8/Mu/ 5-3-2-1
226	Boulnois, Joseph 1884-1918	Menuet pastoral pour piano / J. Boulnois	c1913	Piano. 4e année, no.1	pf	"à madame Billa Manotte" (cap.)	E.M.S.4204. M.C.	760.8/Mu/ 1-4-1-7
227	Chevillard, Camille 1859-1923	Zacharie d'après Michel-Ange : pour piano / Camille Chevillard	c1924	Piano. 4e année, no.1	pf		E.M.S.6414	760.8/Mu/ 1-4-1-1
228	Inghelbrecht, Désiré Émile 1880-1965	La serre aux nénuphars : pour piano / D. E. Inghelbrecht	c1912	Piano. 4e année, no.1	pf	"à Marcel Chadeigne" (cap.)	E.M.S.4219. M.C.	760.8/Mu/ 1-4-1-2
229	Inghelbrecht, Désiré Émile 1880-1965	Marine : pour piano / D. E. Inghelbrecht	c1912	Piano. 4e année, no.1	pf	"à Marcel Chadeigne" (cap.)	E.M.S.4218. M.C.	760.8/Mu/ 1-4-1-3
230	Mompou, Federico 1893-1987	Fêtes lointaines : 6 pièces pour piano / Federico Mompou	c1924	Piano. 4e année, no.1	pf	"à Paul Huveran" (cap.)	E.M.S.6416	760.8/Mu/ 1-4-1-4
231	Pescetti, Giovanni Battista 1704?-1766	Sonate IV / G.B. Pescetti ; révision par Thérèse Chaumont	c1924	Piano. 4e année, no.1	pf	"Edition nationale"	E.M.S.5392	760.8/Mu/ 1-4-1-12
232	Pollet, Marcel 1883-1961	Cinq petites pièces pour piano en forme de danses à la mode / Marcel Pollet	c1923	Piano. 4e année, no.1	pf	"à madame Marcelle Mayer" (cap.)	E.M.S.6317	760.8/Mu/ 1-4-1-8
233	Rossi, Luigi 1597?-1653	Passacaille / Luigi Rossi ; harmonisée [par] Henry Prunières	[n.d.]	Piano. 4e année, no.1	pf		E.M.S.3423b	760.8/Mu/ 1-4-1-13
234	Royer, Étienne 1882-1928	Quatorze préludes-variations en ordre diatoniquepour le piano. Livre II / Etienne Royer	c1922	Piano. 4e année, no.1	pf		E.M.S.6413	760.8/Mu/ 1-4-1-5
235	Sequeira, D.	Deux pièces pour piano. El lamento del Caribe, op. 9 / David Sequeira	c1924	Piano. 4e année, no.1	pf		E.M.S.6355	760.8/Mu/ 1-4-1-10
236	Sequeira, D.	Deux piècess pour piano. Ouand je contemple votre ciel, op. 20 / David Sequeira	c1924	Piano. 4e année, no.1	pf	"à Carmen" (cap.)	E.M.S.6354	760.8/Mu/ 1-4-1-11
237	Seroux, Maurice de	Divertissement pour piano / Maurice de Seroux	c1924	Piano. 4e année, no.1	pf	"à madame la comtesse R. de Beauregard (née Gallard) " (cap.)	E.M.S.6502	760.8/Mu/ 1-4-1-9
238	Tansman, Alexandre 1897-1986	Sonatine pour piano / Alexandre Tansman	c1924	Piano. 4e année, no.1	pf	"à Mecislas Horszhowski" (cap.)	E.M.S.6415	760.8/Mu/ 1-4-1-6
239	Migot, Georges 1891-1976	Quatre mélodies / Georges Migot ; sur des rythmes poëtiques de Gustave Kahn	c1921	Chant et Piano. 4e année, no.1	v, pf	"à madame et monsieur Gustave Kahn" (cap.)	E.M.S.3927	760.8/Mu/ 2-4-1-2
240	Poniridy, Georges, 1892-1982	Trois mélodies grecques / G. Poniridy ; sur des poèmes de Malakassis	c1924	Chant et Piano. 4e année, no.1	v, pf	"à madame Spéranza Calo" (cap.). Contents: I. Barcarolle. II. Averse au printemps. III. Dans la conque.	E.M.S.6425	760.8/Mu/ 2-4-1-5
241	Rossi, Luigi 1597?-1653	Six airs / Luigi Rossi ; harmonisés par Henry Prenières	[n.d.]	Chant et Piano. 4e année, no.1	v, pf		E.M.S.3423a	760.8/Mu/ 2-4-1-6
242	Sachs, Léo 1856-1930	Deux mélodies / Leo Sachs	c1924	Chant et Piano. 4e année, no.1	v, pf	Contents: I. Lentement. Poésie de A. Samain. II. Dors. Poésie de D. Lucas.	E.M.S.6417	760.8/Mu/ 2-4-1-4
243	Sauvrezis, Alice 1866-1946	Trois novains / A. Sauvrezis ; [poèmes de] Jacques Trève	c1924	Chant et Piano. 4e année, no.1	v, pf	"à Louise Matha" (cap.)	E.M.S.6442	760.8/Mu/ 2-4-1-3
244	Vierne, Louis 1870-1937	Cinq poèmes de Ch. Baudelaire / Louis Vierne	c1924	Chant et Piano. 4e année, no.1	v, pf	"à Madeleine Richepin" (cap.). Contents: Recueillement. Réversibilité. Le flambeau vivant. La choche fêlée. Les hiboux. (Extraits de "Les fleurs du mal")	E.M.S.6418	760.8/Mu/ 2-4-1-1

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示(作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ、部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
245	Déré, Jean 1886-1970	2me Sonate pour violon et piano / Jean Déré	c1924	Violon. 4e année, no.1	vn, pf	Title from caption. "à mademoiselle Lydie Demirgian" (cap.)	E.M.S.6452	760.8/Mu/3-4-1-2
246	Gaillard, Marius-François 1900-1973	Sonate pour violon et piano / Marius François Gaillard	c1923	Violon. 4e année, no.1	vn, pf	"à Claude Lévy"	E.M.S.6314	760.8/Mu/3-4-1-3
247	Haudebert, Lucien 1877-1963	Une légende au vieux château : [pour] violon et piano / Lucien Haudebert	c1924	Violon. 4e année, no.1	vn, pf	"à la comtesse de Bandon en souvenir de Castle Freyk" (cap.)	E.M.S.6419	760.8/Mu/3-4-1-4
248	Jaques-Dalcroze, Émile 1865-1950	4 danses frivoles pour violon et piano / E. Jaques-Dalcroze	c1924	Violon. 4e année, no.1	vn, pf		E.M.S.6420	760.8/Mu/3-4-1-1
249	Lully, Jean-Baptiste 1632-1687	Ballet des Muses : entrée d'Orphée : pour violon et piano / Lulli ; réduction et réalisation de la basse chiffrée par Marc Pincherle	c1924	Violon. 4e année, no.1	vn, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5390	760.8/Mu/3-4-1-5
250	Mondonville, Jean Cassanéa de 1716-1769?	Pièces de clavecin en sonates, oeuvre III. Sonate II. Allegro et aria / Mondonville ; recueilli par Marc Pincherle	c1924	Violon. 4e année, no.1	vn, pf	Title from caption. "Edition nationale"	E.M.S.5389	760.8/Mu/3-4-1-6
251	Bach, Carl Philipp Emanuel 1714-1788	3è concerto en la majeur pour violoncelle solo et orchestre à cordes / Ph.E. Bach ; révision, cadences et réduction pour piano par Fernand Pollain	c1924	Violoncelle. 4e année, no.1	vc, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5391	760.8/Mu/4-4-1-4
252	Hussonmorel, Valéry 1851-1937	Elégie : sur la mort d'un jeune Français tombé pour la patrie : violoncelle et piano / V. Hussonmorel	c1924	Violoncelle. 4e année, no.1	vc, pf	"à mes élèves Alain et Claude Zuber."	E.M.S.6422	760.8/Mu/4-4-1-3
253	Jaques-Dalcroze, Émile 1865-1950	Rythmes délaissés : pour violoncelle et piano / E. Jacques-Dalcroze	c1924	Violoncelle. 4e année, no.1	vc, pf		E.M.S.6421	760.8/Mu/4-4-1-1
254	Royer, Étienne 1882-1928	Sonate pour violoncelle et piano / Etienne Royer	c1924	Violoncelle. 4e année, no.1	vc, pf	"à André-Lévy" (cap.)	E.M.S.6440	760.8/Mu/4-4-1-2
255	Bazelaire, Paul 1870-1937	Ballade : d'après "Antoine et Cléopâtre" de J. M. Hérédia : pour 2 violons, alto, 2 violoncelles et piano / Paul Bazelaire	c1924	Ensemble. 4e année, no.1	2vn, va, 2vc, pf	op. 91. Contents: La Trirème sur le Nil...Sombres présages... Antoine et Cléopâtre...La mort... L'impérator sanglant	E.M.S.6423	760.8/Mu/5-4-1-3
256	Kœchlin, Charles 1867-1950	3è quatuor à cordes en ré / Ch. Koechlin	c1921	Ensemble. 4e année, no.1	str qt		E.M.S.6482	760.8/Mu/5-4-1-1
257	Leclair, Jean-Marie 1697-1764	6 Sonates à 2 violons sans basse. Livre I (I à III) / J. B. [i.e. Jean-Marie] Leclair l'aîné ; recueillies par Marc Pincherle	c1924	Ensemble. 4e année, no.1	2vn	"Edition nationale"	E.M.S.5388	760.8/Mu/5-4-1-4
258	Mascitti, Michele 1664?-1760	Sonate en sol mineur pour violon, violoncelle et piano / Masciti [i.e. Mascitti] ; réalisation de la basse chiffrée et révision par J. Peyrot et J. Rebufat	[n.d.]	Ensemble. 4e année, no.1	pf trio	"Edition nationale"	E.M.S.2643	760.8/Mu/5-4-1-5
259	Vierne, Louis 1870-1937	Quintette pour 2 violons, alto, violoncelle et piano / Louis Vierne	c1924	Ensemble. 4e année, no.1	pf qnt	op. 42. "en ex-voto à la mémoire de mon cher fils Jacques mort pour la France à 17 ans" (cap.)	E.M.S.6453	760.8/Mu/5-4-1-2
260	Baton, Charles	Suite, no. 5 / Charles Baton ; collection publiée sous la direction de Henry Expert ; révision et annotations de Paul Brunold	[n.d.]	Piano. 4e année, no.2	pf	"Amusements des musiciens françcais du XVIII me siècle"	M.S. et Cie.3.269	760.8/Mu/1-4-2-2
261	Baton, Charles	La vièle amusante : 6e suite / Charles Baton ; collection publiée sous la direction de Henry Expert ; révision et annotations de Paul Brunold	[n.d.]	Piano. 4e année, no.2	pf	"Amusements des musiciens françcais du XVIII me siècle"	E.M.S.3268	760.8/Mu/1-4-2-3
262	Blancafort, Manuel 1892-1959.	Cants intims. 1er recull / Manuel Blancafort	c1924	Piano. 4e année, no.2	pf	"a Helena Paris"	E.M.S.6592	760.8/Mu/1-4-2-8
263	Bonis, Mel 1858-1937	Deux pièces pour piano / Mel-Bonis	c1924	Piano. 4e année, no.2	pf	Contents: Chevaux de bois. Pavane pour Nanine.	E.M.S.6595	760.8/Mu/1-4-2-1
264	Corrette, Michel 1707-1795	La tourière / Michel Corrette ; collection publiée sous la direction de Henry Expert ; révision et annotations de Paul Brunold	[n.d.]	Piano. 4e année, no.2	pf	"Les maîtres françcais du clavecin des XVIIme et XVIII me siècles"	E.M.S.3258	760.8/Mu/1-4-2-4
265	Corrette, Michel 1707-1795	Les pantins / Michel Corrette ; collection publiée sous la direction de Henry Expert ; révision et annotations de Paul Brunold	[n.d.]	Piano. 4e année, no.2	pf	"Les maîtres françcais du clavecin des XVIIme et XVIII me siècles"	E.M.S.3259	760.8/Mu/1-4-2-5

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者. 編曲者. 校訂者. 作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
266	Corrette, Michel 1707-1795	La confession / Michel Corrette ; collection publiée sous la direction de Henry Expert ; révision et annotations de Paul Brunold	[n.d.]	Piano. 4e année, no.2	pf	"Les maîtres françcais du clavecin des XVIIme et XVIII me siècles"	M.S. et Cie.3.260	760.8/Mu/ 1-4-2-6
267	Fraguier, J. de	Rigodon champêtre pour piano / J. de Fraguier	c1924	Piano. 4e année, no.2	pf		E.M.S.6556	760.8/Mu/ 1-4-2-10
268	Honegger, Arthur 1892-1955.	Chant de joie : pour orchestre / Arthur Honegger	c1924	Piano. 4e année, no.2	pf 4hands	"à Maurice Ravel" (cap.)	E.M.S.6553	760.8/Mu/ 1-4-2-7
269	Poniridy, Georges, 1892-1982	Deux préludes pour piano / G. Poniridy	c1924	Piano. 4e année, no.2	pf	"à madame Andrée Sauraly-Thivet" (cap.)	E.M.S.6593	760.8/Mu/ 1-4-2-11
270	Rosenthal, Manuel 1904-2003	Huit bagatelles / Manuel Rosenthal	c1924	Piano. 4e année, no.2	pf	"pour Darius Milhaud" (cap.). Contents: Pastorale. Berceuse. Remenber. Le joli jeu. Romance. Rag. Romance. Finale.	E.M.S.6591	760.8/Mu/ 1-4-2-9
271	Saminsky, Lazare	Dance rituelle du Sabbath d'après une mélodie hébraïque : pour piano, op. 26, n. 1 / Lazare Saminsky	c1924	Piano. 4e année, no.2	pf	"à Robert Schmitz" (cap.)	E.M.S.6594	760.8/Mu/ 1-4-2-13
272	Seroux, Maurice de	Nocturne pour piano / Maurice de Seroux	c1924	Piano. 4e année, no.2	pf	"à mademoiselle A. Veluard" (cap.)	E.M.S.6633	760.8/Mu/ 1-4-2-12
273	Belin, Jean	Elévation / J. Belin ; poème de Pierre Aguétant	c1924	Chant et Piano. 4e année, no.2	v, pf	"à mademoiselle Madeleine Bonnard" (cap.).	E.M.S.6599	760.8/Mu/ 2-4-2-7
274	Bournonville, Armand 1890-1957	La cloche fêlée / A. Bournonville ; poésie de Ch. Baudelaire	c1924	Chant et Piano. 4e année, no.2	v, pf	"à madame Madeleine Caron, de l'Opéra" (cap.). Contents: 1. Villanelle de la chauve-souris / Maurice Heim. 2. Pantoum négligé / Paul Verlaine.	E.M.S.6600	760.8/Mu/ 2-4-2-6
275	Crèvecoeur, Louis de 18..-19..	Deux mélodies / Louis de Crévecœur	c1924	Chant et Piano. 4e année, no.2	v, pf	"à mademoiselle Madeleine Picard" (cap.). Contents: 1. Villanelle de la chauve-souris (Maurice Heim). 2. Pantoum négligé (Paul Verlaine).	E.M.S.6601	760.8/Mu/ 2-4-2-5
276	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	La jeune prude, ou, Les femmes entre elles : comédie en un acte mêlée de chants. Acte I. Scène III. Récitatif et air de Lucrèce / Dalayrac ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	[n.d.]	Chant et Piano. 4e année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1761	760.8/Mu/ 2-4-2-8
277	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	Sargines, ou, L'élève de l'amour : comédie en quatre actes mêlée de chants. Acte I. Scène III. Air de Sargines / Dalayrac ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	[n.d.]	Chant et Piano. 4e année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1725	760.8/Mu/ 2-4-2-9
278	Dalayrac, Nicolas 1753-1809	Sargines, ou, L'élève de l'amour : comédie en quatre actes mêlée de chants. Acte II. Scène III. Air de Sophie / Dalayrac ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	[n.d.]	Chant et Piano. 4e année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1726	760.8/Mu/ 2-4-2-10
279	Honegger, Arthur 1892-1955.	Six poésies de Jean Cocteau / Arthur Honegger	c1924	Chant et Piano. 4e année, no.2	v, pf	"à Rose Feart" (cap.)	E.M.S.6602	760.8/Mu/ 2-4-2-1
280	Jaques-Dalcroze, Émile 1865-1950	Le Cœur qui chante : 12 chansons dans le style populaire / texte et musique de E. Jaques-Dalcroze	c1924	Chant et Piano. 4e année, no.2	v, pf	"à madame Marcel Rouff" (cap.)	E.M.S.6596	760.8/Mu/ 2-4-2-2
281	Méhul, Étienne-Nicolas 1763-1817	Euphrosine, ou, Le Tyran corrigé : comédie en trois actes, mêlée de chants. Acte I. Scène I. Ariette d'Alibour / Méhul ; recueilli par Henry Expert ; transcription au piano d'après la partition d'orchestre originale par Alb. Pillard	[n.d.]	Chant et Piano. 4e année, no.2	v, pf	"Chant de France et d'Italie ; musique dramatique"	E.M.S.1860	760.8/Mu/ 2-4-2-11
282	Petrides, Petros 1892-1978	5 mélodies grecques / Petros J. Petridis ; [poésie de K. Krystallis]	c1924	Chant et Piano. 4e année, no.2	v, pf	op. 3-1	E.M.S.6597	760.8/Mu/ 2-4-2-4

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
283	Schierbeck, Poul 1888-1949	Le tombeau du poète Hafiz = Hafis' grav : Poésie persane / Poul Schierbeck ; français, Paul Verrier ; danois, Egen Franke	c1924	Chant et Piano. 4e année, no.2	v, pf		E.M.S.6598	760.8/Mu/ 2-4-2-3
284	Benda, Franz 1709-1786	Sonate [pour] violon et piano, no. 26 / Franz Benda ; révision et réalisation de la basse chiffrée par Emile Chaumont	c1924	Violon. 4e année, no.2	vn, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5396	760.8/Mu/ 3-4-2-5
285	Coppola, Piero 1888-1971	Poema appassionato : pour violon et piano / Piero Coppola	c1924	Violon. 4e année, no.2	vn, pf		E.M.S.6626	760.8/Mu/ 3-4-2-3
286	Cras, Jean 1879-1932	Polyphème : drame lyrique en qautre actes et cinq tableaux. Interlude du 1er acte : Le Sommeil de Galatée / de Albert Samain ; [musique de] Jean Cras ; réduction pour violon et piano par l'auteur	c1922	Violon. 4e année, no.2	vn, pf		E.M.S.6623	760.8/Mu/ 3-4-2-4
287	Doire, René 1879-1959	Sonate en fa dièse pour piano et violon / René Doire	c1921	Violon. 4e année, no.2	vn, pf	"à la mémoire de ma mère" (cap.).	E.M.S.4591	760.8/Mu/ 3-4-2-2
288	Honegger, Arthur 1892-1955.	Deuxième sonate pour violon et piano / A. Honegger	c1924	Violon. 4e année, no.2	vn, pf	"à Fernande Capelle" (cap.)	E.M.S.6604	760.8/Mu/ 3-4-2-1
289	Barrière, Jean 1707-1747	Sonates VII et VIII extraite des 12 sonates pour violoncelle et piano / J. Barrière ; recueillie et annotée par Marguerite Chaigneau ; réalisation de la basse chiffrée par W. Morse Rummel	c1924	Violoncelle. 4e année, no.2	vc, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5394	760.8/Mu/ 4-4-2-5
290	Halphen, Fernand 1872-1917	Andante religioso : d'après un thème hébraïque : pour violoncelle et orgue ou piano / Fernand Halphen	c1919	Violoncelle. 4e année, no.2	vc, org/pf	"à Pierre Gaston-Mayer"	E.M.S.3877	760.8/Mu/ 4-4-2-3
291	Hussonmorel, Valéry 1851-1937	Hymne au soleil levant : Fresque : [pour] violoncelle et piano / V. Hussonmorel	c1924	Violoncelle. 4e année, no.2	vc, pf	"à et pour Louis Ruissen" (cap.).	E.M.S.6605	760.8/Mu/ 4-4-2-4
292	Le Guillard, Albert 1887-1958	Esquisse : pour violoncelle et piano, op. 2 / Albert Le Guillard	[n.d.]	Violoncelle. 4e année, no.2	vc, pf	"à madame Piazza-Chaigneau en témoignage de profonde reconnaissance et d'admiration"	E.M.S.3656	760.8/Mu/ 4-4-2-2
293	Singery, Gaston 1893-1942	Sonate en la mineur pour violoncelle et piano / Gaston Singery	c1923	Violoncelle. 4e année, no.2	vc, pf	"à mademoiselle Madeleine Monnier" (cap.).	E.M.S.6012	760.8/Mu/ 4-4-2-1
294	Clérambault, Nicolas 1676-1749	7me sonate en mi mineur : La magnifique : pour 2 violons et piano, avec violoncelle non obligé / Clérambault ; réalisation de la basse chiffrée et révision par J. Peyrot et J. Rebufat	[n.d.]	Ensemble. 4e année, no.2	2vn, pf, vc ad lbitum	"Edition nationale de musique classique"	E.M.S.2660	760.8/Mu/ 5-4-2-6
295	Jaques-Dalcroze, Émile 1865-1950	Echos du dancing : six impromptus pour violon, violoncelle et piano / E. Jacques-Dalcroze	c1924	Ensemble. 4e année, no.2	pf trio	"à Arthur Honegger" (cap.)	E.M.S.6609	760.8/Mu/ 5-4-2-1
296	Le Guillard, Albert 1887-1958	Quatuor à cordes : pour 2 violons, alto et violoncelle / Albert Le Guillard	c1918	Ensemble. 4e année, no.2	str qt	op. 5. "à Quatuor Gaston Poulet en témoinage d'admirtaion et vive reconaissance"	M.S. & Cie.3840	760.8/Mu/ 5-4-2-3
297	Leclair, Jean-Marie 1697-1764	6 Sonates à 2 violons sans basse. Livre II (3 à 6) / J. B. [i.e. Jean-Marie] Leclair l'aîné ; recueillies par Marc Pincherle	c1924	Ensemble. 4e année, no.2	2vn	"Edition nationale de musique classique"	E.M.S.5395	760.8/Mu/ 5-4-2-5
298	Steck, Aimé 1892-1966	Fantaisie pour quatuor à cordes et piano / A. Steck	c1924	Ensemble. 4e année, no.2	pf qnt		E.M.S.6606	760.8/Mu/ 5-4-2-4
299	Tansman, Alexandre 1897-1986	Second quatuor à cordes / Alex. Tansman	c1924	Ensemble. 4e année, no.2	str qt	"pour Anna Eléonora Brociner"	E.M.S.6607	760.8/Mu/ 5-4-2-2
300	Allende, Pedro Humberto 1885-1959	12 Tonadas : de caracter popular chileno / L. Humberto Allende	c1923	Piano. 5e année, no.1	pf	"dédiées à l'illustre pianiste Ricardo Viñes et à chères mes enfants Tegualda et Ikela." (cap.)	E.M.S.6073	760.8/Mu/ 1-5-1-3
301	Déré, Jean 1886-1970	Krishna : poème dansé / Jean Déré ; réduction de l'orchestre pour piano 2 mains par l'auteur	c1925	Piano. 5e année, no.1	pf		E.M.S.6704	760.8/Mu/ 1-5-1-4
302	Excoffier, Lucien	Le Rémouleur : portrait musical imitatif : pour piano / Lucien Excoffier	[n.d.]	Piano. 5e année, no.1	pf	op. 6. "à mon cher camarade J. Duhem" (cap.)	E.M.S.6705	760.8/Mu/ 1-5-1-6
303	Frescobaldi, Girolamo 1583-1643	Ricercari pour piano / G. Frescobaldi ; transcrites par Felice Boghen	c1920	Piano. 5e année, no.1	pf	"alla Signora Elda Guastalla Senigallia il revisore" (cap.). "Edition nationale"	E.M.S.5299	760.8/Mu/ 1-5-1-1

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者. 編曲者. 校訂者. 作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
304	Garcia-Badenes, José 18..-1959	Deux impressions d'Espagne : pour piano / Garcia Badenes	[n.d.]	Piano. 5e année, no.1	pf	"a mis Queridos Radres" (cap.). Contents: a) Lied. b) Air de danse.	E.M.S.6706	760.8/Mu/ 1-5-1-5
305	Tansman, Alexandre 1897-1986	Vingt pièces faciles : sur des mélodies populaires polonaises / Alexandre Tansman	c1925	Piano. 5e année, no.1	pf	"à Ignace Paderewski" (cap.)	E.M.S.6707	760.8/Mu/ 1-5-1-2
306	Cras, Jean 1879-1932	Robaiyat de Omar Khayyám / Jean Cras ; [traduction de Franz Toussaint]	c1925	Chant et Piano. 5e année, no.1	v, pf	"à madame Caro-Cambelle" (cap.)	E.M.S.6699	760.8/Mu/ 2-5-1-1
307	Grovlez, Gabriel 1879-1944	Les mélancolies passionnées : huit mélodies sur des poèmes de Charles Guérin / Gabriel Grovlez	c1924	Chant et Piano. 5e année, no.1	v, pf		E.M.S.6293	760.8/Mu/ 2-5-1-2
308	Jaques-Dalcroze, Émile 1865-1950	L'amour qui danse : 12 chansons dans le style populaire / texte et musique de E. Jacques-Dalcroze	c1925	Chant et Piano. 5e année, no.1	v, pf	"à mon ami Zareh Chéridjian" (cap.)	E.M.S.6709	760.8/Mu/ 2-5-1-3
309	Kjerulf, Halfdan 1815-1868	Mélodies / Halfdan Kjerulf ; [poème de R. M. Milnes] ; traductions de Mme A. Chevalley	c1920	Chant et Piano. 5e année, no.1	v, pf	"Edition nationale"	E.M.S.5261	760.8/Mu/ 2-5-1-5
310	Sauvrezis, Alice 1866-1946	Veillée : pour chant et piano / A. Sauvrezis ; poésie de A. Mockel [extrait de "Clarté"]	c1925	Chant et Piano. 5e année, no.1	v, pf		E.M.S.6708	760.8/Mu/ 2-5-1-4
311	Benda, Franz 1709-1786	Scherzando pour violon et piano / F. Benda ; révision et réalisation de la basse chiffrée par Émile Chaumont	c1925	Violon. 5e année, no.1	vn, pf	"à mon ami, monsieur Albert Neuburger" (cap.) . "Edition nationale"	E.M.S.5401	760.8/Mu/ 3-5-1-5
312	Benda, Franz 1709-1786	Sonate no. 31 [pour] violon et piano / Franz Benda ; révision et réalisation de la basse chiffrée par Émile Chaumont	c1924	Violon. 5e année, no.1	vn, pf	"à Germaine Schellinx" (cap.)	E.M.S.5402	760.8/Mu/ 3-5-1-6
313	Collet, Henri 1885-1951	Rapsodie castillane : pour alto ou violon et orchestre (ou piano) / H. Collet ; partie d'alto révisée par P.L. Neuberth ; partie de violon révisée par Robert Krettly	c1925	Violon. 5e année, no.1	va/vn, pf	op. 73. "à P. L. Neuberth" (cap.)	E.M.S.6711	760.8/Mu/ 3-5-1-4
314	Dupin, Paul 1865-1949	Pastorale : Sabine no. 1 : "dans le jardinet" : pour piano et quatuor / Paul Dupin	c1910	Violon. 5e année, no.1	vn, pf	"à monsieur et madame Pascal Forthuny" (cap.)	E.M.S.2709	760.8/Mu/ 3-5-1-1
315	Kullmann, Alfred	Sonate pour violon et piano / Alfred Kullmann	c1920	Violon. 5e année, no.1	vn, pf	"à mademoiselle Jeanne Gauthier"	M.S. & Cie.4065	760.8/Mu/ 3-5-1-2
316	Rohozinski, Ladislas 1886-1938	Trois pièces pour violon et piano / L. Rohozinski	c1925	Violon. 5e année, no.1	vn, pf		E.M.S.6737	760.8/Mu/ 3-5-1-3
317	Barrière, Jean 1707-1747	Sonates X, XI et XII : extraite des 12 sonates pour violoncelle et piano / J. Barrière ; recueillie et annotée par Marguerite Chaigneau ; réalisation de la basse chiffrée par W. Morse Rumme	[n.d.]	Violoncelle. 5e année, no.1	vc, pf		E.M.S.5394	760.8/Mu/ 4-5-1-5
318	Boulnois, Joseph 1884-1918	Trois pièces pour violoncelle et piano. Sarabande / Joseph Boulnois	[n.d.]	Violoncelle. 5e année, no.1	vc, pf	"à monsieur Louis Feuillard" (cap.)	E.M.S.6720	760.8/Mu/ 4-5-1-1
319	Boulnois, Joseph 1884-1918	Trois pièces pour violoncelle et piano. En Espagne / Joseph Boulnois	[n.d.]	Violoncelle. 5e année, no.1	vc, pf	"à mon frère" (cap.)	E.M.S.6721	760.8/Mu/ 4-5-1-2
320	Boulnois, Joseph 1884-1918	Trois pièces : pour violoncelle et piano. Hymne à Bacchus / Joseph Boulnois	[n.d.]	Violoncelle. 5e année, no.1	vc, pf	"à Gérard Hekking" (cap.)	E.M.S.6722	760.8/Mu/ 4-5-1-3
321	Jullien, René	Sonate pour violoncelle et piano / René Jullien	c1925	Violoncelle. 5e année, no.1	vc, pf	op. 30. "à Fernand Pollain"	E.M.S.6642	760.8/Mu/ 4-5-1-4
322	Corrette, Michel 1707-1795	La servante au bon tabac : quatuor (ou quintette) pour 3 violons et piano avec violoncelle non obligé / Corrette ; réalisation de la basse chiffrée et révision par J. Peyrot et J. Rebufat	[n.d.]	Ensemble. 5e année, no.1	3vn, pf, vc ad libitum	"Edition nationale de musique classique"	E.M.S.2919	760.8/Mu/ 5-5-1-5
323	Dupin, Paul 1865-1949	Poèmes pour quatuor à cordes (1re suite) / Paul Dupin	c1909	Ensemble. 5e année, no.1	str qt	"à madame Jean Cruppi" (cap.). Contents : A. La mort d'Oncle Godfried. B. Bienvenu au petit.	S.R. et Cie.2565	760.8/Mu/ 5-5-1-2
324	Indy, Vincent d' 1851-1931	Quintette en sol mineur pour 2 violons, alto, violoncelle et piano / Vincent d'Indy	c1925	Ensemble. 5e année, no.1	pf qnt	op. 81. "au fidèle ami Paul Poujaud" (cap.)	E.M.S.6666	760.8/Mu/ 5-5-1-1
325	Klingsor, Tristan 1874-1966	Petite suite pour 2 violons / Tristan Klingsor	[n.d.]	Ensemble. 5e année, no.1	2vn		E.M.S.6710	760.8/Mu/ 5-5-1-4

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示(作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ、部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
326	Royer, Étienne 1865-1949	Pour le temps de la moisson : quatuor pour 2 violons, alto et violoncelle / Étienne Royer	c1919	Ensemble. 5e année, no.1	str qt		M.S. & Cie.3777	760.8/Mu/ 5-5-1-3
327	Zanetti, Gasparo 16..?-1660	Danses à quatre parties : extraites de "Il Scolaro" / G. Zanetti ; [révision par J. Peyrot et J. Rebufat]	[n.d.]	Ensemble. 5e année, no.1	str qt	"Edition polulaire française ; Ecole ancienne"	M.S. et Cie.3120	760.8/Mu/ 5-5-1-6
328	Brillouin, Jacques	Prélude et fugue pour le piano./ Jacques Brillouin	c1925	Piano. 5e année, no.2	pf	"à mademoiselle Andrée Vorabourg" (cap.)	E.M.S.6846	760.8/Mu/ 1-5-2-3
329	Clementi, Muzio 1752-1832	Sonates VIII et XVII / Clementi ; révision et annotations par Amédée Gastoué	c1917	Piano. 5e année, no.2	pf	"Edition nationale"	M.S. & Cie.5229	760.8/Mu/ 1-5-2-8
330	Collet, Henri 1885-1951	Chants de Castille. 2me recueil : pour piano / Henri Collet	c1922	Piano. 5e année, no.2	pf	"à mon ami Raoul Laparra"(cap.). Contents: I. Amorosa. II. Romanza. III. Ronda. IV. Bolero. V. Humorada.	E.M.S.4735	760.8/Mu/ 1-5-2-4
331	Collet, Henri 1885-1951	Danzas castellanas = Danses castillanes : pour piano : op. 75, nos. 1 à 4 / Henri Collet	c1925	Piano. 5e année, no.2	pf	"à Joaquin Nin" (cap.). Contents: 1. La Tarara. 2. Seguidilla. 3. Habanera. 4. Bulgalesa.	E.M.S.6838	760.8/Mu/ 1-5-2-7
332	Malipiero, Gian Francesco 1882-1973	Poemetti Lunari : per pianoforte / G. Francesco Malipiero	c1918	Piano. 5e année, no.2	pf	"alla memoria del Pittore Gugliermo Talamini"	3791	760.8/Mu/ 1-5-2-1
333	Monfred, Avenir H. de 1903-1974	Sur les dents de sa grand'mère = On his grandmother's teeth / Avenir H. Monfred	c1925	Piano. 5e année, no.2	pf	"à mon ami Alexandre de Quesnel" (cap.)	E.M.S.6657	760.8/Mu/ 1-5-2-5
334	Seroux, Maurice de	Hommage à Claude Debussy : pour piano / Maurice de Seroux	c1925	Piano. 5e année, no.2	pf		E.M.S.6885	760.8/Mu/ 1-5-2-6
335	Vierne, Louis 1870-1937	Solitude : poème en quatre parties pour piano, op. 44 / Louis Vierne	c1925	Piano. 5e année, no.2	pf	"En ex-voto à la mémoire de mon bien-aimé frère René Vierne organiste de N.-D.-des Champs à Paris, mort pour la France le 29 mais 1918"	E.M.S.6832	760.8/Mu/ 1-5-2-2
336	Bretagne, Pierre 1881-1962	Les vœux secrets : pour chant et piano / Pierre Bretagne ; poèmes de Pierre Xardel	c1925	Chant et Piano. 5e année, no.2	v, pf	Contents: I. Nous avons respiré sur la lande marine. II. Tu viendras un jour.... III. Je me sens près de vous à cause d'une fleur. IV. Ton silence ma bien-aimée....	E.M.S.6848	760.8/Mu/ 2-5-2-6
337	Cettier, Pierre 1874-?	Deux mélodies / P. Cettier	[n.d.]	Chant et Piano. 5e année, no.2	v, pf	Contents: I. A une femme / L. Bouilhet. II. Les trois roses / F. Coppée.	E.M.S.6765	760.8/Mu/ 2-5-2-7
338	Chaumont, Émile 18..?-19..	Adoration / Emile Chaumont ; paroles de Jean Lahor	c1925	Chant et Piano. 5e année, no.2	v, pf	"à ma soeur Thérèse" (cap.)	E.M.S.6839	760.8/Mu/ 2-5-2-4
339	Déré, Jean 1886-1970	Les saintes du Paradis / Jean Déré ; poème de Rémy de Gourmont	c1925	Chant et Piano. 5e année, no.2	v, pf	"à la mémoire de madame la vicomtesse de Préval" (cap.) . Contents: Dédicace. Agnès. Colette. Françoise. Marie. Zite.	E.M.S.6840	760.8/Mu/ 2-5-2-5
340	Honegger, Arthur 1892-1955.	Judith : drame biblique en trois actes. Prière / de René Morax ; [musique d'] Arthur Honegger	c1925	Chant et Piano. 5e année, no.2	v, pf		E.M.S.6903	760.8/Mu/ 2-5-2-1
341	Tcherepnine, Nicolas 1873-1945	Joyzelle au jardin. Fragment du 2e acte : pour chant et piano / Nicolas Tcherepnine ; M. Maeterlinck	c1925	Chant et Piano. 5e année, no.2	v, pf		E.M.S.6837	760.8/Mu/ 2-5-2-2
342	Witkowski, Georges-Martin 1867-1943	Quatre poèmes pour chant et orchestre, extraits du "Coeur innombrable", op. 25. II. La journée heureuse. / G. M. Witkowski ; [poèmes de la] Comtesse de Noailles	c1925	Chant et Piano. 5e année, no.2	v, pf	"à Claire Croiza" (cap.)	E.M.S.6834	760.8/Mu/ 2-5-2-3
343	Benda, Franz 1709-1786	Presto pour violon et piano / F. Benda ; révision et réalisation de la basse chiffrée par Emile Chaumont	c1925	Violon. 5e année, no.2	vn, pf	"à madame Henriette Schmidt" (cap.). "Edition nationale"	E.M.S.5403	760.8/Mu/ 3-5-2-4
344	Lebrun, Raymond 1953-	Sonate pour piano et violon, op. 48 / Raymond Lebrun	c1924	Violon. 5e année, no.2	vn, pf	"à Léon Zighéra". Contents: I. Très modéré - Rude et rythmé. II. Lent et triste - Consolateur - Vif et gai. III. Energique et agité - Plus calme.	E.M.S.6588	760.8/Mu/ 3-5-2-3

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
345	Marcilly, Paul 1890-1982	L'oiseau en fête : scherzo-capriccio pour violon et piano / Paul Marcilly	c1925	Violon. 5e année, no.2	vn, pf	"à Marcel Darieux" (cap.)	E.M.S.6847	760.8/Mu/ 3-5-2-2
346	Tansman, Alexandre 1897-1986	Sonata quasi una fantasia : pour piano et violon / Alex. Tansman	c1925	Violon. 5e année, no.2	vn, pf		E.M.S.6841	760.8/Mu/ 3-5-2-1
347	Homberg, Jeanne Octave 1884-1946	Sonate pour piano et violoncelle / J. Homberg	c1925	Violoncelle. 5e année, no.2	vc, pf	"à André Lévy" (cap.)	E.M.S.6831	760.8/Mu/ 4-5-2-1
348	Hussonmorel, Valéry 1851-1937	Sonate pour violoncelle seul avec 2e violoncelle ad libitum / V. Hussonmorel	c1925	Violoncelle. 5e année, no.2	vc, vc ad lib	"à, et pour, messieurs Auguste et Louis Ruyssen" (cap.)	E.M.S.6842	760.8/Mu/ 4-5-2-2
349	Zocarini, Matteo, 18.sc.	1er concertino pour violoncelle avec acct. de piano / Zocarini ; réalisation de la basse par Walter Morse Rummel ; recueilli et annoté par Marguerite Chaigneau	c1920	Violoncelle. 5e année, no.2	vc, pf	"Edition nationale"	5247	760.8/Mu/ 4-5-2-3
350	Dupuis, Albert 1877-1967	Quatuor en ré mineur [pour] piano, violon, alto, violoncelle / Albert Dupuis	c1925	Ensemble. 5e année, no.2	pf qt		E.M.S.6830	760.8/Mu/ 5-5-2-1
351	Kullmann, Alfred	Quatuor pour violon, alto, violoncelle et piano / Alfred Kullmann	c1925	Ensemble. 5e année, no.2	pf qt		E.M.S.6845	760.8/Mu/ 5-5-2-2
352	Blancafort, Manuel 1897-1987	El parc d'atraccions : pour piano / M. Blancafort	c1926	Piano. 6e année	pf	"à Ricardo Viñes"	E.M.S.6973	760.8/Mu/ 1-6-8
353	Cras, Jean 1879-1932	Deux impromptus pour harpe (ou piano) / Jean Cras	c1926	Piano. 6e année	harp/pf	"à Pierre Jamet"	E.M.S.7101	760.8/Mu/ 1-6-3
354	Honegger, Arthur 1892-1955	Pacific 231 : mouvement symphonique / Honegger ; transcription pour piano 2 mains par Borchard	c1926	Piano. 6e année	pf	"à Andrée Vaurabourg"	E.M.S.7028	760.8/Mu/ 1-6-2
355	Kœchlin, Charles 1867-1950	Nouvelles sonatines pour le piano, op. 87, no. 1 / Ch. Koechlin	c1926	Piano. 6e année	pf	"à Mademoiselle Edmée Ortmans"	E.M.S.7058	760.8/Mu/ 1-6-4
356	Kœchlin, Charles 1867-1950	Nouvelles sonatines pour le piano, op. 87, no. 2 / Ch. Koechlin	c1926	Piano. 6e année	pf	"à Mademoiselle Eliette Meynieu"	E.M.S.7059	760.8/Mu/ 1-6-5
357	Kœchlin, Charles 1867-1950	Nouvelles sonatines : pour le piano, op. 87, no. 3 / Ch. Koechlin	c1926	Piano. 6e année	pf	"à Jaques-Dalcroze"	E.M.S.7060	760.8/Mu/ 1-6-6
358	Kœchlin, Charles 1867-1950	Nouvelles sonatines : pour le piano, op. 87, no. 4 / Ch. Koechlin	c1926	Piano. 6e année	pf	"à Madame Fleury - Monchablon"	E.M.S.7061	760.8/Mu/ 1-6-7
359	Komitas, Vardapet 1869-1935	Danses / recueillies et mises en musique par le R. P. Komitas ; titres par R. Ehiehmanian	c1925	Piano. 6e année	pf	"à Madame C. Laloy-Babaïan"	E.M.S.6895	760.8/Mu/ 1-6-1
360	Rey-Andreu, E. 1875-1930	14e nocturne pour piano / E. Rey-Andreu	[n.d.]	Piano. 6e année	pf	"à Madame Reymonde Blanc-Daurat"	E.M.S.7079	760.8/Mu/ 1-6-12
361	Saminsky, Lazare 1882-1959	Deuxième conte : pour piano / Lazare Saminsky	c1927	Piano. 6e année	pf	"à Lillian Morgan Saminsky"	E.M.S.7069	760.8/Mu/ 1-6-9
362	Saminsky, Lazare 1882-1959	Vision : pour piano / Lazare Saminsky	c1926	Piano. 6e année	pf	"à Lillian Morgan Saminsky"	E.M.S.7068	760.8/Mu/ 1-6-10
363	Woollett, Henry 1864-1936	Impressions de voyage : 3 pièces pour piano / H. Woollett	[n.d.]	Piano. 6e année	pf	"à Marcel Ciampi"	E.M.S.7015	760.8/Mu/ 1-6-11
364	Berthet, François 1873-1956	Dissolution : pour chant et piano / François Berthet ; prose de Paul Claudel	[n.d.]	Chant et Piano. 6e année	v, pf	op.14-5. "à Charles Panzéra" (cap.)	E.M.S.7076	760.8/Mu/ 2-6-7
365	Castelnuovo-Tedesco, Mario 1895-1968	Étoile filante : pour chant et piano / Mario Castelnuovo-Tedesco ; poème de G. Jean Aubry	[n.d.]	Chant et Piano. 6e année	v, pf	"à G. Jean Aubry"	E.M.S.7107	760.8/Mu/ 2-6-1
366	Komitas, Vardapet 1869-1935	Quatre mélodies populaires. Cahier II / recueillies et mises en musique par le R.P. Komitas ; traduction de Archag Tchobanian	c1925	Chant et Piano. 6e année	v, pf	Contents: 1. Garoun = Printemps. 2. Oror = Berceuse. 3. Tchinar es = Complainte d'amour. 4. Es aroun = Chant d'amour.	E.M.S.6896	760.8/Mu/ 2-6-2
367	Pillard, Albert Pillard 1894-1976	Souvenir : d'après un poème oriental / Albert Pillard ; paroles de Madéa	[n.d.]	Chant et Piano. 6e année	v, pf		E.M.S.6920	760.8/Mu/ 2-6-6
368	Poniridy, Georges, 1892-1982	Six mélodies populaires grecques pour chant et piano / G. Poniridy	c1926	Chant et Piano. 6e année	v, pf	Contents: I. Le petit vaisseau. II. Berceuse I. III. Les rochers de Agrafa. IV. Berceuse II. V. Chant de pleureuse. VI. I Papadia.	E.M.S.7080	760.8/Mu/ 2-6-3

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示(作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ、部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
369	Roesgen-Champion, Marguerite 1894-1976	Trois duos pour mezzo-soprano et contralto / Marguerite Roesgen-Champion ; poèmes de Théodore de Banville	[n.d.]	Chant et Piano. 6e année	Mez, A, pf	Contents: I. Odelette. II. La muse. III. Ballade pour les Parisiennes.	E.M.S.7051	760.8/Mu/2-6-4
370	Roger, Jean	C'est la fin ... : pour chant et piano / Jean Roger ; paroles de Edmée Almagia	[n.d.]	Chant et Piano. 6e année	v, pf	"à madame Colette Salles"	E.M.S.7077	760.8/Mu/2-6-11
371	Saminsky, Lazare 1873-1959	En sourdine, du cycle Verlaine : pour chant et piano / Lazare Saminsky ; [poème de Paul Verlaine]	c1926	Chant et Piano. 6e année	v, pf	op. 5 no.3	E.M.S.7066	760.8/Mu/2-6-8
372	Saminsky, Lazare 1873-1959	Tes cheveux : pour chant et piano / Lazare Saminsky ; poème de Gaston Dru	c1926	Chant et Piano. 6e année	v, pf	op. 18b. "à madame le comtesse Gaston Dru de Mongelaz" (cap.)	E.M.S.7067	760.8/Mu/2-6-9
373	Trémois, Marcel 1891-1974	Mélodies. Deuxieme recueille / Marcel Trémois	c1926	Chant et Piano. 6e année	v, pf	Contents: Elégie. Guitare. Chanson. Chant bachique. La feuille.	E.M.S.6862	760.8/Mu/2-6-5
374	Vellones, Pierre 1889-1939	La cantique des cantiques : 8 poèmes pour soprano, ténor et basse chantante avec accompt. de flûte et basson / Pierre Vellones ; [adaptation poétique de Jean Lahor] ; transcription pour piano et chant	c1926	Chant et Piano. 6e année	v, pf	"à Maurice Ravel" (cap.)	E.M.S.6876	760.8/Mu/2-6-10
375	Witkowski, Georges-Martin 1867-1943	Quatre poèmes pour chant et orchestre : extraits de ""Coeur innombrable"", de la comtesse de Noailles. No.3 : Le jardin et la maison / Musique de G. M. Witkowski	c1925	Chant et Piano. 6e année	v, pf	"au poëte" (cap.)	E.M.S.6835	760.8/Mu/2-6-12
376	Chaumont, Émile 18..?-19..	Burlesque : danse moderne : pour violon et piano / Emile Chaumont	[n.d.]	Violon. 6e année	vn, pf	"à cher ami O. Y. Englebert"	E.M.S.7024	760.8/Mu/3-6-2
377	Devreese, Godefroid	Sonate pour violon et piano / Godefroid Devreese	c1926	Violon. 6e année	vn, pf	"à Emille Chaumon". "En souvenir de la soirée du 14 Mars 1924 donnée pour Monsieur et Madame H. L. "	E.M.S.7025	760.8/Mu/3-6-5
378	Reinach, Léon	Sonate en ré mineur pour violon et piano / Léon Reinach	c1925	Violon. 6e année	vn, pf	"à la comtesse Paul de Leusse"	E.M.S.6667	760.8/Mu/3-6-4
379	Royer, Étienne 18..?-c1..	Quatre pièces pour violon ou flûte et piano / Etienne Royer	c1926	Violon. 6e année	vn/fl, pf	"à Marcel Herwege"	E.M.S.7102	760.8/Mu/3-6-3
380	Tansman, Alexandre 1897-1986	Sonatine pour flûte et piano (ou violon et piano), op. 25 / Alexandre Tansman	c1926	Violon. 6e année	fl/vn, pf	"à Louis Fleury"	E.M.S.7050	760.8/Mu/3-6-1
381	Ehrmann, R 1887-1949	Sonate pour piano et violoncelle / R. Ehrmann	[n.d.]	Violoncelle. 6e année	vc, pf	op. 30. "au maître Vincent d'Indy"	E.M.S.7020	760.8/Mu/4-6-5
382	Herrera, Florentino L.	Trina : pour violoncelle et piano / Florentino L. Herrera	c1925	Violoncelle. 6e année	vc, pf	op. 10. "Sketch pour violoncelle et piano" (cap.)	E.M.S.6809	760.8/Mu/4-6-6
383	Lowther, T.	Sonata pour violoncelle et piano / T. Lowther	c1925	Violoncelle. 6e année	vc, pf		E.M.S.6778	760.8/Mu/4-6-3
384	Monnikendam, Marius 1896-1977	Sonate pour violoncelle et piano / Marius Monnikendam	c1926	Violoncelle. 6e année	vc, pf	"à Sem Dresden directeur du conservatoire d'Amsterdam." (cap.)	E.M.S.6975	760.8/Mu/4-6-2
385	Raynal, Adrien 1887-1949	Larghetto : esquisse religieuse pour violoncelle et piano / Adrien-Raynal	[n.d.]	Violoncelle. 6e année	vc, pf	"à mon ami Paul Bazelaire"	E.M.S.7078	760.8/Mu/4-6-4
386	Vermeulen, Matthys 1888-1967	Première sonate pour violoncelle et piano / Matthys Vermeulen	c1926	Violoncelle. 6e année	vc, pf	"à Ernst Lévy, en temoignage d'affection et de reconnaissance" (cap.)	E.M.S.7176	760.8/Mu/4-6-1
387	Berthet, François 1873-1956	Premier quatuor pour 2 violons, alto & violoncelle / François Berthet	c1926	Ensemble. 6e année	str qt	op. 12. "à Gabriel Fauré, mon maître "	E.M.S.7103	760.8/Mu/5-6-4
388	Erb, Marie-Joseph 1858-1944	Quatuor en fa majeur pour 2 violons, alto et violoncelle / M. J. Erb	[n.d.]	Ensemble. 6e année	str qt		E.M.S.6613	760.8/Mu/5-6-3
389	Rieti, Vittorio 1898-1994	Quartuor en fa majeur pour 2 violons, alto & violoncelle / Vittorio Rieti	c1926	Ensemble. 6e année	str qt	"au Quatuor Pro Arte"	E.M.S.7130	760.8/Mu/5-6-2

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示 (作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ 部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
390	Vivaldi, Antonio 1678-1741	Sonates en concert. sonate VI / Antonio Vivaldi ; réalisation en concert de la basse continue par Vincent d'Indy	c1926	Ensemble. 6e année	vc, str	l'édition originale pour violoncelle et basse continue a été recueillie et annotée par Marguerite Chaigneau	E.M.S.5406	760.8/Mu/ 5-6-5
391	Ysaÿe, Théophile 1865-1918	Quintette pour 2 violons, alto, violoncelle et piano/ Théo Ysaÿe	c1926	Ensemble. 6e année	pf qnt	op. 5. "à Émile Chaumont"	E.M.S.6943	760.8/Mu/ 5-6-1
392	Blancafort, M 1897-1933	Pastoral en sol pour piano / M. Blancafort	c1927	Piano. 7e année	pf		E.M.S.7323	760.8/Mu/ 1-7-6
393	Fairchild, Blair 1877-1933	Cinq chants nègres pour piano / Blair Fairchild	c1927	Piano. 7e année	pf	"à monsieur et Madame Jacques Durand" (cap.). Published by Durand & Cie., Paris.	D. & F.11,274	760.8/Mu/ 1-7-5
394	Honegger, Arthur 1892-1955	La Neige sur Rome : pour piano : extrait de la musique de scène pour "l'Impératrice aux rochers" de St-Georges de Bouhélier / A. Honegger	c1926	Piano. 7e année	pf	Prélude de l'acte II (cap.).	E.M.S.6888-7478	760.8/Mu/ 1-7-3
395	Indy, Vincent d' 1851-1931	Contes de fées, op. 86. V. Ronde des villageois / Vincent d'Indy	c1926	Piano. 7e année	pf	"à mademoiselle Berthe Duranton". Published by Rouart, Lerolle et Cie., Paris.	R.L.11580(5) & Cie.	760.8/Mu/ 1-7-1
396	Laparra, Raoul 1876-1943	Lore Dantzariak = les Fleurs qui dansent : 10 morceaux pour piano à quatre mains. No.2 : Iatsia Pherdia = La fougère / Raoul Laparra	c1927	Piano. 7e année	pf 4 hands	"à Pierre Loti". Published by Enoch et Cie, éditeurs, Paris	E. & C.8517	760.8/Mu/ 1-7-10
397	Ravel, Maurice 1875-1937	Five o'clock fox-trot : fantaisie extraite de "L' enfant et les sortilèges" / par Henri Gil-Marchex ; Maurice Ravel	c1927	Piano. 7e année	pf	Title from caption. Published by Durand & Cie., Paris.	D. & E.11,098	760.8/Mu/ 1-7-2
398	Roesgen-Champion, Marguerite 1894-1976	Faunesques : pour piano / Marguerite Roesgen-Champion	[n.d.]	Piano. 7e année	pf	à Suzanne Waegeli. Contents: I. Faunesque. II. Les rêves de Pan. III. Chèvre-pieds.	E.M.S.7088	760.8/Mu/ 1-7-9
399	Sauguet, Henri 1901-1989	La chatte : ballet en un acte de M. Sobeka d'après un mythe d'Esope. Invocation à Aphrodite / Henri Sauguet	c1927	Piano. 7e année	pf	Published by Rouart, Lerolle et Cie., Paris.	R.L.11614 & Cie.	760.8/Mu/ 1-7-8
400	Turina, Joaquín 1882-1949	Verbena Madrileña = Foire Madrilène / Joaquin Turina	c1927	Piano. 7e année	pf	Contents: I. La verbena (Foire). II.Columpios (Escarpolettes). III. Caballitos (Chevaux de bois). IV. Cortejo procesional (Cortège religieux). V. Baile castizo (Danse castillane). Published by Rouart, Lerolle et Cie., Paris.	R.L.11619 (1-5) & Cie.	760.8/Mu/ 1-7-4
401	Vredenburg, Max 1904-1976	Six pièces pour piano / Max Vredenburg	c1927	Piano. 7e année	pf	"à monsieur Henri Geraedts" (cap.). Contents: I. Prélude. II. Pastorale. III. Scherzo. IV. Triste, V. Vif et rythmée. VI. Presto."	E.M.S.7418	760.8/Mu/ 1-7-7
402	Bréville, Pierre de 1861-1949	La cloche fêlée / P. de Bréville ; poème de C. Baudelaire	c1926	Chant et Piano. 7e année	v, pf	"pour mademoiselle Lina Falk " (cap.). Published by Rouart, Lerolle et Cie.	R.L.11588 & Cie.	760.8/Mu/ 2-7-2
403	Fornerod, Aloys 1890-1965	Deux mélodies : pour chant et piano / Aloÿs Fornerod	c1927	Chant et Piano. 7e année	v, pf	Contents: I. Chanson. II. Le microbe Botulinus.	E.M.S.7274	760.8/Mu/ 2-7-10
404	Gil-Marchex, Henri 1892-1970	Dans l'interminable ennui de la plaine ... : pour chant et piano / Gil-Marchex ; poésie de Paul Verlaine	[n.d.]	Chant et Piano. 7e année	v, pf	"à Suzanne Englebert" (cap.)	E.M.S.7374	760.8/Mu/ 2-7-8
405	Gil-Marchex, Henri 1892-1970	Le Rideau de ma voisine ... : pour chant et piano / Gil-Marchex ; poésie de Alfred de Musset	[n.d.]	Chant et Piano. 7e année	v, pf	"à Charles Panzera" (cap.)	E.M.S.7375	760.8/Mu/ 2-7-9
406	Honegger, Arthur 1892-1955	Trois chansons : extraites de "La petite sirène" d'Andersen / Arthur Honegger ; paroles de René Morax	c1927	Chant et Piano. 7e année	v, pf	"à Régine de Lormoy" (cap.)	E.M.S.7342	760.8/Mu/ 2-7-1
407	Lazăr, Filip 1894-1936	Trois pastorales : d'après St. O. Iosif : [pour] chant et piano / Filip Lazăr ; traduction française de Em. Ciomac	c1927	Chant et Piano. 7e année	v, pf	"à Alfred Alessandresco" (cap.). Published by Durand & Cie.	D. & F.11,258	760.8/Mu/ 2-7-6

	作曲者名(標目)	タイトル、著作者表示(作曲者、編曲者、校訂者、作詞者等)	刊年	シリーズ、部編・巻次	編成	注記(Notes)	楽譜プレート番号	請求記号
408	Pol', Vladimir 1875-1962	Sept melodies russes. 1. La foret murmure / Vladimir Pohl ; textes français et anglais de l'auteur	c1927	Chant et Piano. 7e année	v, pf	"à monsieur N. Trilling" (cap.). poésie de Ostrowski.	E.M.S.7123	760.8/Mu/2-7-11
409	Pol', Vladimir 1875-1962	Sept melodies russes. 2. Pantelei le Guerissur / Vladimir Pohl ; textes français et anglais de l'auteur	c1927	Chant et Piano. 7e année	v, pf	"à madame Anne Yann Roubane" (cap.). poésie du comte A. Tolstoï (cap.).	E.M.S.7128	760.8/Mu/2-7-12
410	Pol', Vladimir 1875-1962	Sept melodies russes. 3. Le Soleil baise la terre / Vladimir Pohl ; textes français et anglais de l'auteur	c1927	Chant et Piano. 7e année	v, pf	"au Prince Michel Volkonsky" (cap.). poésie del. Severianine (cap.).	E.M.S.7127	760.8/Mu/2-7-13
411	Quinet, Fernand 1898-1971	2 chants hébraïques / F. Quinet	c1927	Chant et Piano. 7e année	v, pf	"à Madeleine Grey" (cap.). Contents: Adonaï el rahoum (Chant traditionel hébraïque). Kabbarath chabbath (Chant palestinien).	E.M.S.7292	760.8/Mu/2-7-3
412	Quinet, Fernand 1898-1971	2 chansons populaires juives / F. Quinet	c1927	Chant et Piano. 7e année	v, pf	recueilles par Madeleine Grey (cap.). Contents: I. Cha still. II. Der Rebe Elimelech.	E.M.S.7293	760.8/Mu/2-7-4
413	Sauvrezis, Alice 1885-1946	L'angoisse des steppes : pour chant et piano / A. Sauvrezis ; paroles de Constantin Balmont	[n.d.]	Chant et Piano. 7e année	v, pf	"à Madam Blanc-Andra"	E.M.S.7352	760.8/Mu/2-7-7
414	Witkowski, Georges-Martin 1867-1943	L'Innocence : pour chant et piano / G.M. Witkowski ; poème de la comtesse de Noailles	c1927	Chant et Piano. 7e année	v, pf	"à Magdeleine et Charles Panzera".	E.M.S.7371	760.8/Mu/2-7-5
415	Ravel, Maurice 1875-1937	Sonate pour violon et piano / Maurice Ravel	c1927	Violon. 7e année	vn, pf	"à Hélène Jourdan Morhange" (cap.). Published by Durand & Cie., Paris.	D. & F.11,273	760.8/Mu/3-7
416	Gagnebin, Henri 1886-1977	Sonate en la pour violoncelle et piano / Henri Gagnebin	c1927	Violoncelle. 7e année	vc, pf	"à Henry Buenzod"	E.M.S.7368	760.8/Mu/4-7-3
417	Kowalsky, Alfred	Quatre tableaux en forme de variations sur un thême russe : pour piano et violoncelle / Alfred Kowalsky	c1927	Violoncelle. 7e année	vc, pf	"à monsieur Maurice Dambois"	E.M.S.7157	760.8/Mu/4-7-2
418	Voormolen, Alexander 1895-1980	Romance pour violoncelle et piano / Alex. Voormolen	c1927	Violoncelle. 7e année	vc, pf	"à madame Judith Bokor" (cap.). Published by Rouart, Lerolle et Cie., Paris.	R.L.11585 & Cie.	760.8/Mu/4-7-1
419	Cras, Jean 1879-1932	Trio pour violon, alto et violoncelle / Jean Cras	c1927	Ensemble. 7e année	str trio	"à Carmen Forté, Pierre Brun et Louis Fournier"	E.M.S.7213	760.8/Mu/5-7-3
420	Dedieu-Peters, Madeleine	2me quatuor à cordes pour 2 violons, alto et violoncelle / Madeleine Dedieu-Péters	c1927	Ensemble. 7e année	str qt	"à mon maître Georges Caussade"	E.M.S.7834	760.8/Mu/5-7-4
421	Ropartz, J. Guy 1886-1977	3me quatuor en sol majeur pour deux violons, alto et violoncelle / J. Guy. Ropartz	c1926	Ensemble. 7e année	str qt	"à G. M. Witkowski". Published by Durand & Cie., Paris.	D. & F.10,982	760.8/Mu/5-7-1
422	Turina, Joaquín 1882-1949	Trio pour piano, violon, et violoncelle / Joaquin Turina	c1926	Ensemble. 7e année	pf trio	"à son Altesse Royale l'Infante Doña Isabel de Borbon". Published by Rouart, Lerolle et Cie., Paris.	R.L.11592 & Cie.	760.8/Mu/5-7-2
423	Vivaldi, Antonio 1678-1741	Sonates en concert. Sonate IV / Antonio Vivaldi ; réalisation en concert pour orchestre à cordes par Vincent d'Indy ; recueillie et annotée par Marguerite Chaigneau	c1927	Ensemble. 7e année	vc, str	"Edition nationale"	E.M.S.5407	760.8/Mu/5-7-5
424		Supplément littéraire et critique	c1923	3e année, No. 5				1923-1-S
425		Supplément littéraire et critique	c1923	3e année, No. 6				1923-2-S
426		Supplément littéraire et critique	c1924	4e année, No. 7				1924-1-S
427		Supplément littéraire et critique	c1924	4e année, No. 8				1924-2-S
428		Supplément littéraire et critique	c1925	5e année, No. 9				1925-1-S
429		Supplément littéraire et critique	c1925	5e année, No. 10				1925-2-S

南葵音楽文庫　紀要　第３号

令和２年３月31日発行
令和３年８月10日改訂

発　　行　和歌山県立図書館
〒641-0051　和歌山県和歌山市西高松一丁目７番38号
電話　073-436-9500
http://www.lib.wakayama-c.ed.jp/

編集協力　有限会社ティアンドティ・デザインラボ
〒531-0071　大阪市北区中津七丁目３番２号１階
http://www.ttdesign.co.jp/

印刷製本　株式会社 協和
〒642-0017　和歌山県海南市南赤坂五丁目３番
http://www.kk-kyowa.jp/

©2020-2021 Wakayama Prefectural Library

本紀要には、地球環境を考慮した
植物油インキを使用しています。